

323  
606

5 6 7 8 9 0<sup>m</sup> 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

始





文學博士兒島獻吉郎著

本文  
位法

漢文釋法

東京帝國書院

大正  
14. 6. 9  
寄贈

寄贈本

## 例言

- 一 本書は、必ずしも體裁上の完備を希求するものでない。たゞ初學の士に文法上の智識を供給し、解釋上に誤解なく謬見なきを期望するのが、本來の目的である。
- 一 説明の順序は、必ずしも淺きより深きに入り、低きより高きに登ってゐない。たゞ自分で最も必要と感じ、最も大切と思ふ所を随時に叙述したものである。
- 一 本書の編纂に就いては、旅順中學校教諭瀧澤俊夫君に負ふ所が頗る多大である。自分は、茲に更めて感謝の意を同君に表する次第である。
- 一 自分は、本書に對して讀者諸賢の忌憚なき批評を切望すると同時に、本書の内容に關する質疑に對しては、歡んでこれに應ずるものである。

大正十二年五月

著者識す

本文位法 漢文釋法 目次

文法篇

第一章 文章法……………一

第一節 文の成分……………三

一 主語及び主部……………三

二 述語及び述部……………六

三 客語……………九

四 補語……………二

五 修飾語と文の要素……………四

六 要素の排列……………七

第二節 句……………一八

目次

第三節 文の種類……………三

一 單文……………三

二 複文……………五

三 重文……………九

第四節 文の省略と變則……………三

第五節 文の形態……………四

一 叙説文……………四

二 咏歎文……………五

三 命戒文……………六

四 疑問文……………六

第二章 語法……………九

一

第一節	名詞	七	第一節	同字異用	三七
第二節	代名詞	七	第二節	異字同用	四七
第三節	動詞	七	<b>文字篇</b> 一 類字表……………一四 二 一字數音例……………一四 三 字音假名遣表……………一八 四 俗字及び正字表……………一九 五 同字表……………一九 <b>餘論</b> 第一章 漢字の起源……………一九 第二章 六書……………一九		
第四節	形容詞	八			
第五節	副詞	八			
第六節	助動詞	九			
第七節	前置詞	九			
第八節	後置詞	一〇			
第九節	接續詞	一〇			
第十節	終詞	一三			
第十一節	感歎詞	一三			
文法表		二二			
第三章	用字法	二七			

A B C

第三章	漢字の發達	一〇一
第四章	漢字の特長	一〇四
第五章	音と訓	一〇六
第六章	反切と平仄	一一〇
第七章	字數と熟語	一一五
X第八章	字書	一二七
第九章	漢文讀法	一三三
第十章	句讀、返點及び送假名法	一三〇
第十一章	漢籍解題一斑	一三七

本文法 漢文釋法

文學博士 兒島獻吉郎 著

\*\*\*\*\*  
\*\*\* 文 法 篇 \*\*\*  
\*\*\*\*\*

第一章 文章法

文章とは、文字によりて表現せられたる思想の謂にして、文字(表意文字)即ち各種の品詞が集合して、纏りたる思想を表示せるものである。

文字の集團は讀を作り、句をなし、章を成し、篇をなして、完全に一團の思想を表現する。文章の正確とは、内面的には思想の誤謬なく、外形的には文法上の過誤なきを意味する。

文法は主として、章句に現はれたる一般法則を研究するものにして、解剖的には文字の性質及び用法、即ち各品詞に就きて其の法則を究め、総合的には文の成立、即ち文の構造に付きて其の聯絡關係に於け

文法篇 文章法

る原則を究むるものである。これを文章法と語法とに分ちて説明するを普通とする。此の二者は互に相補ひて、始めて文の完全なる構造を會得するもの、文章法と語法とは常に不可分離のものである。さて文法は、表示せられたる章句の上に於てのみ、其の構成の當否を攻究するものなることは、前述の通りであるが、苟も思想そのもの、根柢に於て矛盾する所があれば、如何に文の形態を具備するも、到底完全なる文章といふことはできぬ。こは偶々構想の誤謬が、文法上の形式に抵觸せざりしのみで、少しく根本に溯つて思想の経路過程に注意する所あらば、直ちに着想上の誤謬を看破して、單に文章の形態のみによりて迷はさるゝことを免れ得るものである。

文法はこれら思想の内容に亘りて説く所はなけれども、思想發表の形式を體得せしめて、工夫發明する所あらしめんとするものである。故に此の篇によりて、文章構成の根本と、文字用法の大意を知り、正確なる思想發表の形式を悟りて、漢作文及び復文に應用し、文章の解釋に適用して遺憾なきを期し、よく熟讀記誦して、徒勞を避け、讀習難を一蹴し、練々の餘裕を以て易々漢文を讀破せんことを望む。便宜上此の篇を分ちて文章法、語法、川字法の三とす、就中文の構成を知らしむるを主眼とするが故に、文章法に主力を注けども、用字法も亦細説するの勞を厭はず。語法は簡單に其の要點を概説するに止む。これは我が國文典と殆ど同一なる單語法を省きて、漢文に特有なる用字及び文の構造に就きて、讀者に十分なる知識を授けんが爲めである。此の篇の終りに、各品詞及び文章法の和漢英の對照表を掲げたる

は、讀者の比較に便にせんとするものである。願はくば此の篇の通讀後、表によりて既習の概括をなし、他の文法と比較して記憶を確實にすることを望む。

### 第一節 文の成分

文章は必ず其の主題となるべき主語と、其の題目の説明をなす述語とを有するものである。此は何れの國語にも共通の事實にして、但その文の構造を異にするのみである。此の書に於ては、敢て漢文法特殊の文法用語を用ひずして、邦文法の術語を其のまゝ襲用する。これは、徒に複雑なる名稱に煩はさるゝを恐れるからである。然しながら最後の表は、其の比較對照の用に供するの目的なるを以て、特に漢文法上の稱呼を用ふ。

主語 述語  
君子不憂。孟子。 主語 述語  
人莫知其子之惡。大學。

#### 一 主語及び主部

主語 一文章を統率する主格たる語にして、名詞・代名詞・及び名詞句より成り、必ず文の首位を占め、我が助詞のハ・ガに接續するものである。但し漢文讀法にては、多くの場合此の助詞を省略することがある。

名詞主語

將門大悅。上皇夜幸。外史。

代名詞主語

吾十有五而志于學。論語。

名詞句主語

滅六國者六國也。士之修身立節而竟不遇知己。前古已來不可勝數。八家文。

名詞代名詞疊用主語

點汝如何。論語。

古之君子其責己也重以周。八家文。

代名詞疊用主語

彼其能有所忍也。彼其娶於呂氏。八家文。

「其・此」の代名詞を他の代名詞に連ね用ふる時は、「其・此」と讀みて、強意の辭の如く見做せども、これは前述のやうに主語として用ひられたもので、實際「其・此」又は「其・此」と讀むべきものであつて、同時に強意の用をも兼ねる。故に假令訓むには「其・此」と讀みても、意味は「其・此」と見るべきものである。

主部

主語は單一なる名詞・代名詞の他に、名詞句よりも成ることあるは、前にも陳べた通りである。

名詞・代名詞は形容詞を伴ひて複雑となり、動詞を連ねて、文の形をなして而も他の文の一部となり、副詞を加へて更に煩雜となる。かくの如く單純なる主語を中心として、種々の語の添はりて成りたる文の主格を總稱して主部といふ。固より主語は主部に包含せらるゝものにして、主語のみの場合は、此の二者を兼ねたるものと見るのである。

位置

主語は文の首位にあるを原則とする。主部の文中に於ける位置も、亦主語と同じである。主語たる

名詞・代名詞に形容詞の加はる時は、多くは主語の上に接する。副詞も亦主語の上に来ること多く、動詞を有する名詞句にては、間と動詞の上に直接する。動詞の客語及び補足語は、其の動詞の下に、助動詞は上に連接する。

接續主語

佛、本夷狄之人。釋老之徒過於場墨。文章軌範。

形容詞主部

陛下所居之位祖宗之位也。文章軌範。

副詞

壬戌之秋七月既望蘇子與客泛舟。文章軌範。



主部

大丈夫不遇於時者之所爲也。八家文。

感歎詞のあるものは獨立句の如く主語の上に孤立的に置かれる。時には又感歎文の述語は、主語若くは主部の上に位する。疑問文にても屢々述語が上に來る。

嗚呼、汝病吾不知時。

八家文。

借乎夫子之說君子也。

何哉爾所謂達者。

論語。

此の外、動詞の「有」我が形容詞の「無・罔・母・莫」、及び形容詞「多・少・寡・鮮」などは、主語の上に位するものである。但し後の「多・少」の類は、上下便宜に従つて置かるゝものゝやうである。これ等は次の述語の條に説くこととする。

二 述語及び述部

述語 主題たる主語、若くは主部の説明をなして、完全なる思想を發表するものを述語といふ。即ち主語に屬して、其の性質・形狀・動作・作用・存在・數量を言ひあらはすものにして、動詞・形容詞・形容句がこ

れである。漢文にては、名詞も亦他の助詞の助を藉りて述語の位置に立つ。されば名詞句の述部たり得るは、これより推して知るべきである。

動詞述語

忠臣正成死。

尊氏叛。

日本外史

天地位焉、萬物育焉。

中庸

形容詞述語

天地之道博也、厚也、高也、明也、悠也、久也。中庸。

霸者之民驩虞如也、王者之民皞皞如也。孟子。

名詞述語

仁人之安宅也、義人之正路也。孟子。

舜大聖人也。八家文。

天地者萬物之逆旅也、光陰者百代之過客也。李白桃李園序。

名詞述語は、名詞にて他の名詞、或は代名詞の性状を表明するものにして、此の場合の述語となれる名詞は、殆ど形容詞に等しき役目をなせるものである。而して此の名詞の下に、大抵終詞「也」を伴ふ。或は此の故に「也」を動詞の用をなすものとし、此の間なる名詞を補足語の如く見るものもある。

**述部** 單一なる動詞・形容詞・名詞の述語以外に、副詞・助動詞・前置詞・代名詞・後置詞・接續詞・等の添加して、説明を完全にせんとする複雑なる句を形成するものがある。この全體を名づけて述部といひ、主部に相對す。

**位置** 述語又は述部は、主語若くは主部の下位に接續するを通則とする。

主部 述部  
不仁者不可久處カウチシクルニ約。論語。

孟子不能救之於未亡之前。八家文。

述語の動詞・形容詞に副詞の加はるものは、直ぐ上に、助動詞も亦動詞の上に接する。この副詞と助動詞の位置によりて、意義に大なる相違を來す、こは後の語法及び用字法に於て説くこととする。動詞の客語及び補足語を要するものは、其の直ぐ下に連接することは前にも述べた。述部は主部の下にあるのを原則とするものなれども、疑問文・感歎文に於ては主部の上に位することあるは、主語の位置の條に述べた。

動詞「有」形容詞「無」も主語の上に位すること、既述の如くである。しかしながら、強意の文に於て、代名詞「之」を形式主語として「有・無」の下に置く時は、實際の主語は此の動詞の上に来る。感歎文にも亦動詞「有」が一般の原則を破つて主語の下に来ることがある。

主部 述部  
臣弑其君者有之。孟子。

主部 述部  
苗而不秀者有矣哉。論語。

主部 述部  
不好犯上而好作亂者未之有也。論語。

三 客語

**客語** 他動詞の目的たる語を客語といふ。而して助動詞を伴ふを常とすれども、其の附くものは悉く客語なりとはいへない。渡河下出の如きは、我が動作が至り及ぶ意にもあらず、又他を俟ちて動作の完了する意を表せる語にもあらざれば、假令その助動詞を伴ふも、河・山は補足語にして客語ではない。左に客語の例を擧ぐ。

招<sup>客</sup>友。 弒<sup>客</sup>其君。 縱<sup>客</sup>使還家。 約<sup>客</sup>其自歸。 以就<sup>客</sup>死。

一箇の客語のみにてはなほ不完全にして、其の動作の及ぶ標準を示すべき語を要するものがある。これ即ち補語にして、特に名づけて第二客語と呼ぶことがある。自動詞の補語は、主格と同一物を指す主格補語にして、第二客語は、不完全他動詞の目的を補ふ賓格補語であるのを異なる點とする。

主述 客 第二客 主述 二客 客

哀公問<sup>客</sup>社於宰我。 論語 子路<sup>客</sup>魯大師樂。

主述 二客 客

冉子與<sup>客</sup>之粟五秉。

論語。

右の與・問・語の外に教・贈・賜等の語がある。同じく第一客語の他に第二客語を要するもので、「何」のみにては不分明で、必ず「何」を伴はねばならぬ。

主述 客 補 主述 客 補

水<sup>客</sup>爲<sup>客</sup>蒸氣。 彼<sup>客</sup>謂<sup>客</sup>殺<sup>客</sup>麥。 (他動詞)

右は不完全なる自動詞と、不完全なる他動詞との例にして、等しく補語を要するものである。第二客語と稱するは、畢竟不完全他動詞の補足語にして、授與・教問・贈賜等の人為動作の標準たる語の謂である。

位置

客語は直接其の動詞の下に位するものである。然れども、不完全他動詞にては、其の位置は必ずしも一定せず。補語(第二客語をも含む)を客語の下に置く時は、前置詞「於」を必要とし、補語が動詞の下に在りて、客語が補語の下に在る場合は、決して前置詞を用ひない。

主述 補 客 主述 補 客

吾與<sup>客</sup>友。 哀公問<sup>客</sup>宰我<sup>客</sup>社。

主述 客 補 主述 客 補

哀公問<sup>客</sup>社於宰我。 父與<sup>客</sup>書於子。

されども又補語を客語の下に置く時、稀には前置詞を省くこともある。けれどもこれは能く前後の文意を考へて用ひなければ、往々人に誤解されることがある。又不完全他動詞の客語は、屢々動詞の上、主語の位置にあることがある。

客述 補 客述 補

是爲<sup>客</sup>漢高祖。 是謂<sup>客</sup>蝌蚪之文。

尤も「世人謂<sup>客</sup>之爲<sup>客</sup>漢高祖」「呼<sup>客</sup>之謂<sup>客</sup>蝌蚪之文」の變形と見れば、甚だ了解し易い。

主語の省かれたる跡に客語を引上げて、動詞の上に置くことがある。こは其の客語の語氣を強めて、人の注意を喚び起こさんとする爲めである。故に客語にして特に提示する必要あるものは、動詞の上の主

語の位置に置き、間、動詞とその間、若くは其の動詞の下位に、代名詞「之」を入れる。

客述 客述 客述 客述  
 生不<sub>レ</sub>知<sub>ラ</sub>。 菽麥不<sub>レ</sub>辨<sub>セ</sub>。 非禮勿<sub>レ</sub>視<sub>カレ</sub>。 非禮勿<sub>レ</sub>聽<sub>カレ</sub>。 論語。  
 天命之謂<sub>レ</sub>性。 率<sub>レ</sub>性之謂<sub>レ</sub>道。 修道之謂<sub>レ</sub>教。 中庸。

四 補語

補語 不完全なる自動詞、及び他動詞の標準を示して、文の意義を完全ならしむるものを補語といふ。客語と共に述部の一要素である。客語と同様に、名詞・代名詞・名詞句より成り、助詞「ニ」「ト」に接続する。稀に客語の如く「ヲ」に接するものもある。

主述 述補 副述 補  
 氷解而爲<sub>レ</sub>水。 咸臣順於朝。 孟子。  
 動客 補  
 全<sub>ク</sub>之於已壞之後。 八家文。 此之謂<sub>レ</sub>大丈夫。 孟子。  
 前置詞を伴ふ連語も補語となるものである。

主 補 述 客  
 聖人與<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>同<sub>ク</sub>類。 孟子 令尹子元歸<sub>レ</sub>自伐<sub>レ</sub>鄭。 左傳。

漢文にては、名詞も亦述語の用をなすものなることは前にも述べた。されば邦文法にて、指定の助動詞「ナリ」「タリ」と續<sub>ル</sub>る名詞の連語を述語とするに、漢文にては名詞代名詞をそのまま述語とする。又邦文法にて「如」を比<sub>レ</sub>の助動詞となせども、漢文法にては、動詞として自他二様の働を有するものと見るを便利とする。「如」は自他共に不完全なる動詞なれば、何れも補語を必要とする。

主 述  
 彼秦棄<sub>レ</sub>禮儀<sub>ヲ</sub>上<sub>ニ</sub>首級<sub>ニ</sub>之國也。 戰國策。

主 述  
 孟嘗君特鷄鳴狗吠之雄耳。 八家文。

主 述 補  
 千羊之皮不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>一狐之腋。 史記。

主 述 補  
 逝者如<sub>レ</sub>斯。 論語。 如<sub>レ</sub>之何。

位置 客語の所にて述べた通り、動詞の下に直接する。其の客語との先後は、通常客語を先にして、補

語との間に前置詞を挿む。補語が代名詞なるか、或は極めて單純なる時は、客語の先に置きて前置詞を省く。不完全自動詞にても補語には前置詞を伴ふを通例とすれども、誤解を招く恐なきものは省略に従ふ。名詞が前置詞に承接して、動作行爲の場所・方向・比較等を表はすものがある。これも亦補語である。然れども、時を表はす副詞と同じく、動詞若くは主語の上に位して場所を表はすものは、これを區別して特に副詞とする方が混亂を避け得て處理し易い。

不<sub>レ</sub>求<sub>ニ</sub>聞<sub>達</sub>於<sub>諸</sub>侯<sub>一</sub>。運<sub>ニ</sub>百<sub>璧</sub>於<sub>齋</sub>外<sub>一</sub>。蒙<sub>求</sub>。

金<sub>重</sub>於<sub>羽</sub>。孟<sub>子</sub>。議<sub>ニ</sub>國<sub>際</sub>聯<sub>盟</sub>於<sub>巴</sub>里<sub>一</sub>。

倒裝文にては、前置詞を中軸として補語と動詞と其の位置を換へる。又補語が前置詞に伴はれて、動詞の上に出づることがある。こは後に説明する。

衣<sub>食</sub>於<sub>奔</sub>走<sub>一</sub>。與<sub>レ</sub>我<sub>不</sub>同<sub>一</sub>。

### 五 修飾語と文の要素

修飾語 主語・述語・客語・補語等に添加して、其の意義を制限し修飾する語の謂にして、體言、即ち名

詞・代名詞に冠する形容詞的修飾語と、**用言**、即ち動詞・助動詞・形容詞に冠する副詞的修飾語とに分つ。形容詞的修飾語は、形容詞・名詞・動詞の形容詞的轉用・形容詞句の連體修飾語がこれである。副詞的修飾語は、名詞及動詞の副詞的轉用・副詞・副詞句の連用修飾語がこれである。

然後<sub>知</sub>其<sub>非</sub>棟<sub>梁</sub>之<sub>材</sub>。超<sub>逸</sub>之<sub>足</sub>也。**古文眞寶**。

汗<sub>馬</sub>之<sub>勞</sub>。暮<sub>而</sub>果<sub>大</sub>亡<sub>其</sub>財<sub>一</sub>。其<sub>家</sub>甚<sub>知</sub>其<sub>子</sub>。疑<sub>ニ</sub>鄰<sub>人</sub>之<sub>父</sub>。韓<sub>非</sub>子。

豈<sub>不</sub>下<sub>眞</sub>知<sub>ニ</sub>輕<sub>重</sub>ニ<sub>大</sub>丈<sub>夫</sub>上<sub>哉</sub>。八<sub>家</sub>文。

有<sub>ニ</sub>顏<sub>同</sub>者<sub>不</sub>幸<sub>短</sub>命<sub>死</sub>矣。論<sub>語</sub>。

**提語起** 副詞的修飾語は往々獨立句の如く冒頭に置かれる。これを提起語といふ。これも中間の語を隔てて、用言を制限する副詞に外ならぬ。

昔<sub>者</sub>吾<sub>友</sub>嘗<sub>從</sub>事<sub>於</sub>斯<sub>一</sub>矣。論<sub>語</sub>。

副修主副述補 近執事始被召於陳州 八家文。

副修主述補 少焉月出於東山之上 赤壁賦。

位置 修飾語は必ず修飾せらるる語の上に在るを原則とする。又或語句を隔てて修飾することのあるは前述の通りである。

修 朝聞道夕死可矣 論語。

君子不以其所以養人者害人 八家文。

文の要素 思想を完全に發表せんが爲めには、必ずや主語と述語とを備ふるを要する。即ち主語と述語とは文の骨子にして、不可缺のものであるからである。更に述語の一團なる述部を檢するに、其の述語が他動詞なれば必ず客語を要し、自他共に不完全なる時は補語を必要とする。故に述部を分ちて述語の外に、客語・補語となすことが出来る。之に主語を加へて文の四要素となす。されば文は主語・述語の最短なる二語より、延いては客語の三語、若くは補語の四語より成るものである。而してこれらの客語・補

語も、結局述語に附屬して存するものなれば、要するに文は主部・述部よりなるものである。されど以上の主部・述部より成る文も、單一なる主語・述語のみによりて成立することは實際稀である。必ず之に添加して其の意義を制限する修飾語を伴うて、文章をより完全に美しく表現するもので、此の意味に於て修飾語も亦須要なる役目を有するものである。然しながら、修飾語は文の要素と異り、之を缺くも其の成立を損することなく、獨立的に文の一部を構成するものではない、唯修飾せらるる語に附屬して、其の意味を限定するに過ぎない。故に修飾語は文の要素の外に置くのである。

六 要素の排列

主部・述部・客語・補語の文中に於ける位置は、各其の項に於て説明したれば、茲には省略して、和漢英の比較表を示すに止める。尙又、變則なる場合の要素の位置も、既に述べたれば固より略することとする。

和	主	述
漢	主	述
英	主	述

和	主	補	客
漢	主	述	補
英	主	述	補

和	主	補	客	述
漢	主	述	客	補
英	主	述	客	補

和	修主	修客	修補	修述
漢	修主	修述	修補	修客
英	修主	述修	修客	修補

和	修主	修補	修客	修述
漢	修主	修補	修述	修客
英	修主	修述	修補	修客

第二節 句

句 主語と述語とを備へて、而も一個の文として獨立せずして他の文に連り、又は其の文の一部分をなせるものを名づけて句といふ。

句の種類 文の單位として形の上より分つ時は、主句・附屬・獨立句の三種となる。文としての完全なる形態を有し、而も上部附屬句、若くは他の條件によりて結ばるる句を主句といひ、多くは附屬句の下に置かれる。主語・述語を有すれども、其の獨立を失ひて、單に他の文の一部分たるに過ぎざるものを附屬句と名づける。こは主として主句の上に位し、又主語と述語との中間に挟まれて其の原因・條件等を表はす。主語・述語を有して未だ完全なる終結をなさず、他と互に相連接して長き文の一部分をなせるものを獨立句といふ。されどこは附屬句の如く下句或は他文の條件をなさず、互に意義の上に獨立して相對

す。但讀解上文意を終結せずして中止し、更に他に移る勢を養ふ所とする。因に我が文法の句といふは、漢文の所謂讀に當る。

附屬句 主句

無<sup>キ</sup>所<sup>ノ</sup>遇<sup>フ</sup>者、非<sup>ズ</sup>計<sup>策</sup>之<sup>拙</sup>。續文範。

獨立句

居<sup>ハシ</sup>移<sup>レ</sup>氣、養<sup>ハス</sup>移<sup>レ</sup>體、大<sup>ナル</sup>哉居<sup>乎</sup>。孟子。

獨立句

宋<sup>ノ</sup>穆<sup>公</sup>疾、召<sup>シテ</sup>大<sup>司</sup>馬<sup>孔</sup>文、而<sup>屬</sup>之<sup>瘡</sup>公<sup>焉</sup>。左傳。

文の成分たる要素、若くは修飾語として句を分類する時は、名詞句・形容詞句・副詞句の三となる。名詞・代名詞・動詞・助動詞・副詞・形容詞・接續詞・前置詞等が相纏りて主部・述部の形をなし、而も體言即ち一個の名詞の用をなすものを名詞句といひ、體言を修飾するものを形容詞句、用言を修飾するものを副詞句といふ。其の文中に於ける位置は、それら名詞・形容詞・副詞に異なる所はない。

句と文 文が其の獨立を失ひて句となるには、一、屬尾的助字「者」を伴ふとき、二、主語・述語の間に屬尾的助字「之」を挿むとき、三、假定の接續詞「縱・若・雖」等が主語の下に来るとき、四、句の形は文と異なる所なれども、當然文の意義の上よりすれば、其の文の一部分たるに過ぎずして獨立する能はざる

と云ふ。

一名詞句

王公貴人所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>養<sub>ニ</sub>其身<sub>一</sub>。精豈不<sub>レ</sub>全哉。八家文。

主語

文字之衰<sub>レ</sub>。未有<sub>レ</sub>如下<sub>ニ</sub>今日<sub>一</sub>者也。八家文。

述語

夫孝者善繼<sub>ニ</sub>人之志<sub>一</sub>、善述<sub>ニ</sub>人之事<sub>一</sub>者也。中庸。

必也臨<sub>レ</sub>事而懼好<sub>レ</sub>謀而成<sub>レ</sub>者也。論語。

客語

原<sub>レ</sub>莊宗之所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>天下<sub>一</sub>、與其所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>之者、可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之矣。八家文。

二形容詞句

主語

凡所<sub>レ</sub>遭患難變故、屈辱譏謗拂逆之事、皆天之所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>老<sub>ニ</sub>吾才<sub>一</sub>。言志錄。

客語

求<sub>ニ</sub>於滑人<sub>一</sub>、得<sub>ニ</sub>公之孫容所<sub>レ</sub>錄<sub>一</sub>家傳。八家文。

三副詞句

獨立

舜爲<sub>ニ</sub>天子<sub>一</sub>、臯陶爲<sub>ニ</sub>士<sub>一</sub>、瞽瞍殺<sub>レ</sub>人如<sub>レ</sub>之何。孟子。

楚子將<sub>レ</sub>圍<sub>レ</sub>宋使<sub>ニ</sub>子文<sub>一</sub>治<sub>ニ</sub>兵于睢<sub>一</sub>。左傳。

述語

親見<sub>ニ</sub>其事<sub>一</sub>、忽忽<sub>トシテ</sub>仰<sub>レ</sub>天歎息、以爲<sub>レ</sub>斯人之去<sub>レ</sub>、而道雖<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>復足<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>榮也。八家文。

四獨立句の幾つも相並びて、結局最後の句を修飾するものは、長く連りたる一個の副詞に等しき用をなすものである。

以<sub>レ</sub>力假<sub>レ</sub>仁者霸、霸必有<sub>ニ</sub>大國<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>德行<sub>レ</sub>仁者王、王不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>大、湯以<sub>ニ</sub>七十里<sub>一</sub>、文王以<sub>ニ</sub>百里<sub>一</sub>。孟子。

一、徒譽<sub>レ</sub>我者不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>喜、徒毀<sub>レ</sub>我者不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>怒。言志叢錄。

吾所<sub>レ</sub>與<sub>ニ</sub>戰<sub>一</sub>者寡矣。孫子。

二、此天下偉男子之所<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>、非<sub>レ</sub>拘<sub>ニ</sub>牽常算<sub>一</sub>之士所<sub>レ</sub>到也。人皆忘<sub>ニ</sub>往年之既去<sub>一</sub>、而圖<sub>ニ</sub>次年之未<sub>レ</sub>來<sub>一</sub>、

舍<sub>ニ</sub>前目之已過<sub>一</sub>、而慮<sub>ニ</sub>後日之將<sub>レ</sub>至<sub>一</sub>。言志叢錄。

三、趙若將<sub>レ</sub>括必破<sub>ニ</sub>趙軍<sub>一</sub>。十八史略。



四、括至<sup>レ</sup>軍、果<sup>シテ</sup>爲<sup>ニ</sup>秦將白起<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>射殺<sup>セ</sup>。十八史略。

第三節 文の種類

主語・述語を有する完全なる思想の表現を文と稱することは既述の如くである。我が文は漢文の所謂句で二字以上集まれば即ち文を成すものである。然しながら數十字を連ねて、なほ獨立の意義を有せずして句を成すものがあることを思へば、文は文字の數によらざるものと知るべきである。簡單なる文は單純なる思想をこそ表示すれ、よく複雑なる一大思想を表はし得べくもない。故に思想が大に錯雜すればする程、文も随つて其の複雑を加へる。かくて吾人の精神生活は略遺憾なく表現し得られる。されど思へ、千變萬化極りなき大文章も、最も取るに足らずとなす一單文の集合に外ならざるを。雄渾の思想、絢爛の筆彩、これを解剖すれば個々の單純なる思想の一集團のみ。故に眞に單文の法則に通曉すれば、如何なる文章をも其の單位に分解して、決して惑ふ所はないのである。讀者は先づ此の文を成す所の大綱・原理たる單文を十二分に理解して、然る後に他を顧み、徐ろに比較しつゝ歩を進むべきである。物の原理は極めて單純なるが故に、往々輕んじ勝で、直ちに複雑なる其の應用に入らんとするは初學者の免れ難き所である。然しながら原理は原理にして應用にあらず、原理を稍解し得たりとて、萬般の應川に當りて自ら努めざるものは、終に世用とならずして終る。これを喩へば音樂の原理は音の變化、八

音の反復のみ、裁縫の原理は缺と針の運用のみといはば、それは極めて容易なることの如くなれども、一生を擧げてなほ其の奥妙に達せざるもの多きを思へば、思半ばに過ぐるものがあらう。文を其の形態の上より分ちて、單文・複文・重文の三種とする。

一 單文

單文 とは主語・述語の關係が單に一回成立せるのみの文をいふ。されば如何に長き文章なりとも、主語・述語が一個宛、若くは其の何れかが一箇なる時は、いふまでもなくこれに屬する。客語・補語は述語の動詞に附屬して存するものにして、述語に包括せらるゝものなることは既述の如くで、尙修飾語の要素外に扱ふべきことも重ねて述べるまでもない。

主述 主述 主述  
鳥啼。 花開。 月出。 弟讀<sup>レ</sup>書。  
主述 主述 主述  
月出<sup>ニ</sup>於<sup>リ</sup>東山之上。 賢材舉。 天下之賢材皆已<sup>ニ</sup>舉用<sup>セラル</sup>。

一箇の説明語に對して二箇の主語のあるもの、及び二箇の説明語に對する一箇の主題のもの等、何れも單文なることは、前に主語・述語の關係が一回成立せるものは單文であるといふ定義の所に於て述べた通り

である。故に主語・述語の何れが一箇なる時は、其の他の幾箇なるかを問はずして單文なることは明かである。

主 主述

吾與<sub>レ</sub>回言<sub>フ</sub>。論語。

主 主述

吾與<sub>レ</sub>子漁<sub>ニ</sub>樵<sub>ス</sub>於<sub>ニ</sub>江渚<sub>之上</sub>。赤壁賦。

副 主 主述

曰<sub>ク</sub>、伯夷伊尹何如。孟子。

主 主述

君子周而不<sub>レ</sub>比。論語。

主 主述

子釣而不<sub>レ</sub>網。論語。

主 主述

夫子臥而不<sub>レ</sub>聽。孟子。

以上の如く二箇の主語、若くは述語あるも、互に相連絡して一箇の主語の如く、將又一箇の述語の如く、

結局一箇の思想に歸するが故に、形態の上より一箇として扱ふを便なりとする。又場合によりて、同一主語を有する層疊的單文は、其の共通の主語を省きて、第一句にのみこれを置く。かくて多くの述語を有するに至るも、主語は一のみにして齊しく單文として取扱ふ。

主 主述

弟子入<sub>レ</sub>則<sub>チ</sub>孝、出<sub>レ</sub>則<sub>チ</sub>弟、謹<sub>ミテ</sub>而信。論語。

主 主述

弟子入<sub>レ</sub>則<sub>チ</sub>孝、弟子出<sub>レ</sub>則<sub>チ</sub>弟、弟子謹<sub>ニシテ</sub>而信。

主 主述

大德<sub>ハ</sub>必得<sub>ズ</sub>其位<sub>ニ</sub>、必得<sub>ズ</sub>其祿<sub>ニ</sub>、必得<sub>ズ</sub>其名<sub>ニ</sub>。中庸。

主 主述

大德<sub>ハ</sub>必得<sub>ズ</sub>其位<sub>ニ</sub>、大德<sub>ハ</sub>必得<sub>ズ</sub>其祿<sub>ニ</sub>、大德<sub>ハ</sub>必得<sub>ズ</sub>其名<sub>ニ</sub>。

## 二 複文

複文 一文中に主語・述語各二個以上を含むものを複文といひ、一文中に句を含むか、或は主句と附屬句とより成る所の文の謂である。

主述 主述 主述 主述

意正 而後心正。 心正 而後身修。 大學。

其人存 則其政舉、其人亡 則其政息。 中庸。

成立 句の項に於て、文が其の獨立を失つて附屬句となることを説いたが、複文は多くはかくして成立するものである。

一、句が連鎖的に並列せられて、獨立を失ひ文の一部分となれるもの。

一家仁 一國興、仁、一家讓 一國興讓。 大學。

二、主語の他に代名詞「其」等を置きて、而も主語を代名せしむるもの。

主 述  
二公之賢 其講 之精矣。 八家文。

主 述  
古之君子 其過也 如日月食。 孟子。

三、屬尾的助字、「者」に接屬する一團を主部となすもの。

主部 主部  
臣 弑其君者 有之。 知命者 不立乎巖牆之下。 孟子。

四、屬尾的助字、「之」を客語・若くは主語の中に挿むもの。

客 述  
子曰 惡紫之奪朱也。 惡鄭聲之亂雅樂也。 惡利口之覆邦家也。 論語。

客 述  
民惟恐王之不好勇。 孟子。

主部 述部  
夫子之不可及也 猶天之不可階而升。 語論

五、關係助動詞「所」によりて接續せられたる客語・補語・主語を有するもの。

客 補  
吾不忍爲公所爲。 史記。

補 述  
不爲好事者所見、爲樵夫野人所薪。 八家文。

以上は主部・述部、若くは文の中間に更に主語・述語を有する句を含めるものにして、主句と屬句とより

成る。其の屬句の位置は一般的には規定し難いものである。左に述べんとするものは、これと稍趣を異にし、文が他の文と接續詞を介して相關係するもの、即ち其の原因と結果、或は假定と推論、乃至は事實と反對と、相竣ちて文の表現を一層切實ならしめんとするものである。大抵屬句を上主句を下に置く。

六、接續「而」に連るもの。

附 主句

水洳而石出。 八家文。

附 屬句

主句

附 屬句

二國之君感而相謂曰我等小人不可履君子之庭。 小學。

七、接續詞「則」に連るもの。

附 主句

財聚則民散、財散則民聚。 大學。

附 屬句

君子篤於親則民與於仁。 論語。

八、接續詞「雖」に連るもの。

附 屬句

胸中雖有知識家無錢財。 八家文。

主句

道雖成不復以爲榮也。 八家文。

附

主句

雖以生人殺人之權求一言之幾。

九、「若・如」等を接續詞とするもの。

附 屬句

王侯若能守萬物將自賓。 老子。

附 屬句

如知其非義斯速已矣。 孟子。

一〇、「斯」を則と同様に接續詞として用ふるもの。

附 屬句

君行仁政斯民親其上。 孟子。

附 屬句

其言訥斯謂之仁矣乎。 論語。

三 重文

二箇以上の獨立句の連れる文を重文といふ。切放せば疑もなく各完全なる一箇の文となるべきものでありながら、形式上或は他の條件によりて、互に連絡關係を有するものである。換言すれば單文の集合せるもので、文と文とを繋ぐに接續詞、若くは用言の中止形を以てしたものである。但複文の如く主文と從屬文との如き關係にあることなく、各獨立したる意義を有する。

事修而誇興、德高而毀來。 八家文。

兵刃既接、棄甲曳兵而走、或百步而後止、或五十步而後止。 孟子。

一、句毎に接續詞を用ふるもの。

故西戎得<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>肆<sub>ニ</sub> 其猖狂<sub>一</sub>、而吾無<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>應<sub>ニ</sub> 則其勢不得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>重賂<sub>一</sub>而求<sub>レ</sub>和。 八家文。

光陰百代之過客、而浮世若<sub>レ</sub>夢。 續文範。

二、初句に接續詞を用ふるもの。

伯樂一過<sub>ニ</sub>冀北之野<sub>一</sub>、而馬群遂空、夫冀北馬多<sub>ニ</sub>天下<sub>一</sub>。 八家文。

往者 天子方有<sub>レ</sub>意<sub>ニ</sub>於治<sub>一</sub>、而范公在<sub>ニ</sub>相府<sub>一</sub>、富公爲<sub>ニ</sub>樞密副使<sub>一</sub>、執事與<sub>ニ</sub>余公蔡公<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>諫官<sub>一</sub>。 八家文。

三、終句に接續詞を用ふるもの。

取<sub>レ</sub>之無<sub>レ</sub>禁、用<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>竭、是造物者之無盡藏也、而吾與<sub>レ</sub>子之所<sub>ニ</sub>共適<sub>一</sub>。 八家文。

民不得<sub>ニ</sub>耕種<sub>一</sub>、米石至<sub>ニ</sub>萬<sub>一</sub>、而豪傑金玉盡歸<sub>ニ</sub>任氏<sub>一</sub>。 同上

五、接續詞の省略。

山高<sub>レ</sub>而月小、水落<sub>レ</sub>而石出。 赤壁賦。

不<sub>レ</sub>憤<sub>レ</sub>則不<sub>レ</sub>啓、不<sub>レ</sub>悱<sub>レ</sub>則不<sub>レ</sub>發。 論語。

五、同一なる主語を有する獨立句の連りて重文をなせるものは、多くは其の一方を省略して、單文とする。されど同じく主語の省かれたるものも、全く趣を異にするものは假令文中に主語なしと雖も重文であつて、決して同一主語の省略せられたる單文を混同してはならぬ。

仕不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>貧、而<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>有時乎爲<sub>レ</sub>貧。 孟子。

人不<sub>レ</sub>知、而<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>慍。 論語。

六、一箇の主語が多くの述語を有する時、其の何れかの述語に接續詞「而・則」等を挿んで暫く語意を駐むるものがあるならば、こは重文の主語が同一なりし爲めに、他の殆ど總べてが省略せられたものである。

禹疏九河、濬濟深、而注諸海。孟子。

以上文の種類に就きて一應説きたれども、實際の文章は極めて複雑なるが故に、簡單なる引例の能く盡す所ではない。たゞ文の構造を根本的に解剖し得るの力があれば、如何に雜然たる文章も、略其の要素に分解して、速に自己の斷案を下すことが出来る。故に文の種類に就きて、先づ單文の成立を知り、而して重文・複文と單文との關係に及ぶべく、然れば茲に初めて文の基本の單文なること、及び他は其の單文の種々なる組合なることを知るであらう。

### 第四節 文の省略と變則

#### 一、主語を省くもの。

- (一) 一般の眞理又は道德に關する論説は多く主語を省く。  
 (人)學而不思則罔、(人)思而不學則殆。論語。  
 子夏曰(人)賢易色、事父母能竭其力。論語。
- (二) 命令若くは戒飭禁止の文には通常主語を省く。  
 (汝)行矣。(汝)速決之。

(汝等)過則勿憚改。(汝)無違。論語。

(三) 特に答語を述語の上に置きて注意を促す文。

(彼)殺麥不辨。論語。

(人呼)是爲高皇帝。

(四) 對話文に於ては大抵冒頭の外の主語を省く。

(子貢)曰伯夷叔齊何人也、(子)曰(伯夷叔齊)古之賢人也。(子貢)曰(伯夷叔齊)怨乎、(子)曰(伯夷叔齊)求仁得仁、(伯夷叔齊)又何怨乎。論語。

(五) 重文の同一なる主語を省きて單文の形とするもの。

天地之道博也。(天地之道)厚也。(天地之道)高也。(天地之道)明也。(天地之道)悠也。(天地之道)久也。中庸。

南方多没人。日與水居也。(没人)七歲而能涉。(没人)十歲而能浮。(没人)十五而能沒矣。八家文。

(六) 複文の主句の主語を省くことがある。此の場合單文の如き形をなすものも、前の重文の關係とは大に異り、句に主従の別があり、既に文の一部に主語・述語が含まれ居るものなるが故にやはり複文である。

吾少也(吾)賤。論語。

輒少而(輒)讀書、(輒)見父母之戒其子者、諄々乎惟恐其不盡也。八家文。

(七)單に主語の用をなすに止まらず、廣く文中の重要な役目をなす中樞たる語が冒頭に提示せられて、句は悉く省略せらるゝもの。

公爲<sup>リ</sup>人外<sup>ト</sup>和<sup>ニシテ</sup> 内剛<sup>ト</sup>、(公)樂<sup>シ</sup>善汎<sup>ク</sup>愛<sup>ス</sup>、(公)喪<sup>フ</sup>其母<sup>ヲ</sup>、時尙貧<sup>ナリ</sup>。(公)終<sup>ル</sup>身非<sup>ズ</sup>賓客<sup>ニ</sup>、食不<sup>レ</sup>重<sup>ク</sup>肉<sup>ヲ</sup>。(公)臨<sup>シ</sup>財好<sup>シ</sup>施<sup>ス</sup>、意豁<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>也。 八家文。

(八)重文・複文にして、文意を強く語調を急にすることが爲めに全く主語を見はさぬことがある。

(彼)不<sup>レ</sup>慣<sup>ル</sup>(則)(我)不<sup>レ</sup>啓<sup>ス</sup>、(彼)不<sup>レ</sup>排<sup>ス</sup>(則)(我)不<sup>レ</sup>發<sup>ス</sup>。 論語。

(佛老之道)不<sup>レ</sup>塞<sup>ル</sup>(則)(聖人之道)不<sup>レ</sup>流<sup>ル</sup>、(佛老之道)不<sup>レ</sup>止<sup>ル</sup>(則)(聖人之道)不<sup>レ</sup>行<sup>ル</sup>。 八家文。

(一)の條に述べたる真理又は道德上の論説に關して主語を缺くものを没主文と名づけ、其の主語は讀者の想像充填に任ずるもの、單文又は重文と形式を同じうするが如きも、全く最初より一定の主語なきを相違とする。對話・問答・命令・禁止等の文に主語を省くも、これらは前文に承接する所があるか、若くは眼前に相手を限定して互に相知れる場合になすもので、没主文の最初より全然主語を見はさざるとは稍趣を異にするのである。

二、述語を省くもの。

(一)主語は屢々略かれるに反して、述語は殆ど省略せられることはない。殊に單文の述語は全く省れないといつてもよい。若し普通に述語の位置に立つ用言がない時は、他の品詞即ち名詞・副詞・前置詞等が

各々用言の活用を兼ねて述語の位置に立つ。故に述語たる動詞・形容詞が省かれても、結局他の品詞がこれを兼ねるものであるから、述部全體が省略せられるといふことはない譯である。但し述部中の客語・補語若くは述語動詞・形容詞の部分的省略は極めて多い。

曰然<sup>ク</sup>則師愈<sup>ク</sup>(於商)與。 論語。

(有)火<sup>ニ</sup>於秦<sup>ニ</sup>、(有)黃<sup>ニ</sup>老<sup>ニ</sup>於漢<sup>ニ</sup>、(有)佛<sup>ニ</sup>於晋魏梁隋之間<sup>ニ</sup>。 八家文。

(吾)祭<sup>ル</sup>(神)如<sup>ク</sup>(神)在<sup>ル</sup>。 論語。

名詞が述語の位置に立てば、大抵は「也」を其の下に伴へども、急なる文にはこれをも省く。

逸民伯夷・叔齊・虞仲・夷逸・朱張・柳下惠・少連。 論語。

感歎・疑問の文に於て往々其の動詞を省き、唯目的たる客語若くは補語をのみ見はすものがある。

君子無<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>爭<sup>フ</sup>、必也(爭於)射乎。 論語。

何事<sup>ニ</sup>於仁<sup>ニ</sup>、必也(可謂)聖乎。 論語。

(二)複文の主句の述語を省くもの。

隗<sup>ス</sup>且見<sup>ル</sup>事<sup>ヲ</sup>、況<sup>シ</sup>賢<sup>ニ</sup>於隗<sup>ニ</sup>者<sup>ノ</sup>(不能見事)乎。 戰國策。

死馬<sup>ス</sup>且買<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>、況<sup>シ</sup>(不買)生者<sup>乎</sup>。 十八史略。

管仲猶且不可召、而況不爲管仲者(豈可召)乎。

主句屬句の述語が同一なる時は屬句のものを省くことが多い。

君子之交淡若水(淡)

季子富於周公(富) 論語。

聽訟吾猶人(聽訟)也。 論語。

(三)重文・複文にして、主要なる句の冒頭に主語・述語の完備せる時、又は其れと指示する必要を認めざる時は後の句の主語・述語・若くは客語・補語を省く。

夫顯史者昔者先王以(顯史)爲東蒙主、且(顯史)在邦域之中矣。(顯史)是社稷之臣也。 何以代(顯

史)爲。 論語。

老子者楚苦縣人也。(老子)李姓、(謂)名耳、(謂)字伯陽、又曰字聃。 十八史略。

夫珠玉金銀(人)飢不可食、(金銀珠玉)(人)寒不可衣。 續文範。

### 三、文の變則。

文の省略に就いては既に前に陳べた。此處では其の要素の省略に伴うて變化する文の構成の大要を述べようと思ふ。

引原

(一)對者の胸中に明瞭なる時は、文の要素も悉く省略せられることがある。而して省かれたる主語の位置に客語を抽出して置換するものも少くない。

(彼)菽麥不辨。 論語。

(人)(謂音)大者爲宮、(謂其)細者爲羽。 八家文。

(二)詠歎文は屢々述語を主語の上位に置く。

大哉孔子、博學而無所不成名。 論語。

難乎免於今之世矣。 論語。

君子哉若人、尙德哉若人。 論語。

(三)疑問文も亦或は述語を主語の上に置く。

何哉君所爲。 孟子。

何哉爾所謂達者。 論語。

(四)打消助動詞又は副詞を伴ふ動詞の客語、若くは補語が代名詞なる時は、動詞に先行して否定語と其の中間に位する。



然而不王者未之有也。孟子。

民莫之死也。莫之能禦也。孟子。

臣未之聞也。孟子。

(五)打消助動詞又は副詞を伴ふ他動詞の客語は、往々其の助動詞の上、主語の下に置かれる。

(君子)故舊不遺、則民不偷。論語。

寡人唯是一二父兄不能共億。左傳。

(六)補語又は客語が疑問代名詞なる時は、動詞の上、主語の下に位する。

客何好。戰國策。仲尼焉學。論語。

(七)文意を強むるが爲めに、客語或は補語が動詞の上に位して、其の中間に「之」を挿むもの。

曾山與求之間。父母唯其疾之憂。論語。

康公我之自出。(康公出自我)左傳。

(八)客語を主語に先行せしめて、代名詞「之」を形式客語として其の後に置くもの。(即ち提示客語)

夏禮吾能言<sub>レ</sub>之。論語。

巨室之所慕<sub>レ</sub>一國慕<sub>レ</sub>之。孟子。

動詞「有」を主語の下位に置く時は、代名詞「之」を形式主語として動詞の下に置くことは前に述べた所である。

臣弑<sub>ニ</sub>其君<sub>一</sub>者有<sub>レ</sub>之。子弑<sub>ニ</sub>其父<sub>一</sub>者有<sub>レ</sub>之。孟子。

(九)不完全他動詞の客語が前置詞「以」を伴ふ時は、之を動詞の上に置くものと、動詞及び補語の下に置くものがある。

孔子以<sub>ニ</sub>其兄之子<sub>一</sub>妻<sub>レ</sub>之。論語。

賊語(之)以<sub>ニ</sub>國亡<sub>一</sub>主滅。八家文。

動詞の下なる前置詞「以」は、此の場合既に動詞に轉用せられたるものにして、二箇の動詞の重用せられたるものと見るべきである。されば「以」の目的は上の動詞の客語のみとは限らない。例へば左の通りで補語の場合もある。

盛(之)以<sub>ニ</sub>錦囊<sub>一</sub>。八家文。

(一〇)不完全他動詞「謂」の客語たる代名詞「之」を動詞の上に置くものと、下にするものがある。何れも提示客語を承けて、真理・道徳に關する叙説をなすもの、既述の没主題文のそれである。動詞の上なるは斷定、下なるは假定、いつて見れば「の」心持を有するが如きも、一概に斷言し難い。

天之命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。中庸。

博愛之謂仁、行而宜之謂義。八家文。

賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘。孟子。

自誠明謂之性、自明誠謂之教。中庸。

(一一)複文に於て屬句の主語を冒頭に置き、其の後を代名詞「其」にて填充するもの。

鳥吾知其能飛、魚吾知其能游、獸吾知其能走。十八史略。

鯨之大不知其幾千里也。莊子。

(一二)與奪動詞與・賜・教・告・奪・贈・問等、又は不完全他動詞の第二客語、即ち補語の位置は客語の下に在りて、前置詞「於」を伴ふを常とすれども、代名詞なるか或は單純補語なる時は、客語の上において前

置詞を省く。

陽貨饋孔子豚。論語。

授之柄而處其下。八家文。

冉子與之粟五秉。論語。

(一三)不完全他動詞の客語が代名詞なるときは、補語を其の下に置くも往々前置詞は省略せられる。又前置詞と共に補語を動詞の上に置くことも屢々ある。後者は副詞的に用ひられたるものである。

吾聞之。八家文。

予於大舜見之矣。孟子。

君子於其所不知蓋闕如也。論語。

(一四)主語の省かれたる文に於て、補語を其の位置に提示して前置詞を脱したるもの。

(人)瓜田不納履。(人)李下不正冠。文選。

(一五)屬句の客語乃至補語は、述語動詞に先行して副詞的用法をなすものが多い。

道聽而塗說、德之棄也。論語。(聽、德于道、說、德於塗。)

狐正丘首死、仁也。禮記。(首、丘)

(一六)不完全他動詞の客語に前置詞「以」を伴ふものが補語の下に来る時は、「以」は動詞に轉じて上の他動詞を省く。

(贈)行者必以贖。孟子。

(一七)動詞「有」は主語の上に来るを原則とすれども、疑問・詠歎の文若くは代名詞「之」を形式主語とする時は、實際の主語の下に位することあるは既述の通りである。

苗而不秀者有矣夫。論語。

於從政乎何有。論語。

臣弑其君者有之、子弑其父者有之。孟子。

(一八)漢文にては最も重要な眼目の語以外は殆ど全く省略することがある。されば客語のみのもの、主語と補語のみのもの、補語のみのもの、總べて誤解を招來する懼なきものはどし／＼省かれる。

(有)年于茲。(是)四書(也)。

(有)火於秦。(有)黃老於漢。八家文。

(一九)受身の文も前後の關係上明かなれば、主句の述語及び屬句の主語並に關係代名詞を時に省略せられる。

1. 君爲臣所殺。彼爲賊所捕。勞力者爲人所治。

2. 君殺於臣。彼捕於賊。勞力者治於人。

更にこれを簡單にすれば述語は動詞のみとなる。即ち 君殺。彼捕。勞力者治。の如き、これで

ある。孟子の天下有道小德役大德、小賢役大賢は、この例に屬するものである。

### 第五節 文の形態

凡そ文章は纏りたる思想の表現なれば、或は智、或は情、或は意、若くは其れらの渾然たる精神生活の顯現である。されば大體の上より見て、智情意の何れを主とせる文なるかを知ることが困難なことではない。今其の内容上より文を區別して叙説文・詠歎文・命戒文・疑問文の四種とする普通の分類に従ひて略説する。

#### 一 叙説文

叙説文 事實・真理・及び自己の判斷を敘述し説明する所の主知の文章をいふ。故に時の過去と未來とを

問はず、肯定と否定とを論ぜず、凡そ事の原因・結果・性質・状態・理由・方法・能力・關係等に就きて記述説明するものは皆此の範圍に屬するものである。叙説文を其の思考の妥當性より分てば肯定・否定の二となり、其の必然性よりすれば推測・可能の二となり、叙述の對象よりすれば能動・受身・自發・使役の四となり、叙述の方式より順態・逆態の二となり、其の修辭的構成より假設・累加・限定・倒裝・省略の七種とな

(一)肯定 眞理・道德・事實・習俗又は判斷を記載する文にして、多くは終詞を伴ふ。

王亦曰仁義而已矣。孟子。

今天下三分、益州疲弊、此誠危急存亡之秋也。出師表。

守原政之大者也。八家文。

終詞のない文章も單に文意の急なるが爲めに省かれたるものなれば、意義は終詞ある文と殆ど同一である。

學而不思則罔、思而不學則殆。論語。

舉直錯諸枉、則民服、舉枉錯直、則民不服。論語。

(二)否定 不・非・莫・罔・母・靡・無・勿等の打消助動詞若くは打消副詞を冠して、其の然らざる意を表はす文の謂である。

無惻隱之心、非人也、無羞惡之心、非人也。孟子。

人而無信、不知其可也。論語。

夫道者無有高下遠近。八家文。

否定を二つ重ねれば、肯定にして一層文意を強めんが爲めの表現である。

自結繩之代、以及秦事、無不纂錄。八家文。

百世之下聞者莫不興起也。孟子。

(三)推測 事理の當然なる判斷及び未來の想像を述べるもの、指定助動詞の可・宜・當・須・應・將然助動詞の將・且・欲等を述語の動詞に添へて用ふ。

則遷三世、可下至萬世、而爲君。文章軌範。

霸王之名可成也、四隣諸侯可朝也。韓非子。

宜隨處隨時相緩急。言志後錄。

趙當亡而不亡、秦當霸而不霸。韓非子。

能

公亦應不忘司馬之言。南宋史。

須要及時立志勉勵。言志錄。

義務 推測文中、しかせざるべからざる意を表はすものを通常義務と呼ぶ。

未來 單純なる未來を表はすには將然助動詞を用ひ、其の否定には打消助動詞及び打消副詞を用ふ。但しこれらの全く用ひられざる文にては、前後の文脈より推量し、若くは時の副詞によりてのみ其の過去なるか、未來なるかを知り得るのである。動詞に語尾の變化がなく、隨つてこれに依つては時をも法をも知る便宜がないのである。

吾將任彼而不<sub>レ</sub>用吾力。八家文。

欲<sub>レ</sub>聞<sub>ニ</sub>切直不<sub>レ</sub>隱之言者凡<sub>テ</sub>皆以通<sub>ニ</sub>上下之情<sub>一</sub>也。八家文。

其子曰不<sub>レ</sub>築且<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>盜。韓非子。

臣於當時之文亦未<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>過<sub>レ</sub>人者。八家文。

(四)可能 能力を表はす文にして、推測を表はす助動詞は又大抵これに用ひられる。「可」を普通とし、動詞得・足等を以てもこれを表はす。

嗣子可<sub>レ</sub>輔輔之。十八史略。

上可<sub>レ</sub>坐<sub>ニ</sub>萬人下可<sub>レ</sub>建<sub>ニ</sub>五丈旗<sub>一</sub>。十八史略。

故西戎得<sub>ニ</sub>以肆<sub>ニ</sub>其猖狂<sub>一</sub>而五無<sub>ニ</sub>以應<sub>一</sub>則其勢不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>重賂<sub>一</sub>而求<sub>レ</sub>和。八家文。

苟能充<sub>レ</sub>之足以保<sub>ニ</sub>四海<sub>一</sub>苟不<sub>レ</sub>充<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>足以事<sub>ニ</sub>父母<sub>一</sub>。孟子。

副詞「能」を動詞の上に添へて可能を示し、又「能」を動詞にも用ひる。可能の否定には打消助動詞をこれらの上に置くことは他と同様である。即ち「できない」「その筈がない」等の意味を表はす。

七歲<sub>ニ</sub>而能<sub>レ</sub>涉<sub>一</sub>十歲<sub>ニ</sub>而能<sub>レ</sub>浮<sub>一</sub>十五<sub>ニ</sub>而能<sub>レ</sub>沒<sub>一</sub>矣。八家文。

子路之勇不能<sub>ニ</sub>以相移<sub>一</sub>。八家文。

(五)能動 主語が述語動詞の行爲者、乃至は作用主たる文の謂にして、本來の動詞にて表はす。

臣自<sub>レ</sub>穎移<sub>レ</sub>揚舟過<sub>ニ</sub>濠壽楚泗等州<sub>一</sub>。八家文。

孟子之少也嬉戲爲<sub>ニ</sub>墓間之事<sub>一</sub>踊躍築埋。小學。

(六)受身 主語が他より影響せらるゝ文にして、他物の意志若くは作用乃至は行爲によりて動かさるゝもの、助動詞「見・被・爲・所」、前置詞「於」等によりて表はされる。

匹夫見辱拔劍而起、挺身而鬪。 八家文。

及被配閉門不出。 皇朝史略。

世子申生爲驪姬所譖。 史記。

所殺者白帝之子。 史記。

勞力者治於人。 孟子。

居下位而不獲於上、民不可得而治也。 孟子。

複文に於ける屬句の受身は、單に動詞のみにて表はされることがある。こは主句の述語動詞と屬句の主語と關係代名詞とを省きて、直ちに主句の主語に屬句の述語を連接して單文の形となしたるものである。此の或場合には、又屬句の述語動詞が省かれたる主句の述語の位置に上ることがある。

狡兔死、走狗(爲人所烹)、飛鳥盡、良弓(爲人所藏)。 十八史略。

天下有道、小德役大德、小賢役大賢。 孟子。

天下有道、小德(爲大德所役)、小賢(爲大賢所役)。

(七)自發 自起相ともいひ、他より力を加へず、又自己の意志を須ひずして、自づからなる動作作用を

いふ。主として副詞「自」を用ふ。

蓋公之天性自然也。 八家文。

(八)使役 主語が他の人又は物をして其の動作・行爲・作用・意志を受容せしむるものにして、助動詞「使」を普通用ひ、「令・教・遣」又は「俾」なども用ひ、「シテ……シム」と訓む。但し此の時は送假名「シテ」は其の目的語に附し、只「シム」のみを「使」の右脚に施すものとす。單に「シム」なる時も之に同じ。

吾行負神明而使汝天。 八家文。

能使人人異心不爲朋莫如紂。 八家文。

吾不能扞父母乃教人叛父母可乎。 十八史略。

高大閭門令容駟馬高蓋車。 十八史略。

漢王遣張良往立信爲齊王。 史記。

(九)順態 凡そ事を叙して終始前後の次第相順接する一般の文をいふ。記事叙事説明の普通文體の基調をなすものである。

平叙 一般の記録及び叙述の文を總稱して平叙文といふ。これに肯定と否定とあることは他の文と同じ

である。

夫養<sup>レ</sup>騏驎<sup>ヲ</sup>者、豐<sup>ニ</sup>其芻粒<sup>ヲ</sup>、潔<sup>ニ</sup>其羈絡<sup>ヲ</sup>、居<sup>ニ</sup>之新閑<sup>ニ</sup>、浴<sup>ニ</sup>之清泉<sup>ニ</sup>、而後責<sup>ニ</sup>之千里<sup>ヲ</sup>。 八家文。

車中<sup>ニ</sup>、不<sup>ニ</sup>内顧<sup>セ</sup>、不<sup>ニ</sup>疾言<sup>セ</sup>、不<sup>ニ</sup>親指<sup>セ</sup>。 論語。

説明 上句を承けて其の理由・性狀を概説する文を説明文と名付ける。これ又普通に順態の形式を用ひる。接續副詞「故」、前置詞「以」、關係助動詞「所」、疑問副詞「何」と接續詞「則」の連語などを用ひ、「也」を用ひて「レバナリ」と訓む。又代名詞「此」、限定の形「耳・而已」等をも用ふ。

故曰士爲<sup>ニ</sup>知己者<sup>ニ</sup>死<sup>ス</sup>。 八家文。

此庸吏之不<sup>レ</sup>爲<sup>也</sup>也。 八家文。

所<sup>ニ</sup>爲<sup>レ</sup>説<sup>ク</sup>力少<sup>也</sup>也。 續文範。

此其所<sup>ニ</sup>以至<sup>ル</sup>之鮮<sup>也</sup>也。 八家文。

則君子所<sup>レ</sup>養可<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>已矣。 孟子。

注釋 説明文の範圍に屬するもの、中、下句を以て上句上文を説明する短かき形の文を特に注釋文といふ。正に説明文の中に包含せらるべきものである。

般禮吾能言<sup>レ</sup>之、宋不<sup>レ</sup>足<sup>レ</sup>徵<sup>也</sup>也、文獻不<sup>レ</sup>足<sup>レ</sup>故<sup>也</sup>也。 論語。

告子未<sup>レ</sup>嘗知<sup>レ</sup>義以<sup>ニ</sup>其外<sup>ニ</sup>之也。 孟子。

右は句の註釋にして、左は文字の註釋である。

政者正也。 論語。

仁者人也、義者宜也。 中庸。

(二〇)逆態 文中上下の意義相反するが如き形の句ありて平板ならざるもの。大抵反振接續詞「而・然・雖」を句頭に冠せる。而して此の形式は論説に殊に多く用ひられる。「不然」等の前意を反撥して意義を轉するものも亦これに屬する。又一に正反法といふは、正面の肯定と一面の否定と相對して一層文意を強烈ならしむるが故である。

心不<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>焉視<sup>レ</sup>而不<sup>レ</sup>見、聽<sup>レ</sup>而不<sup>レ</sup>聞、食<sup>レ</sup>而不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>其味<sup>也</sup>。 大學。

陳平智有<sup>レ</sup>餘、然<sup>レ</sup>難<sup>ニ</sup>獨任<sup>也</sup>、周勃重厚<sup>也</sup>、少<sup>レ</sup>文、然<sup>レ</sup>安<sup>ニ</sup>劉氏<sup>者</sup>必勃<sup>也</sup>。 八家文。

知<sup>レ</sup>利不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>害、雖<sup>レ</sup>去<sup>ニ</sup>其害<sup>也</sup>、害必及<sup>レ</sup>之<sup>也</sup>。 續文範。

又告<sup>レ</sup>之曰跳<sup>而</sup>越<sup>者</sup>與<sup>ニ</sup>千金<sup>也</sup>、不<sup>レ</sup>然則否<sup>也</sup>。 八家文。

増之去レ善矣、不レ去羽必殺レ増。 八家文。

(一) 比喻 或物を假りて他物と比較対照し、一層其の印象を明瞭ならしめんとする一種の修辭法にして、又比較法といふも可である。更に之が目を立つれば直喩法・隱喩法・諷喩法・比較法・換喩法等となる。直喩 「如・譬・似・猶・由・宛然」等の語によりて、明かに比較すべき類似の事物を指示せるものにして、一に又明喩ともいふ。

光陰如レ矢。 松聲似レ怒濤。

人臣之於レ人主也、如レ木之有レ根、如レ燈之有レ膏、如レ魚之有レ水、如レ農夫之有レ田、如レ商賈之有レ財。

八家文。

天下之事譬、如レ有レ物十焉。 八家文。

有レ是四端也、猶レ其有レ四體也。 孟子。

隱喩 齊しく他物を藉りて比較するも、直喩法の如く露骨に二者を對比せず、婉曲に縁類の語を置きて、一見比較せるものなきが如くにして而も一層強烈深刻なる印象を與へんとするものである。即ち「何如……」の形を取らずして直ちに「何……」の形に出づるもの。

夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客。 續文鏡。

以爲レ無益而舍レ之者、不レ耘苗者也。 助レ之長者、揠苗者也。 孟子。

君者舟也、庶人者水也。 荀子。

比較 二者を對立せしめて其の優劣差等を見はすものにして、隱喩法の全く平等なる比較と其の趣を異にする。一般に「於」を以て見はし、又「若・如・于・乎」等をも用ひる。

苛政猛レ於レ虎。 禮記。

金重レ於レ羽。 孟子。

君危レ於レ累卵。 戰國策。

負棟之柱多レ于南畝之農夫。 阿房宮賦。

祿位高レ乎人者、可レ以レ耀レ一時、而不足レ以レ傳レ百世。更相稱美推讓而不レ自疑、莫レ如レ舜之二十二臣。

八家文。

諷喩 他物に假託して暗に人事を諷刺する文にして、一に寓言ともいふ。お伽噺などに此の法を用ひて



なせるものは即ち寓話で、莊子は殊に此の筆の巧妙なる大文章である。

狡兔死 走狗烹 飛鳥盡 良弓藏 十八史略。

苗而不秀者有矣夫、秀而不實者有矣夫。論語。

有美玉於斯、韞匱而藏、求善賈而沽。論語。

換喩 異名同物を指示するもの、一に換義法ともいひ、語の單調を避く、故事は多くこれによりて生命を繋ぐ。寧ろこは單語に於て研究すべきものである。

長風破波一帆還。

我豈能爲五斗米折腰向鄉里小兒。十八史略。

(一)選擇 二者を比較して、更に其の一を擇ばんとする意を表はす形にして、接續詞「與」及び副詞「寧・無寧・無乃」或は疑問代名詞「孰・孰若」を用ひる。而して「……ト……孰レカ……」又は「……ト孰レゾ……」ヨリハ寧ロ……」「……ヨリハ……ニ孰レゾ」と訓む。常に自己の意志を表明するのみならず、二者の輕重を比較して人をして其の重きを擇ばしめるものである。

禮與食孰重。孟子。

與 其有聚斂之臣、寧有盜臣。大學。

與 其有樂於身、孰若無愛於心。八家文。

(二)假設 未だ確定せざる事件を豫想して、假りにしか定むる意を表はすものにして、使役の形に疑問詞「乎」を添ふるを普通とする。又接續詞「若・如・假」副詞「苟」などを以てもこれを書き表はす。此の時送假名は動詞の將然形に「バ」を附するものとする。若し前後の文脈上、既定の事實を見はすものなること明かなれば、動詞を已然形となして助詞「バ」に連接する。即ち前者は假定にして後者は既定の相違がある。

使 我 有 洛陽負郭田二頃、豈能佩六國相印乎。十八史略。

如 詩 不 成 罰 依 金 谷 酒 數。續文範。

若 君 子 也、必 不 妄 加 禍 於 守 道 之 人。八家文。

苟 非 樂 禍 好 亡、狂 易 喪 志、詎 敢 肆 其 胸 臆、輕 犯 人 心。八家文。

假 如 釋 氏 能 與 人 爲 禍 崇、非 守 道 君 子 之 所 懼 也。八家文。

(三)累加 或説明をなさんが爲めに、これと對立的に他の關聯せる事項を列舉して、一層其の重且つ

大なるを曉らしむるもの。「獨リ……ナルノミナラズ亦……」「管ニ……ノミナラズ又」「豈徒ニ……ノミナン乎又」などの形を普通とする。これは副詞「管・翅・止・徒・但・獨」と打消助動詞「不」とを重ね用ふるを常とし、或は打消「不」を要せざるものも少くはない。文と句、又は句と句とを接續する一法にして、多くは下句との中間に接續詞「而・亦・又」等挿む。

豈唯意<sub>ニ</sub>之<sub>レ</sub>、又從而盜<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>。 八家文。

非<sub>ニ</sub>徒無<sub>レ</sub>益而<sub>レ</sub>又害<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>。 孟子。

今之君子豈徒順<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>、又從而爲<sub>レ</sub>之<sub>辭</sub>。 孟子。

若<sub>ニ</sub>曼卿<sub>ノ</sub>者非<sub>ニ</sub>徒與<sub>レ</sub>世難<sub>レ</sub>合而不<sub>レ</sub>克<sub>レ</sub>所施<sub>ス</sub>、亦不幸<sub>ニ</sub>不得<sub>レ</sub>至<sub>乎</sub>中壽<sub>ニ</sub>。 八家文。

是不<sub>ニ</sub>但治<sub>不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>亂<sub>ヲ</sub>、而又於<sub>ニ</sub>政理<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>補<sub>ヲ</sub>。 言志錄。</sub>

使<sub>ニ</sub>遂<sub>レ</sub>蚤得<sub>レ</sub>處<sub>ニ</sub>囊中<sub>ニ</sub>、乃頰脫<sub>レ</sub>而出<sub>テ</sub>、非<sub>ニ</sub>特其末見<sub>ニ</sub>而已<sub>ニ</sub>。 十八史略。

否定の處に陳べたる打消助動詞、若くは副詞の二箇の重用は、この累加の條に於ては稍趣を異にする。かの二重の打消は通常の肯定を更に強めたるものなれども、この二箇の打消あるも、單に其の下なる副詞のみにかかる一箇の打消は、他の全文にはさしたる影響のなきものである。その重用打消の下なるは

通常の否定で、上なるは單に其ればかりではないと更に大なる物を提起するに過ぎない。即ち前者は「ザルコトナシ」後者は「ザルノミナラズ」の意である。

萬取<sub>レ</sub>千焉、千取<sub>レ</sub>百焉、不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>不多<sub>カ</sub>。 (爲<sub>レ</sub>多) 孟子。

助<sub>レ</sub>之<sub>長</sub>者振<sub>レ</sub>苗者也。非<sub>ニ</sub>徒無<sub>レ</sub>益而<sub>レ</sub>又害<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>。 (無<sub>レ</sub>益而<sub>レ</sub>又加以<sub>レ</sub>害) 孟子。

(一五) 限定 助辭「爾・耳・已・而已・也而已・而已矣・而已耳」を句尾に屬する文の形にして、上の語句を指示して、特に制限するよりいふ。而して冒頭の限定副詞「但・唯・只」等と相呼應する。

子唯謹<sub>ニ</sub>爾<sub>ニ</sub>。 論語。

此但遲速之間爾。 列子。

是何足<sub>レ</sub>與<sub>言<sub>ニ</sub>仁義<sub>ニ</sub>也</sub>云爾。 孟子。

云爾は上に應ずる詞のない古い文の形である。近時云爾と訓めるは右と異なる形に用ひられたものである。

前言戲<sub>レ</sub>之<sub>耳</sub>。 論語。

若<sub>ニ</sub>膠<sub>レ</sub>柱<sub>レ</sub>鼓<sub>レ</sub>瑟<sub>耳</sub>。 十八史略。

但義不可移耳。十八史略。

耳は又「僅・纔・財・才・裁」に應じて「僅……ノミ」と訓むことが多い。  
放肆邪侈無不爲已。孟子。

後雖悔之不可食已。左傳。

耳・已は接續詞「雖・若」等に應ずる。

若有他樂、吾不敢請已。左傳。

君子之所養可知已矣。孟子。

王亦曰仁義而已矣、何必曰利。孟子。

可謂好學也已矣。論語。

(一六)倒裝 修辭上文章の平弱を轉じて道勁ならしめんが爲めに、特に一般文法の格を破りて語を置き換ゆる法をいふ。

前置詞「於」を中心として補語と其の位置を換ふるもの。

亡於不暇、又何能濟。左傳。

諺所謂室於怒、市於色者。左傳。

私族於謀。左傳。

衣食於奔走。八家文。

前置詞「以・與」が其の目的語の下に置き換へられ動詞に直接して殆ど全く副詞の如くなれるもの。

江漢以濯之、秋陽以暴之。孟子。

君子義以爲上。孟子。

麋鹿之與處、猿狖之與居。八家文。

予一以貫之。論語。

前置詞が全然其の目的語を失ふ時は、副詞に轉じて下なる動詞を制限する。或は又元來の前置詞の其の目的語(多く代名詞たる時)が省略せられた形と見ても差支はない。

五十者可(是)衣帛矣。七十者可(是)食肉矣。孟子。

互鄉難(與(之))言。論語。

秦王爲(之)一擊缶。十八史略。

前置詞「乎・自・由・從」が疑問代名詞に接續する時は、位置を變じて其の代名詞の下に置かれる。

惡乎用之。左傳。

敢問夫子惡乎長。孟子。

何由知吾可也。孟子。

晨門曰爰自。論語。

天下何從圖秦。戰國策。

前置詞「于」を中軸として其の補語と動詞との位置を換へるもの。こは極めて古き用法なれば、吾人の觸れることは稀である。

四國于蕃四方于宣。詩經。

「之・是」が感歎詞として、強意の辭に用ひられる時は、客語若くは補語を上、述語を下に「之」を中心として位置を換へる。そして「唯・惟・亦」等に應ずる場合も亦少くない。

君子居之何陋之有。論語。

未之思也、夫何遠之有。論語。

古者言之不出、恥射之不速也。論語。

吾斯之未能信。論語。

惟怪之欲聞。八家文。

吾以子爲異、之問、曾由與求之問。論語。

惟朝夕芻米僕僮之資是急。八家文。

惟兄嫂是依。八家文。

目的語即ち客語を提示して動詞の上に置くもの。此の時、恰も主語の如く見ゆるも、實は客語が提起せられて動詞の上に来たものである。

衣取蔽寒、食取充腹。小學。

然後書可讀也。

右の場合、代名詞「之」を形式客語として動詞の下に置くことが多い。前者は更に「之」を省きて簡單なる

形としたるものといつてもよい。

巧言令色足恭左丘明恥之、丘亦恥之。匿怨而友其人左丘明恥之、丘亦恥之。論語。

客語を提示する時、代名詞「之」が直に客語に接して動詞の上に来るものと、又動詞の下に補語と接続するものがある。

殺戮之謂刑、慶賞之謂德。韓非子。

博愛之謂仁、行而宜之謂義。八家文。

形而上謂之道、形而下者謂之器。易。

賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘。孟子。

客語のみならず補語を提示する時も、亦代名詞「之」を動詞の下に置く。但し「之」を省きて簡單にするものもあり、前置詞と補語とが提起せられて、動詞の上に位して自然前置詞を脱するものもある。

凶服者式之、式負版者。論語。

瓜田不約履、李下不整冠。文選古詩。

代名詞「之」が動詞「有」の形式主語となる時は、實際の主語は「有」の上に来る。こは文の變則の項下に既

に説明したことである。又感歎文・疑問文に於ても屢々「有」が普通動詞の位置に来ることのあるも既述の通りである。

打消副詞「未」と「有」との連語に「之」を挿むは、前條打消文に於て述べたとほりである。

不好犯上而好作亂者未之有也。論語。

時及び所を表はす補語を、前置詞のまま動詞の上に置きて副詞的用法となすことがある。

有人於此。於此有人。

有年于茲。于茲有年。

於我心有三戚焉。孟子。

君子於其言無所苟而已矣。論語。

子於此日哭。(子哭於此日。論語。

累加の條に述べたる「不營」の連語は、其の對比すべき語の上若くば下に接し、或は又打消「不」と副詞「營」とを上下に隔て、中間に對比の語を入れるも同じである。

其差不營雲泥。其差霄壤不營。遠其親三千里不營。八家文。

蓋不<sub>レ</sub>膏壤<sub>ニ</sub>翹<sub>レ</sub>矣。汪克寬文。

時の副詞は通常動詞の上にあれども、場合によりては又動詞の下に位する。下なるものは名詞的述語の役目を演ずるものゝやうである。即ち上の本来の述語を悉く名詞形より承けて自ら説明の位置に立つてゐるからである。

回也其心三月不<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>仁。論語。

三年無<sub>レ</sub>改<sub>ニ</sub>於父之道<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>孝矣。論語。

國家無<sub>ニ</sub>大兵革<sub>一</sub>幾<sub>ニ</sub>百年<sub>一</sub>矣。八家文。

力行<sub>スル</sub> 七年<sub>ニシテ</sub>而後成。小學。

韓氏之文没<sub>レ</sub>不見者二百年<sub>ナリ</sub>。八家文。

詠歎・疑問の文に於て述語の主語に先んずることあるは前述の通りである。

惜<sub>シイカ</sub> 乎吾見<sub>ニ</sub>其進<sub>一</sub>也、未<sub>ダ</sub>見<sub>ニ</sub>其止<sub>一</sub>也。論語。

宜<sub>ナルカ</sub> 乎百姓之謂<sub>ニ</sub>我愛<sub>一</sub>也。孟子。

特に文意を強めん爲めに詠歎の形となすものがある。こは倒装ではない、但文の修辭的一態である。

時貴<sub>ニ</sub>拙速<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>時乎貴<sub>ニ</sub>拙速<sub>一</sub>。

文の聲調を整へ、婉曲清新ならしめんが爲めに實際の述語を上置き、却つて主語を下にして恰も本来の述語なるかの如く思はるゝものがある。

令<sub>ムル</sub> 天下<sub>ヲ</sub> 重<sub>テ</sub>足<sub>テ</sub>而立<sub>テ</sub>側<sub>ヲ</sub>目<sub>ヲ</sub>而視<sub>レ</sub>者必湯<sub>也</sub>。史記。

必<sub>ズ</sub>也湯<sub>ハ</sub>令<sub>ニ</sub>天下<sub>ヲ</sub> 重<sub>テ</sub>足<sub>テ</sub>而立<sub>テ</sub>側<sub>ヲ</sub>目<sub>ヲ</sub>而視<sub>レ</sub>。

(一七)省略 省略のことは前に述べたれば茲に重ねて説明しない。

## 二 咏歎文

### 咏歎文

感情に訴へて直ちに人の肺肝を衝き、情と情との觸發する所人をして感歎措く能はざらしむる

主情の文をいふ。

咏歎文の構成には感歎詞・嗚呼・噫・咨・猷・於戯・嘻及び句尾に附する哉・夫を用ゐる。

嗚呼噫嘻我知<sub>レ</sub>之。後赤壁賦。

嗟乎師道之不<sub>レ</sub>傳也久矣。八家文。

噫天喪<sub>レ</sub>予天喪<sub>レ</sub>予。論語。

君子哉若人尙德哉若人。論語。  
逝者如斯夫。論語。  
命矣夫斯人也而有斯疾也。論語。

三 命戒文

命戒文 人をして己の意志を承けしめんが爲めに、或は命令し、或は戒飭し、或は禁止し、或は發動せしめ、或は抑制せしむる主意の文をいふ。命戒文は通常動詞の命令形を用ゐて之を表はす。

女爲君子儒無爲小人儒。論語。

謂孔子曰來予與爾言。論語。

願聞子之志。論語。

王請無好小勇。孟子。

右の中願・請は願望を表はすもので、本來動詞であるが、冒頭より讀下して「願・請」となす時は、副詞に轉じたものである。  
禁止戒飭の意を表はすに、無・勿・毋等の助動詞を用ゐる。

王欲行王政則勿毀之。孟子。

子曰無欲速無見小利。論語。

公孫子務正學以言無曲學以阿世。十八史略。

四 疑問文

疑問文 不明の事實、又は疑問の存する事件に就きて他人に問ひ正す所の文をいふ。  
疑問文を構成するには、疑問代名詞及び疑問終詞を用ゐる。

誰爲大王爲此計者。史記。

孰謂鄆人之子知禮乎。論語。

孰御乎孰射乎。論語。

既に述語の所に陳べたるが如く、疑問詞を有する述語は屢々主語に先立つて句首に置かれるものである。  
而してこは語勢を急にして、怪訝、難詰、疑義の切實なるを示す筆法である。  
至於農夫小民終歲勤苦而未嘗告病此其故何也。八家文。

蓋<sup>シツ</sup>各<sup>ハ</sup>言<sup>ニ</sup>爾<sup>志</sup>。 論語。

曰<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>魯<sup>孔</sup>丘<sup>與</sup>。 論語。

何<sup>レ</sup>哉<sup>爾</sup>所<sup>レ</sup>謂<sup>達</sup>者。 論語。

假設疑問 何等の不審なく心中既に決定せる所あるにも拘はらず、特に人の注意を惹き、若くは讀者對者に其の判斷の餘裕を與へんとする形式上の疑問文を假設疑問といふ。こは即ち形の上、修辭の上に疑問文の態度を執るもので、一種の詠歎文である。

知<sup>ル</sup>我<sup>者</sup>其<sup>惟</sup>春秋<sup>乎</sup>、罪<sup>ス</sup>我<sup>者</sup>其<sup>惟</sup>春秋<sup>乎</sup>。 孟子。

求<sup>ム</sup>無<sup>レ</sup>獲<sup>者</sup>惟<sup>書</sup>乎。 八家文。

反語 疑問の形を備へて其の意極めて強く、反撥して全く反對の意味を見はすものを反語といふ。反語は多く疑問副詞と感歎終詞とを併用するものであるが、或は又疑問副詞のみにても見はす。

又<sup>安</sup>敢<sup>毒</sup>耶。 八家文。

相<sup>如</sup>雖<sup>驚</sup>獨<sup>畏</sup>廉<sup>將軍</sup>哉。 十八史略。

安<sup>能</sup>死<sup>ニ</sup>兒<sup>女</sup>手<sup>ニ</sup>。 十八史略。

何<sup>レ</sup>必<sup>日</sup>利<sup>ト</sup>。 孟子。

### 第二章 語法

言語 意義を有する聲音を言語といひ、言語・思想を表はす記號を文字といふ。單純なる意義を有して

文字 文章の單位をなす語を單語といひ、單語の二箇以上連合したるものを熟語といふ。一箇の漢字

單語 て見はさるゝものは即ち單語にして、二個以上の漢字にて見はさるゝものは熟語である。要す

熟語 なるに文章はこれらの單語の集つて成れるもので、之を其の性質及び職掌上より分類したるも

品詞 のを品詞と名づける。

漢文を構成する品詞は通常名詞・代名語・動詞・形容詞・副詞・助動詞・前置詞・後置詞・接續詞・終詞・感歎詞

の十一に分類することが出来る。

體言 名詞・代名詞の如く事物の名稱に用ひられるものを體言といひ、動詞の如く動作・存在・作用を見

狀言 はすものを用言といひ、形容詞・副詞の如く事物の性質・状態を見はすものを狀言といふ。又狀言

用言 を用言中を含めて體言と川言とに大別することがある。前置詞・助動詞・後置詞・接續詞・終詞・感

助詞 歎詞など體・用・狀の三言を助けて文の意義を完全ならしむるものを助詞といふ。即ち品詞を更に

四大別したるものである。



第一節 名詞

名詞 凡そ事物の名稱たる言語は皆名詞である。形あるものを有形名詞、形なきを無形名詞といひ、或特別なるものゝみに用ふるものを固有名詞、同種類一般に共通なるを普通名詞といふ。此の外、物質名詞・集合名詞の目を立つるものあれども、こは普通名詞の範圍に包含せしむべきである。且つ夫れ漢文にては、冠詞なければ強ひて名詞を英文法のそれに倣ひて分類するの要を見ないのである。本然の名詞以外に、動詞・形容詞・副詞などより轉化したる名詞が多い。即ち用言、狀言及びその連語が、文中の位置によりて名詞に轉化したるものである。

憂<sup>フル</sup>民<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>憂<sup>フ</sup>者<sup>ハ</sup>民<sup>ニ</sup>亦<sup>モ</sup>憂<sup>フ</sup>其<sup>ノ</sup>憂<sup>ヲ</sup>。孟子。

孰<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>事<sup>ヲ</sup>、事<sup>レ</sup>親<sup>ニ</sup>事<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>本<sup>也</sup>也。孟子。

辟<sup>ハ</sup>如<sup>ク</sup>三<sup>ニ</sup>行<sup>レ</sup>遠<sup>ニ</sup>必<sup>ズ</sup>自<sup>ラ</sup>。適<sup>レ</sup>辟<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>三<sup>ニ</sup>登<sup>レ</sup>高<sup>ニ</sup>必<sup>ズ</sup>自<sup>ラ</sup>卑<sup>ニ</sup>。中庸。

以<sup>テ</sup>小<sup>ニ</sup>易<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>、彼<sup>レ</sup>惡<sup>シ</sup>知<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。孟子。

熟語名詞 熟語名詞の成立に六種ある。

(一)名詞と名詞。同性質のものにして一物を示す。

道路。家屋。橋梁。奢侈。邪惡。

名詞と名詞との意義相對するものにして、二物若くはそれ以上の合同を示す。

父母。君臣。父子。夫婦。男女。山川。

意義相異なる名詞を連ねて、其の何れにもあらぬ渾一の一物を示す。

天災。地利。王政。農事。君子。野人。

(二)形容詞と名詞及び副詞と名詞。

恒産。多士。美人。醜夫。堅甲。利兵。常道。輕裘。

(三)動詞助動詞と名詞又は形容詞と名詞或は副詞。

成功。亡國。賣文。無智。無辜。不仁。不祥。非禮。

(四)助詞と名詞。

有虞。有政。有周。有家。

(五)動詞熟語よりの轉化。

進退。舉止。動作。謀略。取捨。選擇。

(六)形容詞・副詞よりの轉化。

高低。大小。厚薄。精細。太甚。強弱。

**位置** 名詞が文中にある時は、其の位置によりて明かに其の格を知ることが出来る。即ち名詞は主語の位置にありて主格たるか、動詞の目的となりて賓格たるか、不完全自動詞の標準を示して補格たるか、又體言に冠して形容修飾語たるか、或は以上の格に相重りて同格なるかの何れかである。

信義行<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>君子<sup>ニ</sup>、而<sup>シテ</sup>刑戮施<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>小人<sup>ニ</sup>。 八家文。

管仲死<sup>ス</sup>、豎刀易牙開<sup>レ</sup>方用<sup>ル</sup>、威公薨<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>亂<sup>ニ</sup>、五公子爭<sup>レ</sup>立<sup>ル</sup>。 八家文。

仁者人也、義者宜也。 中庸。

君子之不<sup>レ</sup>教<sup>レ</sup>子何也。 孟子。

士<sup>ニ</sup>而懷<sup>レ</sup>居不<sup>レ</sup>足<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>士矣。 論語。

樂<sup>レ</sup>天者保<sup>ニ</sup>天下<sup>ヲ</sup>、畏<sup>レ</sup>天者保<sup>ニ</sup>其國<sup>ヲ</sup>。 孟子。

客語には送假名「ヲ」を補語には「ニ」又は「ヨリ」を、提起せられて主語の位置にあるものは「ハ」を送る。こは前章文の成分の所に述べたことである。

禹吾無<sup>ニ</sup>間然<sup>一</sup>矣。 論語。

非禮勿<sup>レ</sup>視、非禮勿<sup>レ</sup>聽、非禮勿<sup>レ</sup>言、非禮勿<sup>レ</sup>動。 論語。

形容修飾語となるものは、名詞に冠して恰も形容詞の如き性質を有するものである。これも亦直接なるものと、後置詞「之」によりて接続せらるるものとがある。而して主語・補語・客語の何れをも修飾することは更めて言ふまでもない。

河陽軍節度御史大夫烏公爲<sup>ニ</sup>節度<sup>ト</sup>之<sup>ニ</sup>三月、求<sup>ニ</sup>士<sup>ヲ</sup>於<sup>レ</sup>從事<sup>之</sup>賢者<sup>ニ</sup>。 八家文。

匹夫<sup>ニ</sup>而爲<sup>ニ</sup>百世師<sup>ト</sup>、一言<sup>ニ</sup>而爲<sup>ニ</sup>天下<sup>ノ</sup>法<sup>ト</sup>。 八家文。

名詞にして又文の述語の地位に立つことあるは、前章文の成分の所、述語の條に述べたれば茲に再説の煩を省く。

### 第二節 代名詞

**代名詞** 名詞の代用をなす語を代名詞といひ、名詞の重用を厭ひ、其の煩雜を避けんが爲めにこれを代用するのである。

代名詞を其の性質上より分ちて人代名詞・指示代名詞・疑問代名詞・假設代名詞の五種とする。

位置 代名詞は名詞と同じく、主格・賓格・補格・同格及修飾語となる。

(一) 人代名詞 自他の名に代用するものにして、自稱・對稱・他稱・不定稱の四種とする。

吾・我・余・予・台・臣・孤・寡人・小子・不肖・愚・僕・朕。

右の中「台」は書經の語、「朕」は天子の自稱に、「孤・寡人」は諸侯の謙稱、「臣」は君に對する自稱である。但し孤は諸侯の喪にあるの稱。

汝・爾・若・而・乃・女・上・公・君・子・夫子・吾子・先生・足下・閣下・陛下・殿下。

右の上・陛下は君主に、殿下は皇族に、閣下は高貴の人に、夫子・先生は師長に、公・君は愚・僕に對しての語、吾子は目下の對稱である。

彼・夫・其・渠・伊。

漢文では他稱・不定稱は多く用ひない。渠は列子に用ひられたる古文で輕稱である。

總べての人稱に通じ、而も名詞に重用せらるゝものに己・自・躬・親・身などがある。尤も重用は主として主格に立つ場合にして、賓格及び所持格の時は單獨に用ひられる。或は之を反照代名詞又は復歸代名詞と名づける。

(二) 指示代名詞 事物を指示するに用ふる代名詞にして、此・是・斯・之・其・諸などの類が即ちこれ。是乃仁術也。孟子。

吾斯之未<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>信<sup>ル</sup>。論語。

此<sup>レ</sup>率<sup>レ</sup>獸<sup>ヲ</sup>而食<sup>ル</sup>人<sup>也</sup>。孟子。

學<sup>シテ</sup>而時習<sup>ス</sup>之。論語。

文王既没<sup>ニシテ</sup>、文不<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>茲乎。論語。

莫<sup>クシテ</sup>之禦<sup>ラズ</sup>而不仁<sup>ナラバ</sup>、是不智也。孟子。

斯人<sup>ニシテ</sup>也而有<sup>ニ</sup>斯疾<sup>ニ</sup>。論語。

厥土燥剛、厥位面陽、厥材孔良。袁州學記。

人代名詞「彼」を假りて、指示代名詞の賓格及び修飾語(冠詞)に用ひ、又「夫」をも修飾語に用ふる。樂<sup>ニ</sup>夫天命<sup>ニ</sup>復奚疑<sup>ハシ</sup>。歸去來辭。

彼狡童今不與我好。十八史略。

此の他書經に多く用ひらるゝ厥・時・爰も亦指示代名詞である。是・此・斯・時は主格・賓格・修飾語に通用し、主格及修飾語には其・厥を用ひ、賓格及修飾語に用ひらるゝは茲、賓格に用ひらるゝものは之・諸である。之・焉は補客に用ひられる。但し「之」は時に修飾語となることがある。指示代名詞は事物・場所・方向を指すものにして、近稱・中稱・遠稱のあるは邦文法の説く所と同じである。

(三)疑問代名詞 すべて疑問を表はす代名詞にして、誰・孰・疇・何人等は人に關し、何・奚・安・何如・奈何・焉・惡等は事物・場所・時に關するものである。

疑問代名詞は、屢々述語となりて主語に先づることあるは、文の述語の位置の條に述べた通りである。(四)假設代名詞 前後に承くる所なく指すものなく、單に事物を意中に描きて漠然と指定するものにして、指示代名詞の變態である。

「其」は主格・修飾語として、「是」は賓格・補格・修飾語として用ひられ、「之」は賓格・補格に用ひられる。其爲人也。孝悌而好犯上者鮮矣。論語。

古之人修其天爵而人爵從之。孟子。

知之者不如好之者、好之者不如樂之者。論語。

由是則生而有不用也。孟子。

漢文では文の省略と代名詞の頻出とによりて、文意を正確に捕捉し得ざること往々ある。故に省かれたる文、表はされたる代名詞の意義につきて、其の何を指すものなるかを十分に穿鑿しなければならぬ。然るに假説代名詞に至りては、全く前後に承合する所なく、一般的に假定したるものなれば、文字の上より何を指すものと明かには定め難いが、然し心中指す所があつて、無意義に用ひたものではない。

### 第三節 動詞

**動詞** 動作・作用・存在を表はすものにして、單語即ち一字のもの、熟語即ち二字以上のものがある。其の動作が自身のみ止りて他に影響せざるものを自動詞、動作者自體に止らずして他に關係し影響するものを他動詞といふ。

見。聞。思。用。退。勝。負。引。寄。思惟。修繕。採用。生長。歸趣。考察。

花開。樹木倒。春過夏來。自遺。愛人。使民。修身齊家。愛山好水。

他品詞よりの轉用 品詞は其の目的によりて互に他に轉用せられる。されば本來の動詞も轉じて他の品

詞となり、他品詞より轉じて動詞となるものは甚だ多い。又同じ動詞の中、本來の自動詞が他動詞に、他動詞が自動詞に轉用せらるゝものなることも、これより推して知ることが出来る。

(一)名詞・代名詞よりの轉化

樹<sup>ス</sup>吾<sup>ニ</sup>墓<sup>ヲ</sup>、櫛<sup>ハ</sup>可<sup>キ</sup>材<sup>ト</sup>也。 史記。

范<sup>ニ</sup>增<sup>ス</sup>數<sup>ヲ</sup>目<sup>ヲ</sup>項<sup>ヲ</sup>羽<sup>ヲ</sup>。 史記。

侶<sup>ニ</sup>魚<sup>ニ</sup>鱖<sup>ニ</sup>而<sup>ト</sup>友<sup>ト</sup>麋<sup>ト</sup>鹿<sup>ト</sup>。 前赤壁賦。

代名詞の動詞に轉ずるものは極めて稀なるに比して、名詞の轉化するものは甚だ多い。而して送假名は「サ」行の「シ・ス」を最も多く用ひ、「トス・ニス」又は其の字義の活用語尾を以てする。

(二)形容詞・副詞よりの轉化

近<sup>ク</sup>レ<sup>バ</sup>之<sup>ヲ</sup>則<sup>チ</sup>不<sup>レ</sup>孫<sup>ニ</sup>、遠<sup>ク</sup>レ<sup>バ</sup>之<sup>ヲ</sup>則<sup>チ</sup>怨<sup>ム</sup>。 論語。

叟<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>遠<sup>ニ</sup>千里<sup>ニ</sup>而<sup>テ</sup>來<sup>ル</sup>。 孟子。

仁<sup>者</sup>先<sup>レ</sup>難<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>獲<sup>ル</sup>。 論語。

天<sup>可</sup>レ必<sup>ス</sup>乎、天<sup>不</sup>可<sup>レ</sup>必<sup>ス</sup>乎。 蘇軾文。

元の形容詞の語根の外、動詞としての活用語尾の假名を送る。此の中には動詞「有」の活用と形容詞の「ク」と連りて「カラ」を送るものもあり、「シ・ス」「トス」の假名を送るものもある。本來の形容詞・副詞に添はりたる意義は送假名によりて表はす。

遠<sup>ク</sup>。 遠<sup>ク</sup>。 遠<sup>ク</sup>。 弱<sup>ク</sup>。 弱<sup>ク</sup>。 弱<sup>ク</sup>。

動詞の「有形容詞の無」二字は述語として主語の上に来るを普通とする。尤も「有」の義となる時は他動詞となりて、一般他動詞と同様の位置をとる。「無」を動詞とし、或は副詞となし、或は助動詞となすものもある、此には邦文法に従ひて別に異を立てぬ。「如・爲」の如きは不完全自動詞として取扱ふが便利である。

千<sup>羊</sup>之<sup>皮</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>カ</sup>一<sup>狐</sup>之<sup>腋</sup>。 史記。

不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>命<sup>ヲ</sup>無<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>爲<sup>ル</sup>君<sup>子</sup>也。 論語。

自動詞には客語を要せざれども、他動詞には之を必要とする。其の不完全なるものは、自他何れも補足語を必要とするとは相同じである。

花<sup>開</sup>鳥<sup>嘯</sup>。 草<sup>木</sup>茂<sup>生</sup>。

見<sup>テ</sup>落<sup>ク</sup>花<sup>ヲ</sup>惜<sup>ム</sup>春<sup>ヲ</sup>。 倚<sup>リ</sup>門<sup>ニ</sup>待<sup>ツ</sup>兒<sup>ヲ</sup>。 爲<sup>ル</sup>異<sup>域</sup>鬼<sup>ト</sup>。 問<sup>フ</sup>道<sup>ヲ</sup>農<sup>夫</sup>。 教<sup>フ</sup>數<sup>學</sup>於<sup>テ</sup>其<sup>子</sup>。

客語若くは補語として動詞又は形容詞、又は之に助動詞を伴へる語の來る時は、本來の用言にあらすして其の中止形より名詞に轉じたるものである。

不知爲不知。論語。

如有博施於民而能濟衆何如。論語。

他動詞が句の冒頭にありて獨立的に用ひられて、而も意義の上よりは下句を容語とするものがある。こは動詞の副詞的用法によるものである。即ち曰・願・請・謂・顧(惟・以)聞・稱・以爲・以謂・庶幾・不圖(不意)などこれである。自然現象、殊に天地の變異を寫す動詞には全く主語を記さず。尤も名詞より轉化して自動詞となるものは、一字にして主語・述語を兼ね備ふるものとなる。

日食之。隕石於宋。左傳。

晦日大雨。秋蟬。

位置 動詞は上に其の動作・作用の由りて起る所のもの即ち主語を有し、下にそれを承くる所のもの即ち客語・補語を有するものである。但し自動詞は主語を有するのみにて文をなすも、不完全なるものは尙補語を要する。

動詞は述語として主語の次に位するものなれども、「有」は形容詞の「無」と共に通常主語の上に置かれ

る。

又不完全動詞の補語を、前置詞のまま動詞の上に提起して副詞的に用ふることがある。

五十而慕者予於大舜見之矣。孟子。

於己取之而已矣。孟子。

不完全他動詞にありては、客語を動詞の上に轉置して、前置詞「以」の目的とするが如きものが尠くない。

以其子妻之。(妻之其子) 論語。

天子不能以天下與人。(天子不能與人天下) 孟子。

右と反對に、前置詞に伴はれたる客語は補語の下に位することがある。「以」の形が即ちこれである。

疑問代名詞が客語・補語となる時にも動詞に先行する。

吾何執、執御乎、執射乎。論語。

誰毀誰譽。論語。

仲尼焉學。論語。

舍<sup>キテ</sup>是其<sup>レ</sup>焉<sup>ニ</sup> 從<sup>ハシ</sup> 八家文。

客語を強める爲めに特に提起して主語の上に置くことがある。即ち客語・主語・動詞述語の順序となる。

夏<sup>ハ</sup>禮<sup>ハ</sup>吾<sup>ハ</sup>能<sup>ク</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>。 論語。

鳥<sup>ハ</sup>吾<sup>ハ</sup>知<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>能<sup>ク</sup>飛<sup>ブ</sup>。 魚<sup>ハ</sup>吾<sup>ハ</sup>知<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>能<sup>ク</sup>游<sup>ブ</sup>。 十八史略。

修辭上客語を倒置して動詞の上にする事数々である。此の場合には主として「之・是」の代名詞を動詞の上に加へる。不完全他動詞の客語を提起したる場合には、「之」を動詞の上にするものと下にするものとのあることは既述の通りである。

動詞に其の動作・作用を表はす叙説・命戒・禁止・疑問・肯否等の法式、及び過去現在未來を表はす時、其の他他動詞に能動・受身の相のあることは邦文法に説く所なれども、漢文には動詞の語尾變化なく、單に助動詞・前置詞の助を藉りて之を表はすのみであるが、稀には前後の文勢によりて何等他の品詞を假らずして之を表はすものもある。これらは文章法の條に述べたれば就きて視られよ。

#### 第四節 形容詞

形容詞 事物の性質・状態・分量等を表はすもの、即ち名詞代名詞・若くは名詞句の前、或は後に在りて

そを形容する語をいふ。

成立 單語・熟語及び成句の三種ありて、熟語に同字疊用と異字連用との二種がある。

高山。深水。和解。歲寒。花明。柳暗。憂心忡々。悠悠五千年。穆々天子。

倜儻不羈。磊落豪奢。窈窕美人。參差交錯。形容凄艶。

將<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>爲<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>君<sup>ハ</sup>必<sup>ズ</sup>有<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>召<sup>ス</sup>之<sup>臣</sup>。 孟子。

以<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>忍<sup>ル</sup>人<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>行<sup>フ</sup>不<sup>レ</sup>忍<sup>ル</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>政</sup>。 孟子。

形容句は前章に述べたるが如く、諸詞の集合體が恰も一字の形容詞の如き役目をなすものにして、文章法・句法の上より論すべきものである。

送假名 邦文法は形容詞の活用を總べて「ク・シ・キ・ケレ」に一括したれども、漢文にては此の他尙中止形に「ト・ニ・トシテ・ニシテ」を、終止に「ナリ・タリ・アリ」を送る。後者は邦文法の所謂形容動詞に相當するものである。

山高<sup>ク</sup>水清<sup>ク</sup>。 淡雪<sup>ト</sup>寒<sup>シ</sup>日<sup>ト</sup>。 君子<sup>ハ</sup>坦<sup>トシ</sup>蕩<sup>々</sup>。 柳<sup>ハ</sup>綠<sup>ク</sup>花<sup>ハ</sup>紅<sup>ク</sup>。 愚<sup>シ</sup>而<sup>シテ</sup>誠<sup>シ</sup>。 文<sup>ハ</sup>而<sup>シテ</sup>有<sup>ル</sup>禮<sup>ト</sup>。

分類 事物の性質・状態を表はすものを特に性質形容詞と名づけて、分量を表はす數量形容詞と區別する。又數量形容詞を別に立てて數詞となすものもある。

堅城。湯池。良將。迅雷。風烈。奇々怪々之感。卓犖不羈之人。洪水滔々。  
數量形容詞 數量を表はすに定數詞と不定數詞とあり、又別に程度分量を表はすものがある。不定數  
を表はすには「幾・數」の字を名詞に冠し、多數を概括するに「衆・庶・群・諸・多」の字を冠し、或又基數詞  
を藉りて多數の意を示す。

定數詞は基數詞・序數詞・分數詞・倍數詞の四種に分類するを常とす。

(一)基數詞 一より百・千・萬・億・兆に至る事物の實數を稱量する語。

天下之達道五、君子所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之者三。中庸。

古之爲<sub>レ</sub>民者四、今之爲<sub>レ</sub>民者六。八家文。

(二)序數詞 事物の順序次第を表はすもの、通常「第」字を冠す。第一、第二。

(三)分數詞 二數の一方を他方にて除したる幾何に相當するかを示すものにして、漢文にては分母を先  
に分子を後にし、其の間に「之」を挿むを常とし、稀に「之」を略したるものもある。

大都不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>參<sub>レ</sub>國之一<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>都<sub>レ</sub>九之一。左傳。

凡<sub>レ</sub>民之食<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>土<sub>レ</sub>者出<sub>レ</sub>其什<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>吏。八家文。

(四)倍數詞 大小二數を比較して大がふの幾倍なるかを表はすもの、普通「倍」の字を用ひる。稀に倍字

を省きて基數詞のみを以て表はすものもある。

用法 形容詞は修飾・説明・比較・獨立の四種となる。

(一)修飾用法 名詞の上に冠して其の性状を形容するもの。

弱國。大敵。窈窕淑女。虎狼之秦。

(二)説明用法 名詞・代名詞の下に位して其の性状を説明するもの。位置は主語の下に在りて自動詞に等  
しい。

柳暗花明。城堅池深。周道坦々。臺高而安、深而明、夏涼而冬溫。八家文。

(三)比較用法 彼此比較して事物の性状を論じ、其の輕重異同を明にするものにして、平等比較と差等  
比較とに分つ。

平等比較は「如・若」等の動詞を説明の位置に据えて、其の性状の略相等しきを示す。

差等比較は彼此相比べて其の輕重を表はすもので、前置詞「於・于・乎」を用ふ。こは前章比較の所に略述  
してある。

(四)獨立用法 直接主語を形容せずして獨立の形を有するもの、多く「トシテ」の訓讀に歸する。

子曰、周監<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>二代、郁<sub>レ</sub>々乎<sub>レ</sub>文哉。論語。



大哉堯之爲<sup>ナル</sup>君也、巍々乎<sup>トシテ</sup>唯天爲<sup>ヲシテ</sup>大、唯堯則<sup>ルニ</sup>之、蕩々乎<sup>トシテ</sup>民無<sup>ク</sup>能<sup>ク</sup>名<sup>ス</sup>焉。論語。

第五節 副詞

副詞

動詞・形容詞・他の副詞に副いて其の意味を修飾・限定する語をいふ。

成立

單語・熟語・成句より成ること形容詞と同じである。熟語に同字疊用と連異字連用のあること、及び成句は諸種の品詞の集りて文章中單字副詞の役目を果すものなることは、何れも形容詞の場合と同じである。

必<sup>ク</sup>。必<sup>ク</sup>。尤<sup>モ</sup>。最<sup>モ</sup>。亟<sup>ク</sup>。屢<sup>ク</sup>。稍<sup>シ</sup>。殆<sup>ク</sup>。愈<sup>ク</sup>。髣髴<sup>ク</sup>。猶豫<sup>ク</sup>。躊躇<sup>ク</sup>。彷徨<sup>ク</sup>。盤桓<sup>ク</sup>。蹢躅<sup>ク</sup>。孜孜<sup>ク</sup>。營々<sup>ク</sup>。遑々<sup>ク</sup>。郁々<sup>ク</sup>。戰々兢兢<sup>ク</sup>。

忽然<sup>トシテ</sup>變<sup>ズ</sup>之、急<sup>ナル</sup>者悽然<sup>トシテ</sup>以<sup>テ</sup>促、緩<sup>ナル</sup>者舒然<sup>トシテ</sup>以<sup>テ</sup>和。八家文。

王曰<sup>ク</sup>叟不<sup>レ</sup>遠<sup>ニ</sup>千里<sup>ニ</sup>而來<sup>ル</sup>。孟子。

他品詞よりの轉化。名詞・形容詞・動詞にして副詞に用ひらるるものも尠くない。

雁行<sup>ク</sup>。狗盜<sup>ク</sup>。狐疑<sup>ク</sup>。蟻集<sup>ク</sup>。櫛比<sup>ク</sup>。玉碎<sup>ク</sup>。多聞<sup>ク</sup>。小康<sup>ク</sup>。大成<sup>ク</sup>。庶民子來<sup>ク</sup>。孟子。生擒<sup>ク</sup>。生得<sup>ク</sup>。立成<sup>ク</sup>。(タチドコロニナル)

分類 副詞を性質上より分ちて時の副詞・所の副詞・性狀の副詞・疑問の副詞・應答否定の副詞・範圍度數の副詞の六種とする。

(一)時の副詞 現在・過去・未來・繼續を表はすに各其の副詞を用ふ。現在は動詞のまゝにても表はし又「今・方」なども用ゐる。過去は「嘗・已・既・鄉・嚮・昔者・前・初」等を用ひ、未來は「明日・翌年・後世・而後・終・遂・少焉・須臾・暫等」を、繼續には「常・終日・每歲」等を用ふ。此の外「忽・倏・乍・始・久・長・姑・古」等も亦時を表はす。過去・現在・未來に通じて用ふるもの、互に相通じて動詞若くは文勢によりて何れの時ともなるもの多くして一概に定め難い。

(二)所の副詞 場所・方角を示すものにして、「東・西・南・北・左・右・前・後・背・面・中」を用ひ、尙地名を動詞の上に置く時はこれに屬するものとする。

(三)性狀の副詞 動作の性質状態を表はすもの、「能・善・誠・信・殉・苟・專・純・固・素・妄・空・徒・唯・惟・僅・繼・漸・殆・幾・先・克・允・速・直・急・汎・博・普」等を用ひる。

(四)疑問副詞 疑問の意味を表はすものにして、「何・奚・安・曷・胡・如何如何・庸詎・惡・焉・蓋」を用ふ。又「豈・會・寧」等をも併せ用ふ。前者は疑問代名詞より轉じたものにして、後者と共に指示代名詞の「其」副詞の「能・敢・寧」、助動詞の「可・足・不」等に連接し、或は「哉・乎・乎也・焉」の終詞に呼應して反語をなすものである。

(五) 應答否定の副詞 應答に「然・諾・俞・唯・否・不然」の副詞を須ひ、否定に「非・未・勿・莫」を用ふ。一般の打消には助動詞「不」を用ひる。稀に古書などに「靡・蔑・罔・微」の否定副詞を用ふるものがある。

(六) 範圍度数の副詞 動作・分量範圍を表はすものに、「皆・咸・僉・盡・悉・畢・俱・相・胥・僅」がある。これは代名詞に似たる役目をなすが故に或は代名形容詞と名づける。度数を表はすものに「亟・屢・再・復・三・一」などがある。これは主として數量形容詞より轉じたものである。

位置 單說副詞は動詞・形容詞・他の副詞の上に位するを通則とすれども、熟語副詞と共に動詞の後、又は助動詞・接續詞を隔てて動詞を限定すること多く、助動詞との接續に於ては、其の位置の異同によりて、意義に大なる相異を來すが故に大に注意を要する。形容詞は體言を修飾するに用ひ、副詞は用言・狀言を限定するに用ふ。これ即ち形容詞と副詞との根本的相違にして、若し茲に多くの品詞より成る句ありて、名詞・代名詞を修飾する時は疑もなく形容詞句である。其の動詞・形容詞・副詞に副ふものは即ち副詞句である。

用法 副詞に修飾的用法・説明的用法・接續的用法・獨立的用法がある。  
(一) 修飾的用法 動詞・形容詞の上に在りて其の意義を限定するもの、直ちに動詞・形容詞の上に接する直接用法と、或語を隔てて間接に限定し修飾する間接用法との二種が即ちこれである。

游之適大率有二。 八家文。

謂々然 強笑語以相取下。 八家文。

可爲紛々然 與百工交易。 孟子。

沛然 德教溢于四海。 孟子。

(二) 説明的用法 直接又は間接に動詞の下に位して説明の用をなすものである。此の場合動詞・形容詞は中止形となりて恰も名詞の如く、却つて下なる副詞が活用語となる。

恩德入人之深 而移人之速 有如是者矣。 八家文。

修飾用法を變じて説明用法となすには、其の位置を換へて副詞の上に「之」を加へる。例せば、

此又與於不仁之甚者也。 孟子。

此又甚與於不仁者也。

恩德入人之深、而移人之速有如是者矣。 孟子。

恩德深入人而速移人有如是者矣。

(三) 接續的用法 副詞を句頭に用ひて接續の用をなさしむるもの。即ち「乃・輒・斯・即・若・雖・猶・尙・直・曾・唯・惟・因・今・肆」がこれ。

○乃知<sub>ル</sub>古之名將必出<sub>ニ</sub>於奇<sub>ニ</sub>然後能勝<sub>上</sub>。 八家文。

今兩虎共鬪<sub>ニ</sub>其勢不<sub>ニ</sub>俱生<sub>ニ</sub>。 十八史略。

因<sub>テ</sub>留<sub>ニ</sub>沛公<sub>一</sub>與飲<sub>ニ</sub>。 史記。

有<sub>ニ</sub>一人<sub>一</sub>徒<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>輒予<sub>ニ</sub>五十金<sub>一</sub>。 史記。

須臾<sub>ニ</sub>顧<sub>見</sub>見<sub>ニ</sub>猛虎暴然<sub>トシテ</sub>向逼<sub>ニ</sub>則怯者不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>告<sub>ニ</sub>跳<sub>而</sub>越<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>。

(四) 獨立的用法 限定したる動詞が省略せられて副詞のみ獨立して用ひらるるもの、往々にして形容詞の獨立用法と混同する。固より邦文法の如く活用によりて區別する方法がないから、唯其の修飾し限定する語が體言なるか用言なるかの點で區分するのである。即ち獨立副詞は必ず動作・作用を限定し、獨立形容詞は必ず主語・客語・補語若くは文中の名詞・代名詞たる體言を形容し修飾するものである。

君在<sub>ニ</sub>、踞踏<sub>如</sub>也、與々如<sub>也</sub>。 論語。

是以若<sub>レ</sub>彼濯濯<sub>也</sub>。 孟子。

始<sub>ハ</sub>舍<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>圍々焉<sub>、</sub>少<sub>シ</sub>則洋々焉<sub>、</sub>孟子。

欣然<sub>トシテ</sub>戴<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>以爲<sub>ニ</sub>君師<sub>一</sub>。 八家文。

### 第六節 助動詞

助動詞 主として動詞を助けて其の敘述を完全ならしむるものにして、副詞若くは其の他の品詞にも附屬する。

性質上の分類(一)動詞に冠するもの、(二)副詞に冠するもの、(三)形容詞に冠するもの、(四)名詞・代名詞に冠するもの、(五)助動詞の省略によりて獨立的に用ひられたるもの、(六)他の助動詞に冠して重用するもの。

(一)可<sub>シ</sub>以<sub>テ</sub>出<sub>テ</sub>而仕<sub>ニ</sub>矣。 八家文。

不<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>虚語<sub>一</sub>矣。 八家文。

(二)大人者言不<sub>ニ</sub>必<sub>一</sub>信<sub>、</sub>行不<sub>ニ</sub>必<sub>一</sub>果<sub>。 孟子。</sub>

(三)尊<sub>レ</sub>親<sub>之</sub>至莫<sub>レ</sub>大<sub>下</sub>乎<sub>ニ</sub>天下<sub>一</sub>養<sub>上</sub>。 孟子。

未<sub>ニ</sub>必<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>善<sub>。 八家文。</sub>

打消助動詞「不」を冠したるものは形容詞・動詞共に其のまゝ名詞として扱はれるものが多い。

(四) 非<sup>ズ</sup> 聖人<sup>ニ</sup>而能<sup>ク</sup>若<sup>ク</sup> 是乎<sup>ナ</sup>。 孟子。

非<sup>ズ</sup>我也<sup>ニ</sup>、歳也。 孟子。

この「非」も亦名詞の連語となることは、前の「不」及形容詞「無」と同様である。但し「無」は名詞又は動詞・助動詞の連體形より接続するものなれば、或は他の動詞と同一に取扱ふが却つて便利である。且つ「有」に對して同じく叙述する位置に立つ。

(五) 仲弓問<sup>フ</sup>子桑伯子<sup>ハ</sup>、子曰<sup>ク</sup>可也簡。 論語。

或問<sup>フ</sup>曰勸<sup>ム</sup>齊伐<sup>ニ</sup>、燕有<sup>リ</sup>諸<sup>ヲ</sup>、曰未<sup>ク</sup>也。 孟子。

挾<sup>ミ</sup>泰山<sup>ニ</sup>超<sup>シ</sup>北海<sup>ニ</sup>、語<sup>リ</sup>人曰<sup>ク</sup>、我不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>。 孟子。

右の例に見るが如く多くは問答體の文にして、先に擧げたる動詞を復びするの煩を避けて、單なる助動詞のみにて叙述をなしたるものである。

(六) 士不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>死<sup>ス</sup>。 弘毅<sup>ニ</sup>。 論語。

似<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>言<sup>フ</sup>者<sup>ニ</sup>。 論語。

以上助動詞の接続に付きて略説したるものであるが、要するに動詞に冠するを本體とする。故に形容詞・副詞・名詞に其のまゝ接続することなく、必ずや動詞若くは助動詞の如き活用形をとるものである。邦文法の所謂形容動詞は、即ちかくて生じたるものの一部分である。

用法上の分類

指定・將然・可能・使役・受身・打消の六種とする。

(一) 指定の助動詞

可<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>死<sup>ス</sup>、可<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>無<sup>シ</sup>死<sup>ス</sup>。 死<sup>セ</sup>傷<sup>ム</sup>勇<sup>ヲ</sup>。 孟子。

此<sup>レ</sup>宜<sup>シ</sup>禽獸<sup>ニ</sup>、所<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>忍<sup>ス</sup>爲<sup>ス</sup>、而其人<sup>ハ</sup>自視<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>爲<sup>ス</sup>得<sup>ル</sup>計<sup>ナ</sup>。 八家文。

汝<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>小<sup>シ</sup>、當<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>復<sup>シ</sup>記憶<sup>ス</sup>。 八家文。

伍舉問<sup>フ</sup>應<sup>ニ</sup>爲<sup>レ</sup>後<sup>之</sup>辭<sup>ヲ</sup>。 左傳。

人<sup>ノ</sup>爲<sup>レ</sup>學<sup>ヲ</sup>、須<sup>ク</sup>要<sup>ス</sup>及<sup>テ</sup>時<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>志<sup>ヲ</sup>勉<sup>ム</sup>勵<sup>ス</sup>。 言志錄。

指定の助動詞に「所・攸」を加へるものもあるが、これは品詞を結合して自ら其の代表たる格に立つものなれば、寧ろ關係代名詞として扱ふが便利である。

(二) 將然の助動詞 將來を豫想し、或は事の未來に屬するを表はすもの、「將・且・欲」が即ちこれで、打消副詞「未」も未來の否定で之と同じ性質のものである。

告諸侯、會陳、吾將遊雲夢。十八史略。

吳王見且、斬愛姬大駭。史記。

是欲臣妾、我也。是欲劉豫、我也。文章軌範。

吾未見剛者。論語。

助動詞「欲」は單純未來のみならず、希望を表はすものである。これを特に希望の助動詞といふものである所以である。大抵の願望は動詞を用ひて表す。而も句頭なる動詞は殆ど副詞的に用ひられてゐるものである。此の場合頭より譯しても、亦動詞として最後に附しても同じである。

天下の學者、孰不欲一蹴而造聖人域。八家文。

請損之、月攘一雞、以待來年、然後已。孟子。

子路曰願、車馬衣輕裘與朋友共、敝之而無憾。論語。

(三) 可能的助動詞 能力を表はすものにして、或は指定の助動詞に一括せしむるものである。「可能・足

得」の類が即ちこれに屬する。

五十者可衣帛、七十者可食肉。孟子。

食之不能盡材。八家文。

書足以記姓名而已。十八史略。

臣得以下頸血、澆大王。十八史略。

指定の時は「可」は當然即ち「はず」の意となり、可能の時は能力の堪へ得るか否かを表はすものである。

(四) 使役の助動詞 他をして動作行爲をなさしむる時に用ふるものにして、「令・使・教・遣・俾」が即ちこれである。

令五家爲比、使之相保。周禮。

亦使後人復哀後人也。文章軌範。

漢王遣張良、往立信爲齊王。史記。

これらは動詞より轉化したるものなれば、勿論動詞に用ひられる。總じて命令・使役の文は「………ヲシテ………シム」と訓むものであるから、文勢上使役・命令の意明かなる時、或は命令の意を含める動詞あ

る時は、其の動詞に使役助動詞の送假名を兼ねしめる。

母命守之。小學。

首尾相接、可燒而走也。十八史略。

則遣從事、以少牢告廟。八家文。

(五)受身の助動詞 他より動作・作用を受くるものにして、使役の發動的なるに反して受動詞である。即ち「被・見・爲・所・爲所」の類がこれである。

近執事始被召於陳州。八家文。

匹夫見辱、拔劍起、挺身而鬪。八家文。

此信所以爲陛下禽。十八史略。

先則制人、後即爲人所制。史記。

文脈語勢の上にて明かなるものは、助動詞を用ひずして受身を表はす。  
狡兔死、走狗烹、飛鳥盡、良弓藏。十八史略。

(六)打消の助動詞 否定を表はすものにして、「不・弗・非」及び「未・勿・毋・罔・莫・無」を用ひる。但し後の「未・勿・莫・罔」は時によつて打消副詞として扱はれ、又「無」が單獨に述語に立つ時は一個の動詞と同様に扱はれる。故に單純なる打消助動詞は「不・弗」あるのみといふも可。

韓愈之賢不及孟子、孟子不能救之於未亡之前。八家文。

非有能蚤而蕃之也。八家文。

既然已、勿動勿慮。八家文。

皆視其色、俟其言、莫敢自斷者。八家文。

求無不獲者、惟書乎。八家文。

打消助動詞は又禁止の意を表はす。就中「勿」を一般に用ひ、「不・無」なども用ひる。「不可」の連用も、亦禁止の意に用ひることは、今更いふまでもない。

過則勿憚改。論語。

曰持其志、無暴其氣。孟子。

親之過小 而怨 是不可磯也。孟子。

打消助動詞の重用は肯定となること既述の如くで、文の平板を破る一手段である。

父母之年不可不知也。論語。

一民莫非其臣也。孟子。

諸侯將入 轅門 無不膝行而前。史記。

此の場合其の二個の打消を取去りたるものと同じである。

打消の意を有するものは、唯打消助動詞のみならずは、否定副詞の條に述べた通りである。

位置 助動詞は動詞の上に冠して其の意義を完全にするものである。更に又形容詞の上、副詞の前後に在りて其の語を制限する。動詞の省略せられたる時、獨立して述語の地位にあることは、性質上の分類の項に陳べた。そしてこは多く問答體にして、不完全動詞「曰」の下に來るものである。

第七節 前置詞

前置詞 名詞・代名詞・及び名詞句の上に置きて、述語動詞若くは形容詞との文章上の關係を示すものである。即ち「于・乎・於・與・爲・以・從・自・由・用」等がこれ。

用法上の分類 動作の目的標準を見はすもの、其の起點を見はすもの、動作の及ぶ範圍及び時を見はすもの、受身を見はすもの、比較を見はすもの、獨立して動詞的用法となるもの、倒裝して後置詞に轉ずもの。

(一)目的標準を見はすもの「于・乎・於」は相通じて用ひらる、就中「於」は最も多く用ひられる。

妻以二女、曰三娥皇・女英。釐三降于媯汭。十八史略。

不願乎親不信乎朋友矣。中庸。

夫勇者可以施之於怯。不可施之於智。八家文。

右の如く大抵假名「ニ」を送れども、中には客語の如く「ヲ」を附するものも少くない。これは漠然と其の事に就きて云々するの義なれば、決して客語と混同してはならぬ。

君子素其位而行、不願乎其外。中庸。

博學於文、約之以禮。論語。

于・乎・於の中「于」は用法稍古く、書・詩に多く用ひられてゐる。叙説文に於て同じく動作の範圍標準を示しながら、或場合に前置詞を用ひずして見はすものがある。

拜下禮也。今拜乎上泰也。論語。

(二) 起點を見はすもの「自由・從・於」を用ふ。  
有<sub>レ</sub>朋自<sub>ニ</sub>遠方<sub>一</sub>來。 論語。

禮義由<sub>ニ</sub>賢者<sub>一</sub>出。 孟子。

會<sub>ニ</sub>大風從<sub>ニ</sub>西北<sub>一</sub>起、折<sub>レ</sub>木發<sub>レ</sub>屋揚<sub>ニ</sub>沙石<sub>一</sub>畫晦。 十八史略。

如<sub>レ</sub>此者未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>始<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>思<sub>一</sub>然後得<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>己<sub>一</sub>。 八家文。

右は主として「ヨリ」と訓むものであるが、此の中の「於」は又「ニ」とも訓みて猶起點を見はす。

(三) 範圍及び時を見はすもの「于・乎・於」を通用するも、一般に「於」を用ひる。  
此謂<sub>ニ</sub>誠<sub>一</sub>於<sub>ニ</sub>中<sub>一</sub>形<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>外<sub>一</sub>。 大學。

受<sub>ニ</sub>任<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>敗軍<sub>一</sub>之際、奉<sub>ニ</sub>命<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>危難<sub>一</sub>之間。 文章軌範。

(四) 受身を見はすものには、前置詞「於・于・乎」を動詞と名詞との間に挟む。

獲<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>上<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>道、不<sub>レ</sub>信<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>友<sub>一</sub>、弗<sub>レ</sub>獲<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>上<sub>一</sub>矣。 孟子。

獲<sub>ニ</sub>乎<sub>ニ</sub>上<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>道、不<sub>レ</sub>信<sub>ニ</sub>乎<sub>ニ</sub>朋友<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>獲<sub>ニ</sub>乎<sub>ニ</sub>上<sub>一</sub>矣。 中庸。

受身を見はすものには、前置詞の外助動詞を用ふる場合が多い。受身の助動詞の條参照。  
(五) 比較を見はすもの。二者の前後・優劣等を比較するに同じく「于・乎・於」を用ふ。

矢人豈不<sub>レ</sub>仁<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>函人<sub>一</sub>哉。 孟子。

青出<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>藍<sub>一</sub>而青<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>藍<sub>一</sub>。 荀子。

孝子之至莫<sub>レ</sub>大<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>尊<sub>レ</sub>親<sub>一</sub>。 孟子。

大抵送假名は「ヨリ」として比較する前置詞の下の語に附する。或は稀に「ニ」と訓みて、やはり比較を見はせるものがある。

(六) 獨立して動詞となれるもの。動詞の省かれたる時、前置詞「於」が動詞の如く活用するもの。

由<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>瑟奚爲<sub>一</sub>於<sub>ニ</sub>丘之門<sub>一</sub>。 論語。

造次<sub>ニ</sub>必<sub>レ</sub>於<sub>ニ</sub>是<sub>一</sub>、顛沛<sub>ニ</sub>必<sub>レ</sub>於<sub>ニ</sub>是<sub>一</sub>。 論語。

假名は「於」を送る。又「オイテ」の意義なる時、其の前に多く「之」の字を介して、「……於」と中止形にする。

(七) 倒装によりて後置詞となるもの。修辭上前置詞が中心となりて上下の語の置換へらるる時、以前の目的語たる名詞を上にして下の動詞に連るもの、即ちこれは後置詞となつたのである。

四國<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>蕃<sub>一</sub>、四方<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>宣<sub>一</sub>。 詩經。

日居<sub>ニ</sub>月<sub>ニ</sub>諸<sub>一</sub>、東方<sub>ニ</sub>自<sub>ニ</sub>出<sub>一</sub>。 同。



室於怒、市於色。左傳。  
衣食於奔走。文章軌範。

前置詞は、其の目的たる名詞と共に抽出せられて、動詞の上に来ることがある。而してこれ多くは副詞的用法である。

始、吾於人也聽其言而信其行。今吾於人也聽其言而觀其行。論語。  
於已取之而已矣。孟子。

前置副「以・與」に就きて、「以」は通常名詞に冠して「ニテ・デ」或は稀に「ヲ」の意義を見はす。反復する時は其の一を置きて他は省略し、其の名詞に「ヲモテ」又は「モテ」の假名を送る。

亢倉子能以耳視、而目聽。列子。  
「以」が名詞の上なる時は疑もなく前置詞であるが、動詞の上に来りて「ソレデ」の意なる時は、副詞である。

君子不可不修其身。中庸。  
又前後文を接続して「ソシテ・ソレダカラ」の意なれば即ち接続詞である。  
好古敏以求之者也。論語。

告子未嘗知義、以其外之也。孟子。

動詞の下に「以」を連ねる時は固より前置詞と見るべきものなれども、上の動詞は殆ど副詞の如きものなれば、取扱上「以」を動詞とする方が便宜である。

殺人以梃與刃、有以異乎。孟子。  
而賊告以國亡主滅。八家文。

「與」も名詞に冠して下の動詞に應ずる時は前置詞であるが、名詞と名詞とを結合するものは接続詞である。

與巡死先後異耳。八家文。  
夫舉天下之至美與其樂、有不得而兼焉者多矣。八家文。

動詞に冠して「共ニ」の意なるものは副詞。  
遂去不復與言。續文範。

噫微斯人、吾誰與歸。文章軌範。  
前置詞「爲」に通じて用ひられるもの。  
陽城人陳勝字涉、少與人傭畊。十八史略。

「與」が其の目的の下に位する時は後置詞に轉化したるものである。

義之與比。論語。

「與」が動詞として「與フ・クミス」となり、疑問の助辭「歟」と通用することは、更に同字異用の項に詳述する。「以・與」の前置詞の目的語が省略せられて、恰も接續詞の如く見ゆるものがある。これらは一應其の省かれたる代名詞を補ひて見る必要がある。

陛下使<sup>ハシ</sup>人<sup>ヲ</sup>攻<sup>ム</sup>城<sup>ヲ</sup>略<sup>ス</sup>地<sup>ヲ</sup>、因<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>予<sup>ヘ</sup>之<sup>ニ</sup>、與<sup>ニ</sup>天下<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>利<sup>ヲ</sup>。(因<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>地<sup>ニ</sup>予<sup>ヘ</sup>之<sup>ニ</sup>) 十八史略。

前置詞「以」と代名詞「是」との連語「以是」は「是を用ヒテ・是ニヨリテ」の義にして、疑もなく「以」は前置詞である。「是以」は「此ノ故ニ」の義、「以」は接續詞の如き用法となる。但し「爲是・由是」などと等しく本來「以是」の形なるべきものが、後に「是以」の形を生じ多少使用上區別を立てたるものやうである。

### 第八節 後置詞

後置詞 名詞の後に在りて他の品詞との關係を示すものを後置詞といひ、邦文典には此の名目を存しない。本來の後置詞は「之」一字で我が「ノ・ガ」の助詞に當る。外に「者」の字の如きも、亦時によつて後置詞の用法がある。また前置詞より轉じたるものに「于・乎・由・自・從・以・與・爲」がある。

#### 「之」の用法

我が「ノ・ガ」と齊しく主格の下に附きて述語と相接する。即ちこは名詞と動詞の中間に置かるるもの、此の他名詞と名詞とを連ねて複合名詞を作る。但し主句若くは屬句の主格の下にありて動詞に應じ、更に他句に連接する時は「者・所」と同じく取扱ふ。

百姓<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>保<sup>ヲ</sup>、爲<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>用<sup>ニ</sup>恩<sup>ヲ</sup>焉<sup>ニ</sup>。孟子。

老<sup>ニ</sup>吾<sup>ノ</sup>老<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>及<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>老<sup>ヲ</sup>、幼<sup>ニ</sup>吾<sup>ノ</sup>幼<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>及<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>幼<sup>ヲ</sup>。孟子。

名詞と名詞との間に在りて、それを結合して一箇の名詞たらしむるものは、主格にても賓格にても皆後置詞なのである。然るに目的たる名詞の下に在りて直に動詞に接するものは、一種の強意の辭にして、形式は指示代名詞となれるもの、左の引例の後者が即ちこれである。

禹<sup>ノ</sup>避<sup>ク</sup>舜<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>子<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>陽<sup>ノ</sup>城<sup>ニ</sup>、天<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>民<sup>ノ</sup>從<sup>フ</sup>之<sup>ニ</sup>。孟子。

子<sup>ノ</sup>曰<sup>ク</sup>父<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>唯<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>疾<sup>ヲ</sup>之<sup>ノ</sup>愛<sup>ス</sup>。論語。

人名の間に挿みて聲調を諧へること、恰も名詞の間に挿みて特に其の上の名詞を指示し、又其の音聲を調ふると同じである。

衛<sup>ノ</sup>使<sup>ム</sup>庚<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>斯<sup>ヲ</sup>追<sup>ヒ</sup>之<sup>ニ</sup>。孟子。

孟<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>反<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>伐<sup>ヲ</sup>、奔<sup>リ</sup>而<sup>テ</sup>殿<sup>ス</sup>。論語。

「者」の用法 元來「者」は諸詞を率ゐて名詞句を作るものであるが、名詞の下に位してその意義の軽くして「……ハ」と訓む場合は、單に名詞に隨伴せるのみなれば後置詞となりたるものである。而してこは特に前に承けたる名詞を指示して其の意を重からしめるものである。

誠者天之道也。中庸。

天下者器也。天子者有此器者也。八家文。

又「ナル者ハ・ト云フモノハ・トハ」の義なる時も後置詞として取扱ふ。

孝悌也者其爲仁之本與。論語。

中也者天下之大本也。和也者天下之達道也。中庸。

嬖人有臧倉者沮君。孟子。

その他智者・仁者・勇者・死者・生者・强者・弱者・大者・小者の如きも亦後置詞として、者の字を用ひたものである。

「乎」の用法 前置詞の轉化したるものにして、上に疑問代名詞「惡」を承ける場合が多い。

惡乎用之。左傳。

惡乎成其名。論語。

有時乎爲貧。孟子。

その他に堂々乎・巍々乎・蕩々乎・煥乎・屬乎・確乎の如き皆後置詞として乎の字を用ひしものである。

「自由從」の用法 本來は前置詞なれども、疑問代名詞又は關係代名詞を承くるによりて、其の後に隨へるものである。

晨門曰奚自。論語。

何由知吾可也。孟子。

天下何從圖秦。戰國策。

「以爲與」の用法 これ又前置詞の轉化したるものにして、名詞と動詞とを接続する。其の接続の用

をなすものは接続詞、用言を修飾するものは副詞として扱ふを妥當とする。疑問代名詞の場合は其の下位に在りても、意義は前置詞と異なる。さればこの三者を強ひて後置詞とするにも及ばぬ。

君子學以致其道。論語。(副詞)

一言以蔽之。論語。(接続詞)

子揖所與立。論語。(副詞)

山之瑟奚爲於丘之門。論語。(疑問副詞)

雖多亦奚以爲。論語。(前置詞)

何以異於人哉。孟子。(前置詞)

「于・於・乎」は前置詞の條に説述したれば、茲には重出の煩を避く。

第九節 接續詞

接續詞 文字と文字、或は句と句、若くは文と文とを連結する所のものを接續詞といふ。

性質上の大別 單に字又は句、或は文を連接するのみのものを通常接續詞となし、その上更に動詞・副詞などを制限し修飾するものを副詞的接續詞又は接續副詞とする。

通常接續詞 上下の語、又は句、若くは文を接續するのみにして、同等の語を連結するものをいふ。

「又・及・暨・泊・越・而・與・且」等はこれである。

副詞的接續詞 これに次の接續詞・副詞・副詞句等がある。

(一) 上文を承けて下文に接するもの。「則・乃・即・廼・輒・便・因・然・然後・而後・於是・以・以是・是以・用・故・以故・是故・由是」等これである。

(二) 上文を承け筆を新にして假説を表はし、或は層疊・選擇の意を見はすもの。「若・如・夫・且・今・又・凡・蓋・抑・寧・將・或・況・矧・設・從・假令・若夫・且夫・今夫・大凡・抑亦・其或・其又」等がこれ。

(三) 上文を翻して下文を起す所のもの、一に反接接續詞といふ。「然・而・雖・不・然・雖然」等これに屬す。

(四) 二者比較するもの、「與・不獨……亦・不啻……亦」等がこれ。

(五) 上文を承けて説明注釋するもの。「何・何者・何則・所以・爲……故」などこれである。

接續品詞 名詞と名詞・代名詞と代名詞・二箇の形容詞・二箇の動詞・名詞と動詞・動詞と副詞・名詞と形容詞を接續するものがある。

(一) 名詞と名詞との接續詞。「與・暨・又・及・且・越」等は即ちこれ。

(二) 代名詞と代名詞とを結合するもの。「及・與」がこれに屬す。

(三) 形容詞と形容詞との結合。「而・且・則・與」等がこれ。

(四) 動詞と動詞との結合。「而・乃・是以・則」など。

(五) 副詞と動詞との結合。「而」のみ。

惘然 而悲、肅然 而恐。文章軌範。

(六) 名詞と動詞又は形容詞との結合。「而・以・之」即ちこれ。

(七) 助動詞と動詞とを結合するもの。「以・得・而」など。

右は純然たる接續詞にあらざることは既に述べた通りである。但その文字若くは句文を結合する方面よ

Handwritten notes in the right margin of the left page, including characters like '然', '而', '雖', '不', '然', '雖然' and some vertical text.

りして、之を接續詞に一括したのである。  
主要なる接續詞に就きて

(一)而 句と句又は主句と附屬句とを結合し、文字を結合することは稀である。而して順接して對等の語句を結び、或は連續の役目をなして因果關係の仲介字となる。

禮節繁多 而君臣之義薄。 八家文。

見危 而授命、見利 而不忘義。 八家文。

又上文を押返して下文を強く肯定するに用ふ。「而・而・而」の意なる時は即ちこれ。

心不在焉、視而不見、聽而不聞。 大學。

外無待而猶死守人相食且盡。 八家文。

「而然」も亦反揆的に接續する。「而況」は他の接續詞「且猶」と等しく言外に重きを悟らしむる層疊的用法である。

「而」は又別に「如若」に通じて、「モシ・ゴトシ・ニシテ」と訓み、又「以・則」にも通用する。動詞又は名詞を承けて下の打消助動詞に接し、更上の打消語に應じて二重の打消となる時は、「トシテ」の假名を送るを常とする。

君子無入 而不自得。 中庸。

(二)則 因果關係を表はすものにして、「レバ則」と名づくるもの。字と句若くは句と句を因果關係に於て結合する。

萬鍾則不辨禮義而受。 孟子。

「而後・則」は間、其の位置を轉ずることがある。

先行其言而後從之。 論語。

及楚殺子玉、公喜而後可也。 左傳。

山有木工則度之。 左傳。

(三)且 句と句を連ねて又の意となり、或は尙の意となる。

自歌且舞。

獸相食 且人惡之、爲民父母 行政不免於率獸而食人。 孟子。

「且」は副詞の用をなして「マサニ」とも訓む。

(四)雖 上文を押反して下文を起す反揆接續詞で、屬句と主句とを連ねる。意味は縱・假令などに通じて「タトヒ」を訓むも決して誤りではない。

(五)故 推論し断定するの詞、即ち或る原因より結果を誘導する接續詞である。古くは肆などの字を用ひた例もある。

(六)抑 句を連ねて第一其の選擇を表はす。多くは抑亦と接續する、「ソレトモ亦」の意。第二に反對的意味をなすもの、「マダマダ一體」の意となる。第三疑問豫測を表はす。「ソレカ或は又」の意となり、また憶と通じて「オモフニ」の意となる。

(七)又・亦・復 又・亦は字と字若くは字と句とを接續する。又は連鎖的平等に連接する、而して將又・而又などの連語をなす。別に副詞の如く「殊更ニ・フタタビ」の意に用ひられる。亦是所謂「も亦」にして、上下各句に在りて相合して一つの文章を完結するを常とする。されど單に重要なもののみを擧げて他を略することがある。有は又と同一音なるによつて屢、又に通用せられる。復は「フタタビ」の義なる副詞である。還は古書に亦と同じく用ひたるものが多い。

(八)如・若 假設を表はし、上文を尋ぎて下文の意義を展開する所の接續詞である。字音の近似よりして如・若・而皆「モシ」と訓む。或は「モシクハ」とも訓む。但し「ゴトシ」の時は接續詞ではない。

(九)與・并・及 與は「ト」及は「オヨビ」并は「ナラビニ」と訓みて、皆同様に字と字若くは字と句を連繫する接續詞である。

第十節 終詞

終詞 語句の末に附屬して指定・疑問・感歎の意を表はすもの。

(一)指定の終詞 也・矣・焉・已・爾・耳・旣等は即ち意志の決定を表し、又中には上文を承けて事物場所等を代表するものもある。

一、也の用法 也は現在に用ひて全稱的に断定する。即ち論評的決定を與ふるものにして、「是・即・非・未」などと呼應する。又名詞が述語に立つ時、大抵この也を伴ふものであることは既述の通りである。矣の急なるに比して也は餘裕ある断定である。

見<sup>テ</sup>義<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>爲<sup>ル</sup>無<sup>キ</sup>勇<sup>也</sup>。 論語。

朽木不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>雕<sup>ル</sup>也。 論語。

既<sup>ニ</sup>欲<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>生<sup>ヲ</sup>又<sup>ニ</sup>欲<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>死<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>惑<sup>也</sup>。 論語。

也の呼掛の辭に用ひらるることは後に述べようとする所であるが、也は此外下の「乎」と應じて「則」の如き意となる。

必<sup>ズ</sup>也<sup>レ</sup>使<sup>レ</sup>無<sup>ク</sup>訟<sup>乎</sup>。 論語。

必<sup>ズ</sup>也<sup>レ</sup>親<sup>レ</sup>喪<sup>乎</sup>。 論語。

稀に也が過去に用ひられるけれども、これとても歴史的現在法によつて充分解釋されるものである。  
**二、矣の用法** 矣は事實に就きて全稱的經驗的に断定する。也は主として道理上「サウナルハツダ」の意、矣は事實上「チガヒナイノダ」の意を表はす。矣は既・肯等に應じて過去を現はし、則・斯等と共に未來を表はす。又現在までの繼續、或は事實或は未來の豫想を何等の呼應なくして表はす。

丘之禱久矣。論語。

知不足之足常足矣。老子。

吾嘗聞之矣。論語。

我欲仁斯仁至矣。論語。

王欲行王政則勿毀之矣。孟子。

**三、焉の用法** 焉は過去より現在、現在より未來に於ける經過を指示する終詞で、又代名詞「之」の如く用ひる。されば「コレニコレヲ」と訓み得る場合が多い。

天地位焉、萬物育焉。中庸。

就有道而正焉。論語。

**四、旃の用法** 上文を受けて事物を指示することは焉と同じである。蓋し旃は「之焉」の約で、終止と

代名詞とを兼ねる。

初虞叔有玉、虞公求旃。左傳。

**五、已・爾・耳の用法** 音の類似により殆ど同一に用ひらるるもの、或制限を以てする特稱的の断定の終詞である。已は多く「而已」と連續して未來に用ひ、若・雖・必・是を承け、也・矣に連る。爾は唯・但・云に、耳は僅・纔・財等に呼應して共に過去を表はす。然しながら右の三者を通じて、現在を指示することあるは勿論のこと、此の場合「已」か意義の上に於て最も軽い。

皜々乎不可尙已。孟子。

年四十而見惡焉、其終也已。論語。

恭己正南面而已矣。論語。

雖有善其辭命而至者、不受也、不受也者、是亦不屑就已。孟子。

如以辭而已矣、雲漢之詩曰周餘黎民靡有孑遺。孟子。

後雖悔之不可食已。左傳。

詩陶思君爾、忸怩。孟子。

便々言唯謹爾。論語。

是何足<sup>レ</sup>言<sup>ニ</sup>仁義<sup>一</sup>云爾。孟子。

聖人先得<sup>ニ</sup>我心之所<sup>ニ</sup>同然<sup>一</sup>耳。孟子。

狡兔僅得<sup>レ</sup>免<sup>ニ</sup>其死<sup>一</sup>耳。戰國策。

終詞の重用 已は單獨よりも却つて他の終詞と連用する場合が多い。即ち而已・而已矣・也已矣・而已耳等これ。而して而已は稍軽く、次に也已矣・而已矣は稍入念に、而已耳は最も重きをなすものの如くである。

(二)疑問の終詞 語尾に附きて疑問を表はす詞にして、乎・邪・與は其の主要なるものである。耶・歟は邪・與の別字のみ。諸も之歟の二字の合音であるから亦疑問の意がある。

此の中「乎」は一般の疑問に用ひて稍軽く、「邪・與」は怪疑・難詰等に用ひて稍重いと云ふてゐるものが多い。しかし音韻學上より言はず、皆同一音に歸するのであるから、大した區別は出来ない。

爲<sup>レ</sup>人謀<sup>ニ</sup>而不<sup>レ</sup>忠<sup>一</sup>乎。論語。

既焚<sup>ニ</sup>子退<sup>一</sup>朝<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>傷<sup>レ</sup>人<sup>一</sup>乎。論語。

嗚呼<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>謂<sup>ク</sup>遠<sup>一</sup>之<sup>レ</sup>賢<sup>一</sup>而爲<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>耶。八家文。

疇昔<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>夜<sup>一</sup>飛<sup>レ</sup>鳴<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>過<sup>レ</sup>我<sup>一</sup>者非<sup>レ</sup>子<sup>一</sup>也邪。後赤壁賦。

從<sup>レ</sup>我<sup>一</sup>者其由<sup>レ</sup>與。論語。

天<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>道<sup>一</sup>其猶<sup>レ</sup>張<sup>レ</sup>弓<sup>一</sup>與。老子。

秦<sup>ニ</sup>歟<sup>一</sup>、漢<sup>ニ</sup>歟<sup>一</sup>、將<sup>レ</sup>近<sup>レ</sup>代<sup>一</sup>歟。續文章軌範。

又これらに他の終詞を副へて用ふることがある。即ち矣乎・也與・焉爾乎・也與哉・而已乎等がこれである。

女<sup>ニ</sup>爲<sup>レ</sup>周<sup>一</sup>南<sup>ニ</sup>召<sup>レ</sup>南<sup>一</sup>矣乎。論語。

女<sup>ニ</sup>得<sup>レ</sup>人<sup>一</sup>焉爾乎。論語。

又稀に也邪同音なるを以て也を耶に假借することがある。

將<sup>レ</sup>戕<sup>ニ</sup>賊<sup>一</sup>杞<sup>一</sup>柳<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>後<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>梧<sup>一</sup>捲<sup>一</sup>也。孟子。

指定の也・矣・已・爾が上に疑問代名詞を承ける時は恰も疑問終詞の如くに見える。然しこは疑問代名詞によりて、其等終詞の如何に關せず疑問を起すものである。

文王<sup>何</sup>可<sup>レ</sup>當<sup>一</sup>也。孟子。

焉<sup>有</sup>仁<sup>一</sup>人<sup>ニ</sup>在<sup>レ</sup>位<sup>一</sup>罔<sup>レ</sup>民<sup>一</sup>而可<sup>レ</sup>爲<sup>一</sup>也。孟子。

(三)感歎の終詞 喜悲哀樂に就きて其の歎聲を表はすもので、哉・夫の二字は即ちこれに屬する。哉・夫



は本来の感歎詞で、決して疑問の意を有するものではない。但上に何・焉・安等の疑問代名詞を承けるか、又は與・乎等の疑問詞を承ける時に疑問の如く見えるのである。また乎・矣の二字は本来より感歎の意あるものでない。けれども矣が時に断定よりして感歎に轉用せられて「カナ」と訓み、乎が場合により疑問より轉じて感歎を表はすこともある。

沽<sup>ラ</sup>之<sup>ヲ</sup>哉<sup>カ</sup>沽<sup>ラ</sup>之<sup>ヲ</sup>哉<sup>カ</sup>、我待<sup>ハ</sup>買<sup>ハ</sup>者<sup>ナ</sup>也<sup>ナ</sup>。 論語。

管仲<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>器<sup>ナ</sup>小<sup>ナ</sup>哉<sup>カ</sup>。 論語。

惟我<sup>ト</sup>與<sup>ニ</sup>爾<sup>ト</sup>有<sup>ル</sup>是<sup>レ</sup>夫<sup>ナ</sup>。 論語。

逝者<sup>ハ</sup>如<sup>キ</sup>斯<sup>ノ</sup>夫<sup>ナ</sup>。 論語。

惜<sup>ハ</sup>乎<sup>ナ</sup>夫子<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>說<sup>ク</sup>君子<sup>ト</sup>也<sup>ナ</sup>。 論語。

逝<sup>キ</sup>矣<sup>カ</sup>西<sup>ノ</sup>土<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>人<sup>ナ</sup>。 書經。

哉・乎は讀、即ち中止句に置かれることがある。夫は大抵句尾で、矣は中止句即ち文の結尾以前の句若くは讀にも、又句尾にも兩用せられる。さりながらこれ等を通じて文の最後に置かるべきは、終詞の原則である、今更いふまでもない。この他同じく感歎を表はすに、指定の終詞との連語をなすものがある。也夫・也哉・矣哉・矣夫等は即ち

是である。

莫<sup>キ</sup>我<sup>ヲ</sup>知<sup>ル</sup>也<sup>ナ</sup>夫<sup>ナ</sup>。 論語。

君子<sup>ニ</sup>レテ<sup>テ</sup>而不<sup>レ</sup>仁<sup>ナル</sup>者<sup>有</sup>矣<sup>夫</sup>。 論語。

久<sup>シ</sup>矣<sup>シ</sup>哉<sup>カ</sup>由<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>行<sup>ハ</sup>詐<sup>ナ</sup>也<sup>ナ</sup>。 論語。

子臧<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>服<sup>不</sup>稱<sup>也</sup>夫<sup>ナ</sup>。 左傳。

**呼掛** 感歎詞の一種に人名に附けて呼ぶものがある。別に目を立つる必要はないが、終詞の特別用法として記憶に存せねばならぬ。即ち乎・也の二字がこれ。

參乎<sup>ガ</sup>吾道<sup>ハ</sup>一<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>貫<sup>ク</sup>之<sup>ナ</sup>。 論語。

樊乎<sup>ガ</sup>吾聞<sup>レ</sup>之<sup>ナ</sup>。 左傳。

雍也<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>使<sup>ニ</sup>南<sup>ニ</sup>面<sup>セ</sup>。 論語。

賜也<sup>レ</sup>非<sup>ニ</sup>爾<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>也<sup>ナ</sup>。 論語。

**助語の終詞** 聲調を諧へる爲めに句尾語末に添へる意味なき字がある。一種の感歎詞と見るべきか。特に古書の中に此の用法の多きを見る。詩經に其・止・思・斯・只・居・諸・且・兮など最も多く、孟子・莊子に又「來」字を用ひたる所がある。要するにこは音の近似より互に通用せられたものである。この中

「來」は「哉」に近きより用ひられたものであると思ふ。

### 第十一節 感歎詞

**感歎詞** 吾人が事物に對して感ずる好惡・喜怒・哀樂・是非等の心情より發する聲音の謂である。一般の喜悲哀樂の歎聲を表はすもの、許諾同意を表はすもの、難詰不同意を表はすもの等も皆これに屬する。

一、一般に用ひらるる歎聲 嗚呼・噫・嘻・於・於戲・咨・吁・都・嗟・惡・嗟呼・唉・猷などこれ。

二、許諾同意を表はすもの 唯・諾・然・俞・固なども用ひる。

三、難詰不同意を表はすもの 否・不・不然・不也・非也・不可などを用ひる。

但し二三は單純なる感歎詞に非ずして、副詞其の他の品詞に用ひらるることが多い。而してこは應答詞として別に項を設けたる向も少くない。

**位置** 感歎詞は多く句頭に置かれる。一般の歎聲は大概句の首に置かれる。

噫ボセリ天喪レ予。論語。

嗚呼レ噫レ嘻レ我知レ之。後赤壁賦。

惡是何言レ也。孟子。

されど稀に句尾又は句中に用ひられることがある。應答諾否の詞は動詞の下に在りて、補語となりて述

語の地位に立つ。

曾子曰唯。孔子曰諾吾將仕矣。論語。

王曰否吾何快於是。孟子。

何嗟及矣。詩經。

慚莫懲ル嗟。禮記。

以上漢文法の大要を終つた譯であるから、よく熟讀して實際の運用に資せられんことを望む。次に和漢英の文法比較表を掲げて讀者記誦の便に供する。先づ其の名稱を左に對照せん。

和	漢	英
名詞	名	noun.
代名詞	代	Pronoun.
形容詞	靜	Adjective.
動詞	動	Verb.
助動詞	半動	{ Auxiliary Verb.
副詞	狀	Adverb.

接續詞	連字	Conjunction.
助詞	{前置詞 後置詞}	Preposition. (Preposition.)
感歎詞	嘆字	Interjection.

表其の一 文

句		成分の文		
單位	文の	附屬	文成主	
附屬句	主句	修飾語 (體言 用言)	述補客主 語語語 {第一 第二}	和
賓讀	主讀	加詞	起止 連語 詞詞	漢
Dependent Clause.	Principal Clause.	modifier.	Subject. Object {Direct. Indirect. Subjective. Objective. Predicate.	英

類種の文		語	類種の	
りよ上質性	りよ上造構		てと成文	てとし
命感疑平	重複單	連單	副形名	獨立句
令歎問叙	文文文	語語	詞容詞句	{主語 客語 補語}
命歎訝斷	疊帶單	頓字	狀靜名	聯排讀
戒戒問文	句句句		字字字	
Imperative Sentence.	Declarative Sentence. Interrogative Sentence. Exclamative Sentence.	Word. Phrase.	noun Clause. Adjective Clause. Adverbial Clause.	Independent Clause.
	Compound Sentence.			

\* 述語又は轉詞といふも我補語と多少異なる。

表其の二 名詞		種類	格	性	數	の中文
普通名詞	固有名詞	主格 所有格 目的格 補格格 同位格				主語 客語
公名 群名 通名 本名	名字 名字 名字 名字	主格 偏次 賓次 同次				起詞 止詞
Common noun. Collective noun. Abstract noun. Proper noun. Material noun.		nominative Case. Possessive Case. Objective Case. Complement. Apposition. Masculine gender. Feminine gender. Common gender. neuter gender. Singular number. Plural number.				Subject. Object.

務任	補語	轉詞	Complement.
形容修飾語	加詞	轉詞	modifier.

表其の三 代名詞

種類	格	種類	格
人代名詞 不他對自 定稱 事稱 物稱 事方 地方 人方 事面 物面 物面 遠稱 中稱 近稱	主格 所有格 目的格 補格格 同位格	指名代字 指示代字 假設代字 詢問代字	Nominative Case. Possessive Case. Objective Case. Apposition.
疑問代名詞 時方 事方 人方 面物 物面 物面	主格 所有格 目的格 補格格 同位格	指名代字 指示代字 假設代字 詢問代字	Personal Pronoun { 1st person. 2nd " " 3rd " " Demonstrative (Definite. Indefinite. Relative Person. Pronoun (Thing. Interrogative (Ordinary. Dependent. Indefinite. Pronoun

類	種		務任の中文	性	數
	態形	上質性			
正格活用 (二段・上一下)	自動詞 (不完完全)	他動詞 (不完完全)	主語 客語 補語 形容修飾語		
	內動字	外動字			
	Intransitive Verb (Complete, Incomplete, Transitive Verb (Complete, Incomplete, Regular Verb.	Regular Verb.	Subject, Object, Complement, Modifier.	Masculine Gender, Feminine, Neuter	Singular number, Plural

表其の四 動詞

時	形用活	相	上
			變格活用 (カ・サ・ナ・ラ・行)
現在完了 現在	將然形	能動	Irregular Verb.
現在完了 現在	連用形	受身動	
過去完了 過去	終止形	敬使受能 相役身動	Active Voice. Passive Voice. .....
過去完了 過去	連體形		(Base Form.) (Preterit form.) (Past participle.)
過去完了 過去	已然形		Present Tense. Present perfect Tense. Past Tense. Past Perfect Tense.
過去完了 過去	命令形		(副詞を用ふ)

止 終	式	法
未來 未來完了 通常終詞 連體終詞 已然終詞	否定式 肯定式 分詞法 名詞法 命令法 義務法 可能法 推量法 假說法 直說法	未來 未來完了 Future Tense, Future perfect Tense. Indicative Mood. Subjunctive Mood. Conditional Mood. Potential Mood. ..... Imperative Mood. Infinitive. Gerund. Participle

位置	文中の任務	人稱數
主・客・補語の後	述語 形容修飾語	
起詞の後止詞の前	加語 詞	
Subjectの後	Predicate. Modifier.	First Person {Singular number. Plural number. Second Person {Singular number. Plural. Third Person {Singular Plural.

表其の五 形容詞

種	性質	象靜字	英語
性質	性質状態を表はすもの 分量を表はすもの 數を表はすもの （基数 序數）	象靜字 （數目 序數）	Pronominal Adjective {Possessive. Demonstrative. Interrogative. Relative. Quantitative Adjective {Descriptive. Material. Adjectives of Quality {Proper. Numeral Adjective {Cardinal. Verbal. Ordinal.

位置	務任の中文	法 較 比	形 用 活	類
				上 態 形
體言の前後	述 語 連體修飾語 用言補語		已 然 形 連 體 形 終 止 形 連 用 形 將 然 形	通常形容詞 形容動詞
名字代字の前後	加 語 詞 詞 .....	平 差 極 比 比 比		
Noun Pronoun. の前後	Modifier. Complement.	Positive Degree. Comparative Degree. Superlative Degree.	Superlative Form. Positive Form. Comparative Form.	(Adjective flexible {Regular. Irregular. (Adjective not flexible.)

表其の六 副 詞

法 較 比	種 類	
	上 態 形	上 質 性
	本 來 の 副 詞 轉 來 の 物 體 名詞より 代名詞より 動詞より 形容詞より	時 的 副 詞 所 の 副 詞 狀 態 の 副 詞 數 量 程 度 の 副 詞 斷 定 の 副 詞 假 設 推 量 の 副 詞 疑 問 反 語 の 副 詞
	本 狀 字 複 形 狀 字 雙 疊 重 韻 成 句	記 時 狀 字 指 處 狀 字 言 容 狀 字 言 度 狀 字 決 事 狀 字 (連 接 狀 字) 雜 疑 狀 字
Positive Degree. Comparative Degree. Superlative Degree.	Simple Averb. Pronominal Advverb {Demonstrative. Interrogative. Relative. Adverbs derivated from Adjectives.	Adverbs of Time. Adverbs of Place. Adverbs of Quality or manner. Adverbs of Quantity or degree. Adverbs of Reason and Cause. (Conjunctive Averb.) Interrogative Averb.

文中の任務	連用修飾語	加詞	Modifier of Predicate or another Modifier.
位置	文の冒頭・動詞・形容詞・副詞の前	句頭・靜字・狀字・動字の前	Sentence, Verb, Adverb, Adjective の前後

表其の七 助動詞

類	種		
	上	質	性
獨立用法のもの	式の助動詞 (肯定・否定)	法の助動詞 (命令・希望・義務・可能・推量)	相の助動詞 (受身・使役・敬相)
助動字の獨立	指定・否定の助動字	指定助動字	受動・使令の助動字 未然助動字
			Auxiliary verbs of voice {Passive voice. Auxiliary verbs of Tense {Perfect, Future. Auxiliary verbs of mood {Subjective, Conditional, Potential.

位置	文中の任務	止	終	活用			形態上			
				形	用	活	動詞形・形容詞形 其他特殊なもの			
動詞の後	述語動詞の補助 連語・述語	已然終止	通常終止 連體終止	命令形	已然形	連體形	終止形	連用形	將然形	其他特殊なもの
動字・靜字・狀字の前	語詞の補助 頓									(Inflected.) (Not inflected.) (Base form.) (Preterit form.) (Past participle.)
										(Verb の前) Predicate の補助



表其の八 前置詞附後置詞

形態	性	質	位置	形態	質性	位置
體言に連る助詞	主格を示すもの 所有格を示すもの 目的格を示すもの 補格を示すもの 同位格を示すもの		連るべき語の後	同 前助詞	主格・所有格を示す	
介 字(前置詞)	主次介字 偏次介字 賓次介字 (指示介字) 同次介字 受動介字 動字狀介字		屬すべき字の前	介字(後置詞)	體字の後に來る主次偏次を示し又名字を作る	名字代字の後
Preposition.	Preposition of place. " Time. " Source or Origin. " Cause or Reason. " Agency and Instrumentality. " Reference. " Inclusion, Exclusion.		語の前・變則なるは後	(Preposition.)		

我が助詞は、英語前置詞に對しては後置詞の性質を帯びてゐる。漢文の後置詞は、本來の前置詞が其の位置を轉じたるものである。尤も「之」は初めより後置せられるものであるが、これも實は元主格を述語に結合する關係的助字なのである。

表其の九 接續詞

種	類
性 語と語を連ねるもの 句と句を連ねるもの 文と文を連ねるもの	上 並列を表はすもの 分別するもの 順接するもの 反振するもの
字と字を連ねるもの 讀と讀とを連ねるもの 句と句を連ねるもの	用 對立連字 過遞連字 陪從連字 推拓連字 反振連字 較量連字 説語連字
Conjunction of Word. Conjunction of Phrase. Conjunction of Sentence.	Subordinate Conjunction { Introducing noun Clause. Introducing Adjective Clause. Introducing Adverbial Clause. Copulative. Alternative. Adversative. Illative.

文中の任務	位置	位
	文の冒頭にあるもの	語句の中にあるもの
	句頭のもの	字句の中にあるもの 句を括みて呼應するもの
		Word, Sentence の中間 Sentence の冒頭 (Correlative Conjunction.) Sentence の後に在るもの

表其の十 終詞及感歎詞

種類	位置	種類	位置
斷定歎字 疑問歎字 咏嘆歎字 喚呼歎字		句尾、讀尾	
應答字 一般嘆字	同意 不同意	嘆美 嘆傷 哀傷 驚駭	
		Interjection. Address, Parting and Attention. Sorrow, Joy and Applause. Surprise, Dislike and vexation.	

位置

文の前

句頭又は中

Sentence の前又は中

### 第三章 用字法

凡そ漢文を解釋せんには先づ文字の位置を明かにし、品詞の相互轉用に注意せねばならぬ。實に漢文難解の一事は品詞轉用の復雜なるに因るものである。今茲に其の重要なるものを擧げて概略を説明する。同字にして種々なる用法を有するものと、異字にして同一の用法に歸するものとがある。

#### 第一節 同字異用

同字にして多様の用法を有するものは主として・與・爲・以・有・者・亡・道・願・惟などこれ也。  
 (一)之の字は代名詞「コレ」、動詞「ユク」、後置詞として「ノ」と訓む。代名詞としては客語・補語・主語となり、動詞の下若くは上に置かれ、動詞としては往くの意、後置詞としては主語と述語とを結合する。

學<sup>シテ</sup>術<sup>ヲ</sup>習<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup> 論語。  
 朝<sup>スル</sup>觀<sup>ス</sup>者<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>堯<sup>ノ</sup>子<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>之<sup>ヲ</sup>舜<sup>ニ</sup> 孟子。

萬乘之國<sup>スル</sup>其君<sup>ハ</sup>必千乘之家<sup>ナリ</sup>。孟子。  
民之歸<sup>レ</sup>仁也猶<sup>ニ</sup>水之就<sup>キ</sup>下<sup>キ</sup>獸之走<sup>ク</sup>墟也。孟子。

尙此の外「之」は代名詞と形容詞を結び、又倒装法の客語たる名詞と述語たる動詞との中間に介在してそを連接する。尤も「之」を軸として客語と動詞とを轉換する時は、「コレ」と訓みて單なる強意の辭の如く見える。こは一種の指示代名詞である。

破<sup>ラ</sup>堅<sup>ク</sup>拔<sup>ク</sup>敵<sup>ヲ</sup>如<sup>ク</sup>彼<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>難<sup>シ</sup>也。史記。

惟<sup>テ</sup>怪<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>欲<sup>ス</sup>聞<sup>ク</sup>。八家文。

父母唯<sup>テ</sup>其疾<sup>ヲ</sup>之<sup>ヲ</sup>憂<sup>フ</sup>。論語。

同じく二箇の名詞が並立して主格をなす時、其の接續詞の前なる「之」は、後置詞として前なる主格につくものであるが、これは寧ろ黙過して訓まぬ方が邦文の意を得てゐる。尙黙して訓まざるものに副詞的用法の助語がある。即ち「久之」「少之」「頃之」などの類がこれである。

君子之<sup>ヲ</sup>與<sup>ニ</sup>小人<sup>ニ</sup>其性<sup>一</sup>也。荀子。

善<sup>ト</sup>之<sup>ヲ</sup>與<sup>ニ</sup>惡<sup>ト</sup>相<sup>コト</sup>去<sup>ル</sup>。何若<sup>ゾ</sup>。老子。

又動詞の連體形に「之」を連ねるは、聲調を整へて緩やかにするもので、外には意味はない。

常<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>責<sup>ム</sup>人<sup>ノ</sup>之心<sup>ヲ</sup>責<sup>ム</sup>己<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>恕<sup>ム</sup>己<sup>ノ</sup>之心<sup>ヲ</sup>恕<sup>ム</sup>人<sup>ノ</sup>。小學。

(二)與 こは動詞として一般に「アタフ」と訓み、又「クミス」「アヅカル」とも讀む。副詞として「トモニ」、前置詞として「ト」「タメニ」、接續詞として「ト」「ヨリハ」、終詞として疑問「カ」「ヤ」と讀む。

必<sup>ク</sup>聞<sup>ク</sup>其政<sup>ヲ</sup>、求<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>與<sup>ニ</sup>、抑<sup>テ</sup>與<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>與<sup>ニ</sup>。論語。

范增曰<sup>ク</sup>漢易<sup>ク</sup>與<sup>ニ</sup>耳。史記。

君子有<sup>ニ</sup>三樂<sup>一</sup>而<sup>シテ</sup>王<sup>ニ</sup>天下<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>與<sup>リ</sup>存<sup>ニ</sup>焉。孟子。

載<sup>テ</sup>與<sup>ニ</sup>俱<sup>ニ</sup>歸<sup>リ</sup>立<sup>テ</sup>爲<sup>レ</sup>師。十八史略。

邵雍與<sup>ニ</sup>客散<sup>ニ</sup>步<sup>シテ</sup>天津橋上<sup>ニ</sup>聞<sup>ク</sup>杜鵑聲<sup>一</sup>。十八史略。

與<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>備<sup>フ</sup>耕<sup>一</sup>。十八史略。

禮<sup>ト</sup>與<sup>ニ</sup>食<sup>ヲ</sup>孰<sup>キ</sup>重<sup>キ</sup>。孟子。

與<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>媚<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>與<sup>ニ</sup>、寧<sup>シ</sup>媚<sup>ル</sup>於<sup>テ</sup>竈<sup>ニ</sup>。論語。

子非<sup>ニ</sup>三閭大夫<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>。續文章軌範。

接續詞としての「ヨリハ」と訓むものは二者相對立せしめて、其の比較撰擇を表はすものである。そして

多く「與……寧……」又は「與……孰若」の形をとる。

(三)爲 動詞として自動に「ナル」、他動に「ナス」「ヲサム」「ツクル」「マナブ」「オモフ」、助動詞として「タリ」「ラル」、前置詞として「タメニ」、接續詞として「タメ」「タメノ」と訓む。

又曰字聃、爲周守藏吏。十八史略。

肉袒負荆詣門謝罪、遂爲刎頸之交。十八史略。

爲巨室、則必使工師求大木。孟子。

女爲周南召南矣乎。論語。

吾羞、爲之下。十八史略。

此信所以爲陛下禽。十八史略。

爲人謀而不忠乎。論語。

民之爲道也、有恒產者有恒心。孟子。

飲食之人則人賤之矣、爲養小以失大也。孟子。

受身には大抵所と合して「……爲……所……」の形をなす。又おもふ、おもへらくと讀むには「以」字を添へる。

唯友悌深至不爲傍人所移者免夫。小學。

以爲 天下之人不能皆賢不能皆不肖。八家文。

助動詞「タリ」を「タメ」と齊しく名詞の前に置くが故に前置詞となすものがある。然しこは別に深き意味なく、單に「デアル」と解する時は助動詞と見るべきである。「爲人」は連語として「人トナリ」と訓み、前置詞の場合は「人ノ爲メニ」と訓む。「以爲」は連語としても、亦一字一字別にしても「オモフ・オモヘラク」と訓む。尙この外動詞として「マネス」「タスク」などと讀むも、用例は稀である。

伴爲不知永巷而入其中。史記。

夫子爲衛君乎。論語。

(四)以 動詞「以テス」「オモフ」「ヒキキ」「キ」「ヤム」と訓み、副詞「以テ」「ハナハダ」「ステニ」「オモフニ」「オモヘラク」、接續詞「モツテ」「以テノ」、前置詞は名詞・代名詞の前に冠して「以テ」、名詞は「ユエ」と訓む。所と合して「ユエン」となるもこれは名詞。

夏后氏以松般人以栢周人以栗。論語。

伏以 佛者夷狄之一法耳。八家文。

以銳兵數千來攻。外史。

無以則王乎。孟子。

以言從之便以說人主。史記。

木若以美然。孟子。

今以如知矣。韓非子。

守先王之道以待後之學者。孟子。

所貴於士以有氣節。言志後錄。

以心爲形役。文章軌範。

古人秉燭夜遊良有以也。續文章軌範。

又動詞として用と同一に使はれる。前置詞が一度其の位置を轉ずると、後置詞となるも訓方は變らない。

以羊易之。孟子。

君子義以爲質禮以行之。論語。

これら多種多様の用法は元より字音の相通より來ることは今更いふまでもない。即ち「以己」相類して「ハナハダ・ステニ・ヤム」となり、「以爲・惟謂」と通じて「オモフ・オモフニ・オモヘラク」となる。又

前置詞として「ヨリ」と訓み自・從に通ず。

以長沙往。史記。

これに「上」を附して「ヨリウヘ」の意を表はす。

子曰自行束脩以上吾未嘗無也。論語。

(五)有 動詞・助詞・名詞として用ひられる。動詞は自動の場合が普通で「アリ」と訓み、他動には「タモツ」「イウス」と讀む。名詞は音讀して「有スルモノ」又は「有スル所」の義を表はす。助詞としては「又」と

音通によりて、無意義に名詞の上に冠し、或は數と數との中間にありて接續的の用法となる。

大行之陽有盤谷。八家文。

有恒産者有恒心。孟子。

有國有家者不患寡而患不均。論語。

以其所易其所無者。孟子。

尺地莫非其有。孟子。

有虞氏姚姓。十八史略。

得爲諸侯之盟主者百有餘年。八家文。

有周。有夏。有衆。

有は全く接續詞「又」に用ひられることがある。又下の助動詞に連接する時は、恰も助動詞に用ひられたるが如くなれども、こは名詞形を承けたるものにして固より動詞なのである。

仲之書有記其將死論。鮑叔賓胥無之爲仁人。八家文。

故君子有不戰戰必勝矣。孟子。

(六)者 名詞・動詞・形容詞等に屬して人物・事・所を指す「モノ」と、名詞・代名詞・形容詞に連りて接續的用法をなす後置詞「ハ」「モノハ」「トハ」「ナルモノハ」と、動詞・助動詞・形容詞を承けて名詞句を形成する關係的助字「ハ」「モノ」「コト」と、否・不・然・何に接して「則」の如き働をなす「バ」「ハ」と、又熟語をなして上文を助けるもの、例へば頃者・向者の如きがある。

吾黨之直者異於是。論語。

以其小者信其大者。孟子。

夫勇者可以施之於怯。八家文。

有司者治之耳。孟子。

先者景季後者高綱。日本外史。

集大成也者金聲而玉振之也。孟子。

今之欲王者猶七年之病求三年之艾也。孟子。

范增數目羽舉所佩玉玦者三。十八史略。

不殺者爲楚國患。史記。

貨悖而入者亦悖而出。大學。

「則」の如く用ひられたる所のものも尙「モノ」と訓みて通ずる。

(七)亡 亡は「ニグル」の動詞を本義とする。又無に通じて「ナシ」と訓み、喪と同じく「ウシナフ」と訓じ、

自動詞「ホロブ」他動詞「ホロボス」の訓があり、「ウシナフ」の自動詞「ウス」とも讀む。

蕭何聞信亡自追之。十八史略。

不幸短命死矣。今也則亡。論語。

自度比至盡亡之。十八史略。

唇亡則齒寒。戰國策。

(八)道圃こは本來の道路の義より、汎く道德・學術・方法・教訓・流派及び行政上の區別等の名詞に用ひ、又動詞として導に通じて「ミチビク」、言と同じく「イフ」、治爲の如く「ヲサム」、由の如く「ヨル」と

訓む。

是或一道也。孟子。

如切如磋者道學也。大學。

道之以政、齊之以刑、民免而無恥。論語。

道千乘之國、敬事而信、節用愛人、使民以時。論語。

玄鶴二八道南方來。韓非子。

道學問。中庸。

(九)顧 本來動詞「カヘリミル」と訓むべきであるが、又副詞「カヘツテ」「オモフニ」などとも訓む。古く雇に通用して「ヤトフ」と讀んだこともある。

王顧左右而言他。孟子。

顧安所得酒乎。後赤壁賦。

噲老不聽政顧而爲臣。十八史略。

又「念」と同じく「オモフ」とも訓む。

顧乃德。書經。

不顧其後。詩經。

(十)惟 維・是・伊と同一の助辭に用ひられて「コレ」と訓み、唯と通じて「タダ」「ヒトリ」と讀む。又「オモフ」「オモンミル」の動詞となり、「オモフニ」「オモンミルニ」の副詞となる。

濟河惟兗州。書經。

民惟恐王之不伐。好勇。孟子。

伏惟 聖朝以孝治天下。續文章軌範。

以上は單に日常用ひらるる主要なるもの數種に就きて説明したるのみ、同一文字にして多數の異義を有するもの殆んど漢字の大半を占め、之が詳細なる説明は辭書に待つの外はない。漢字は既に述べたるが如く、語尾の變化なくして諸種の品詞に轉用せられるが故に、文中の位置を考察して其の應用に留意すべきである。

### 第二節 異字同用

異なる文字にして其の用法及び意義の上に全く同一なる場合がある。特に代名詞・助動詞・前置詞・終詞に於て著しいものである。

代名詞 一、人代名詞自稱 我・吾・予・余は主語・客語・所有格の何れにも同用せられる。

吾日三省吾身。論語。  
 我善養吾浩然之氣。孟子。  
 予未嘗不在。八家文。  
 予弟子由適在濟南。八家文。  
 好我者勸、惡我者懼。左傳。  
 一、人代名詞對稱 女・汝・爾・若・而も主語・客語・所有格に互用せられる。  
 女爲君子儒、無爲小人儒。論語。  
 汝時尤小、當不復記憶。八家文。  
 嫂常撫汝。八家文。  
 子曰由誨女、知之乎。論語。  
 爾愛其羊、論語。  
 如或知爾、則何以哉。論語。  
 且而與其從辟人之士、豈若從辟世之士哉。論語。

三、指示代名詞 是・此・斯は主次・賓次・冠次に通じて何れにも同用せられる。「之」は主次に立つことなく、賓次・冠次にのみ用ひられる。  
 是可哀也、無罪之人爾。八家文。  
 氣質則病去、此自然之効也。八家文。  
 斯吾之所謂道也。八家文。  
 魯無君子者、斯焉取斯。論語。  
 斯人而有斯疾也。論語。  
 修之來此、樂其地僻、而事簡。八家文。  
 造次必於是、顛沛必於是。論語。  
 四、疑問代名詞 何・安・焉・奚・惡・曷は皆同一に疑問文に使用せられる。  
 先生將何之。孟子。  
 仲尼焉學。論語。  
 夫子惡乎長。孟子。  
 こは動詞と位置を轉じて副詞的に用ひられたるもの、若し「ナンズ」「イズクンズ」と訓まば純然たる



疑問副詞である。

以上の外疑問代名詞（人代名詞不定稱）孰・疇・誰も主格・賓格に通じて同用せられる。但し疑問詞の目的は動詞に先立つことが多い。

孰カ謂フ微生高直ト。論語。

吾非ス斯人之徒與ト。而誰與ト。論語。

孰可キ使ハス也。左傳。

子曰吾之於ケル人也、誰カ毀誰カ譽フ。論語。

夫孰ハ與者爲レ誰ト。論語。

**動詞** 比較を表はす「如・猶・若・由」及類似の「似」は殆ど同一意義に用ひられる。

君之視ル臣如ク手足、則臣視レ君如ク腹心。孟子。

性猶ホ杞柳也。孟子。

屏シテ氣似ク不息者。論語。

禹思フ天下有ニ溺者、由シト己溺ラス之也。孟子。

これらは疑問副詞「何」と結合して、動詞と同じく述語の位置に立つ。如何・若何・何如・何若・奈何が即ちこれ。或は又疑問副詞となりて文の上にも位し、又下なる述語の位置にもつく。又此の二字の間に客語を挟んで上下相應するものも同義である。

帝曰予聞如何。書經。

或曰以德報怨何如。論語。

奈何以祖宗之天下爲ニ犬戎之天下。文章軌範。

棄之若何。史記。

公伯寮其如命何。論語。

こは文法篇中、疑問代名詞の條にも述べてある。然し「如何・何如」は副詞用法が一般で、先きの疑問代名詞「如何ナルモノ」「如何ナルコト」の場合には寧ろ稀である。

**助動詞** 一、否定の助動詞「不・弗」は全く同一用法である。

獲ラル乎上ニ有道、不レ信ニ乎朋友、不レ獲ニ乎上ニ矣。中庸。

有レ弗ル學、學之弗レ能、弗レ措也。中庸。

無・母・勿・莫・亡・罔・靡・蔑等も亦打消に用ひらるることは同一である。前者は「ズ」の純然たる打消、

後者は「ナシ」の他に「ナカン」の禁止を表はす。されど「不」を「サレ」と訓まば略之に類するものである。

無<sub>レ</sub>若<sub>ニ</sub>宋人<sub>一</sub>然<sub>ル</sub>。孟子。

此天子氣也、急擊勿<sub>レ</sub>失。史記。

母<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>敬。禮記。

其去<sub>ニ</sub>剛卯<sub>一</sub>莫<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>佩。除<sub>ニ</sub>刀錢<sub>一</sub>勿<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>利。漢書。

犛牛之子辭<sub>レ</sub>且角<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>勿<sub>レ</sub>用。山川其舍<sub>レ</sub>旃。論語。

人莫<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>其子之惡<sub>一</sub>。大學。

君子無<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>而不<sub>ニ</sub>自得<sub>一</sub>。中庸。

本來「無」は「有」の對で名詞に冠して叙述の用をなせども、「莫」及び其の他には此の用法がない。川言の名詞形即ち「……モノ」「……コト」に連るは、一般に「無・莫」其の他も同一である。

二、指定の助動詞 可・宜・當・須は同一意義に用ひられる。

道也者不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>臾<sub>一</sub>也。中庸。

惟仁者宜<sub>レ</sub>在<sub>ニ</sub>高位<sub>一</sub>。孟子。

士當<sub>ニ</sub>先<sub>一</sub>天下之憂<sub>ニ</sub>而憂<sub>レ</sub>後<sub>ニ</sub>天下之樂<sub>一</sub>而樂<sub>レ</sub>也。文章軌範。  
常<sub>ニ</sub>須<sub>一</sub>稍存<sub>ニ</sub>贏餘<sub>一</sub>以備<sub>レ</sub>不虞<sub>一</sub>。小學。  
「應」は未來を推量して言ふ字なれども、「須」と相通する。







今 イマ、 琴・衾・岑・吟・矜・矜・陰。	令 ヨシ、 ホキテ、 苓・伶・囹・命・領・翎・零。	印 ツカ、 ツカル、 筇・昂。	卯 ウ、 菹・柳・聊・昂・質・劉・留。	爪 ツメ、 箠・抓・爬。	瓜 ウリ、 孤・狐・呱・瓜・孤・瓢。	田 タ、 佃・鋤・苗・描・猫・廣・雷・富・當・奮・畜・蓄。
由 ヨル、 岫・袖・抽・紬・廟・廟・届・宙・軸。	同 オナツ、 侗・洞・洞・桐・筒・銅。	白 ウス、 舊・舅・春・寫・毀・兒・烏・渴・昇。	臼 コマヌク、 叟・嫂・與・興・學・哀。	聿 サス、 スキ、 挿・錘。	夬 フミ、 ヒラク、 癸・登・發・澄・證・癢・廢。	末 スエ、 沫・抹・昧・昧。

未 イマダ、 ヒツジ、 味・妹・昧・昧・寐。	朱 アケ、 誅。 侏・株・珠・殊・殊・殊・殊・殊・殊・茶。	甲 キノエ、 押・押・岬・岬・岬・岬・岬。	申 サル、 伸・呻・坤・紳・神・紳。	戎 エビス、 イクサ、 穢・絨・賊。	戒 イマシメ、 械・誠。	尢 モチアハ、 恍・述・術・穉。	求 モトム、 球・述・救・毬・裘。
丞 ツグ、 丞・蒸・極。	亟 スミヤカ、 極。	吉 ヨシ、 估・結・詰・髻・頤。	告 ツグ、 誥・酷・睿・魯・鶴。	束 イバラ、 刺・策・棘・棗。	束 タバマ、 悚・速・救・刺・辣・賴・喇・嗽・整。	良 ヨシ、 ウシトラ、 垠・恨・根・痕・痕・眼・銀・齷・艱。	圭 タマ、 卦・佳・涯・崖・街・闐・哇・蛙。

住

フルトリ、唯推惟催催翟雉隻、雀雍雖

匈

ムネ、サワグ、匈胸

甸

スエモノ、陶掬陶菊綯

甸

トドロク、鞣鞣

匍

ハフ、匍

匍

ハフ、匍

豕

キノコ、家豚蒙豪遮噓據醜猪、啄涿掾琢

圉

幸

小羊、達撻闕

易

カフ、エキ、場惕賜楊錫剔

易

アガル、場揚楊傷殤觴湯腸場盪

奉

マテ、マツル、捧捧

奏

カナヅ、マウス、湊榛

秦

ヤスシ、榛漆蓂螻臻

秦

國名、榛漆蓂螻臻

巨

大、拒炬拒矩距詎

臣

ツカヘ人、臥官臨賢藏鹽

匱

ヨトガヒ、姫熙頤

角

ツノ、均确桷觜嘴

甬

ワク、桶涌筒蛹踊痛誦鱗

甫

ハジメ、浦捕補哺蒲脯舖輔

岡

ヲカ、綱鋼剛

閎

アマミ、網惘魍

幸

サイワヒ、倅悻孽翠釋驛澤執報

辰

タツ、振宸晨娠震唇農

展

ノア、碾輓

東

ヒガシ、凍棟竦陳

東

エラア、棟練鍊諫闌蘭欄

召

オトシ穴、陷窞菴閤炤詔

昏

クム、滔稻蹈韜

免

ママガル、俛挽晚婉勉冕

兔

ウサギ、菟冤逸譏纒

林

ハヤシ、淋痲霖焚焚彬

杵 アサ、 麻・麿・靡・磨・魔。	秣 マバラ、 歷・曆・震。	象 易ノ語、 椽・篆・緣・椽。	段 ワカツ、 假・瑕・遐・蝦・霞・霞。	卓 スグル、 悼・掉・掉・掉・掉・罩。	章 シルシ、 障・幃・璋・樟・璋・璋・璋。	覃 オヨブ、 潭・簪・蕈・蟬・譚。	專 シク、 傅・溥・博・縛・薄・簿。	專 モツバラ、 搏・甄・傳・團・轉。	侯 キミ、 喉・猴・餓。	候 ウカガフ、 峁。	執 トル、 贊・摯・鷲・衰。	執 ウワザ、 藝・勢・熱。	卒 シモベ、 啐・碎・悴・悴・淬・粹・粹・粹・粹・粹。	率 スキユツ、 繹・蟀。
------------------------	---------------------	-----------------------	---------------------------	---------------------------	-----------------------------	-------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------	------------------	----------------------	---------------------	-----------------------------------	--------------------

商 ハカル、 アキナヒ、 滴・嫡・適・敵・謫・鎬。	高 タカシ、 塙・嗃・蒿・嵩・稿・稿・稿・稿。	喬 オゴル、 僑・橋・橋・橋・蕎・蕎・驕・驕・驕・躑。	尙 モトル、 塙・渦・媯・媯・媯・媯・媯・媯。	高 カナヘ、 隔・膈・鬻。	門 カド、 問・閏。	門 トツ、 鬧・闕・闕・闕・闕。	輿 シバラク、 庾・庾・英・映・諛。	叟 オキナ、 搜・搜・瘦・瘦・嫂・嫂・艘・艘。	夷 エビス、 俛・洩・痲・痲・躑・躑。	重 オモシ、 種・腫・腫・種・腫・腫。	童 ソラベ、 憧・憧・撞・撞・撞・撞。	高 ハナル、 澗・璃・璃・螭・螭。	禽 トリ、 擒・擒。	敵 ヤブル、 蔽・弊・幣・斃・撤・瞥・瞥・鼈。	敵 アキラカ、 廠・塹。
------------------------------------	-------------------------------	-----------------------------------	-------------------------------	---------------------	------------------	------------------------	--------------------------	-------------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	-------------------------	------------------	-------------------------------	--------------------



豊 <sup>レイ</sup>	豊禮、 禮・禮・禮。	豊 <sup>ホウ</sup>	ユタカ、 豊・豊。
下 <sup>カ</sup>	上、降、一命。	卜 <sup>ペン</sup>	一急、一和。
冶 <sup>ヤ</sup>	鍛、陶、姚、遊。	治 <sup>チ</sup>	自、明、政。
杯 <sup>ホウ</sup>	一之土。	杯 <sup>ハイ</sup>	一洗、一酒、一盤。
收 <sup>シュ</sup>	入、一支、一拾、一容。	牧 <sup>ボク</sup>	一民、一畜。
早 <sup>サウ</sup>	一晩、一熟、一稻。	阜 <sup>オウ</sup>	一隸、一衣。
沁 <sup>シン</sup>	一漬。	泌 <sup>ヒツ</sup>	分。
灸 <sup>キウ</sup>	一術、一鍼。	灸 <sup>キウ</sup>	一親、一膾。
昆 <sup>コン</sup>	一弟、一後。	昆 <sup>コン</sup>	一茶。

届 <sup>カイ</sup>	一書。	届 <sup>ラン</sup>	(アナ)
佯 <sup>ヤウ</sup>	一狂、一愚。	佯 <sup>ヤウ</sup>	一徇。
冠 <sup>クワン</sup>	一冕。	寇 <sup>コウ</sup>	一讐、一入。
捐 <sup>エン</sup>	一義。	損 <sup>ソン</sup>	一減、一害。
清 <sup>セイ</sup>	一温。	清 <sup>セイ</sup>	一淨、一洗。
班 <sup>ハン</sup>	一別、一列。	斑 <sup>ハン</sup>	一、一紋。
修 <sup>シュ</sup>	一身、一道。	脩 <sup>シュ</sup>	一束、一短。
勒 <sup>ロク</sup>	一銘、一抑。	勤 <sup>キン</sup>	一勉、一勞。
毫 <sup>カウ</sup>	(地名)	毫 <sup>カウ</sup>	一秋、一末。

撰 <sup>セン</sup>	競 <sup>キョウ</sup>	裏 <sup>リ</sup>	飭 <sup>チヨク</sup>	偏 <sup>ヘン</sup>	羨 <sup>イ</sup>	崇 <sup>スホ</sup>	裕 <sup>カフ</sup>	萩 <sup>テキ</sup>
一集、一述。	戰々一。	表、一面。	戒。	一頗。	(地名)	(タタリ)	一祀。	(オギ)
選 <sup>セン</sup>	競 <sup>キョウ</sup>	裏 <sup>リ</sup>	飾 <sup>シヨク</sup>	徧 <sup>ヘン</sup>	羨 <sup>セン</sup>	崇 <sup>スホ</sup>	裕 <sup>カフ</sup>	萩 <sup>シヨ</sup>
一舉、一拔、一擇。	一爭、一馬。	一頭、一飯。	裝、修。	普。(遍)	一望、一飲。	一高、一拜。	一衣。	(ハギ)

歐 <sup>オウ</sup>	杼 <sup>チヨ</sup>	羈 <sup>キ</sup>	籍 <sup>シヤ</sup>	績 <sup>ヒキ</sup>	奮 <sup>フン</sup>	疆 <sup>キヤウ</sup>	穀 <sup>コク</sup>	撒 <sup>サフ</sup>
一米。	一情詩。	一絆、不。	慰、一口、狼。	成、功、紡。	一發、一闘。	勉、一弱。(強)	(カウソ)	一水車。
歐 <sup>オウ</sup>	杼 <sup>チヨ</sup>	羈 <sup>キ</sup>	籍 <sup>シヤ</sup>	蹟 <sup>セキ</sup>	舊 <sup>キウ</sup>	疆 <sup>キヤウ</sup>	穀 <sup>コク</sup>	撒 <sup>サフ</sup>
一打。	一機、一軸。	一旅、一愁。	一戸、一沒、一甚。	一筆、一舊。	一故、一跡。	一域。(境)	五。一物。	一兵、一廢。

漫 <sup>マン</sup>	億 <sup>オク</sup>	襄 <sup>シヤツ</sup>	壤 <sup>シヤツ</sup>	榦 <sup>カン</sup>	鈞 <sup>テウ</sup>	俳 <sup>ハイ</sup>	盲 <sup>クワウ</sup>	市 <sup>フツ</sup>
遊、歩。	千、兆。	贊。	土、擊。	植。	魚。	優、諧。	膏。	徐(人名)
慢 <sup>マン</sup>	憶 <sup>オク</sup>	曩 <sup>ナツ</sup>	攘 <sup>シヤツ</sup>	榦 <sup>カン</sup>	鈞 <sup>キン</sup>	俳 <sup>ハイ</sup>	育 <sup>イク</sup>	市 <sup>サツ</sup>
自、緩。	記。	日。	夷、竊。	枝、事。	陶、天。	徊。	教。	(匝ノ本字)
謾 <sup>マン</sup>	臆 <sup>オク</sup>	囊 <sup>ナツ</sup>	壤 <sup>クワイ</sup>	榦 <sup>アツ</sup>	鈞 <sup>コウ</sup>	俳 <sup>ハイ</sup>	盲 <sup>マウ</sup>	市 <sup>シ</sup>
欺。	胸、測。	中、括。	破。	旋。	(カギ)	斥。	目。	場、都。

濯 <sup>ダク</sup>	激 <sup>ガキ</sup>	僭 <sup>セン</sup>	辨 <sup>ベン</sup>	侍 <sup>ジ</sup>	羸 <sup>エイ</sup>	啜 <sup>テツ</sup>	糜 <sup>キ</sup>	戊 <sup>ゴウ</sup>
洗。	感。	越。	別。	從。	餘。	(ナム)	下。	申。
擢 <sup>ダク</sup>	檄 <sup>ガキ</sup>	僭 <sup>セン</sup>	辨 <sup>ベン</sup>	待 <sup>ダイ</sup>	羸 <sup>エイ</sup>	綴 <sup>テツ</sup>	糜 <sup>ヒ</sup>	戊 <sup>ゴウ</sup>
拔。	文。	沈。	(勉)	遇。	弱。	字。	披。	衛。
權 <sup>ケン</sup>	徼 <sup>ケウ</sup>	僭 <sup>セン</sup>	辯 <sup>ベン</sup>	持 <sup>ヂ</sup>	羸 <sup>エイ</sup>			
(棹)	邊。	痛。	護。	維。	得。			
躍 <sup>ヤク</sup>	邀 <sup>エウ</sup>	諧 <sup>シヤク</sup>	瓣 <sup>ベン</sup>	特 <sup>トク</sup>	羸 <sup>エイ</sup>	掇 <sup>テツ</sup>	糜 <sup>ヒ</sup>	戊 <sup>ゴウ</sup>
跳。	擊。	言。	花。	奇。	(裸)	拾。	乳。	(イヌ)亥。
糶 <sup>テフ</sup>	繳 <sup>シヤク</sup>					輟 <sup>テツ</sup>	糜 <sup>ヒ</sup>	戊 <sup>ゴウ</sup>
(ウリ米)	(舞)					(ナム)	羈。	(斧)
糶 <sup>テキ</sup>	繳 <sup>ケウ</sup>	澹 <sup>サン</sup>	辯 <sup>ベン</sup>	恃 <sup>ジ</sup>	羸 <sup>エイ</sup>			
(カヒ米)	日。	然。	髮。	怙。	蝶。			

僚	温	瑩	桃	埃	儋	援	溢
同。	暖。	瑩。	輕。	(ホコリ)	石之儲。	澤。	美。
寮	愠	瑩	跳	挨	澹	暖	隘
舍。	色。	瓊。	躍。	撈。	静枯。	(暖)	(喉)
僚	癩	瑩	桃	唉	據	媛	隘
亂。	疫。	廻。	(モモ)	(ア)	(儋)	オ。	(狭)
僚	温	營	挑	欸	瞻	援	縊
(夜獵)	禍。	經。	戰。	乃。	望。	助。	死。
僚	縹	蝶	挑	欸	瞻	緩	鎰
(明)	袍。	蝶。	(水名)	晤。	(足)	急。	(三十兩)
僚	蕙	蕙	姚		瞻	媛	謚
原ノ火。	(水草)	蕙。	(美、姓)		(肝)	(玉環)	靜。
遼	蕙				譚	媛	謚
遼。	蕙。				(嚙)	(詐、忘)	(笑)

曷	宅	惶	齊
(何)	(蛇ノ古字)	(惶、逞)	家。
瞭	吒	惶	齋
明。	叱。	一。	戒。
瞭	吒	徨	儕
榮。	(他・宅)	一。	輩。
鸚	吒	惶	噤
鸚。	(曳)	恐。	(嘗)
葛	沱	隍	擠
藤。	沱。	(危)	(忿)
葛	吒	煌	擠
鼓。	(吒)	一。	排。
蜎	蛇	惶	濟
(木クヒ蟲)	足。	(ヒカヒ)	世、



刺	シ、史、殺。セキ、客、舟。	施	シ、セ、與、設。イ(ウツル、ノブ、ナナメ)
胃	ボウ、險、覆。ホク、食、頓。マイ(瑁)	洒	サイ、掃。シヤ、落。
拂	フツ、除、底、曉。ヒツ(弱)	食	シヨク、飲、物。シ、箒、蔬。イ、鄴(其人)
兒	ジ、ニ、童、戲。ゲイ(倪)	契	ケイ、約、書。セツ、稷(人名) キツ、丹。
盾	ジュン、矛。トン、趙(人名)	亟	キヨク、(速) キ、(タビタビ)
相	シヤウ、宰、將。サウ、人、家。	哇	アイ、ア(吐、淫聲) ワ(小兒ノ聲) カイ(喉塞ル)
奎	ケイ、星、運。キ(跬)	差	サ、等、錯。シ、參、池。
帥	スキ、將、元。ソツ、統、權帥。	陶	タウ、器。ヤウ、阜(人名)
度	ド、法、量。タク、付、支。	洩	セツ、漏(慣用音又エイ) エイ、
咽	エン、イン、喉。エツ、鳴、塞。	殺	サツ、生、伐。サイ、降、禮。

衰	スキ、盛、類。サイ(衷服) シ、(衰減)	蛇	ダ、蝮、龍。イ、委。
桴	フ、ホウ、取、搗、拊。フ(擊)	責	セキ、任、詰。サイ(債)
嘔	セン、(歎) エン、(急議) タン(誕)	乾	ケン、坤。カン、燥。
純	ジュン、粹。ドン(東)	頃	ケイ、日、食、萬。キ、步(跬)
矜	キヨウ、持、式、恤、街。キン(矛ノ柄)	敦	トン、厚、固、睦。タイ(獨宿) タン(衆群)
勅	ライ、(ネギラフ) チヨク(勅)	參	サン、拜、考、五。シン、差。人(藥名)
祝	シユク、福、巫。シウ、儀、言。	專	セン、有、用、門。タン(聚)
畜	チク(蓄) キク、慣用音チク(飼養) キウ(家畜)	媿	ベン、分。パン、媿。
射	シヤ、注、御、彈。セキ(ユミイル同上)	率	ソツ、シユツ、直、先。スキ(帥、將) リツ(律)
莫	エキ(イトフ、無ハ律名) ヤ、僕(官名) 姑山。	培	バイ、養、植。ホク(カサヌ、ソムク)
	バク、大、邪。ホ(暮)		ホウ、墜。ヒウ、フ(人名)

粥	シユク、餽。イウ(露) イウ、輩(人種名)	湯	タウ、池、沐、錢。シヨウ(洪水貌)
單	タン、純、調田(人名) セン(子(匈奴王名))	辟	ヘキ、公(君) 徵(召) 法(法律) 言(辭) 放(ヒガム) ヒ(避) ヒ(響) ヘイ(屏) 曉(ビヤク) 關(關) 擊
馮	ヒヨウ、河、陵、虛。ハウ(大) フ(姓)	湮	イン、減、祀。エツ(塞)
著	チヨ、述、明、顯。チャク、土、服。	滑	クワツ、脱、車。コツ、流水(一) 稽。
惡	アク、善、人。ヲ、憎。ヲ(安、何)	輿	アウ、蓋。ヨク、儀。イク(澳、煥)
景	ケイ、慕、風。エイ(影)	貉	カク、狐(ムジナ) ハク、蠻(夷狄)
畫	グラ、圖、繪。クラク、計、一。	葉	エフ、枝、末。セフ(地名、人名)
賁	ホン、孟(人名) ヒ、臨。フン(憤)	賈	コ、商、船。カ、誼(姓)
準	ジュン、繩、標。セツ、隆(鼻)	焯	キ、焯、一。キ(焯)
屠	ト、殺、場。シヨ休(匈奴國王名)	盟	メイ、同、聯。モウ(孟、地名)

塞	ソク、閉、充。サイ、邊。	搏	タン、土、飯。セン、心(專)
溺	テキ、沈、沒。ネウ(尿)	幕	バク、マク、府、僚。マン(錢背) ベキ(覆)
較	カウ、然、駁。カク、比。	興	コウ、勃、中。キヨウ、味、比。
啞	アク、一(笑語) ア(瘖、鳥聲)	徵	チヨウ、兵、發、象。チ(律五音ノ一)
零	レイ、落、丁。レン(先、國名)	暴	パウ、亂、風。バク、ホク、露。
摧	カク、商。クラク(摧)	質	シツ、性、品。チ(質物) シ(贊)
齊	セイ、一、國。サイ(齋) シ、衰(喪服)	數	スウ、理、學。サク、奇、一。ソク、一、咎。
摺	セフ、尺、疊。ラフ(拉)	樂	ガク、音、禮。ラク、和。ガウ(願、望)
厭	エン、世、苦。エフ、アフ(厭) オン、離。	厲	レイ、色、語。ライ(癩)
說	セツ、論、學、明。ゼイ、客、遊。エツ(悦) 傳(人名) タツ(脱)	積	セキ、善、著。シ、委。

錯	サク、一雜、失。ソ、擧。晁(人名)	藉	シヤ、慰、醜。セキ、狼、一甚。
絲	ヤウ、一役、阜。イウ(由) ナウ(卦爻ノ名)	謳	オウ、一歌、一謠。ク(煦)
澗	シヨウ、(齊、蜀ノ川名) メン、メン、一池(川名)	識	シキ、シヨク、智、認。シ(誌)
澳	イク、一港。アウ、一漢。	櫟	レキ、一社、樗。ヤク、一陽(縣名) シヤク(地名)
趨	スウ、シユ、一歩、一舍、一拜。ソク(促)	簿	ホ、帳、一籍。ハク、糜。
繆	ピウ、綱。ホク(穆)	麗	レイ、美。リ(離)
懷	リン、一然、一慄。ラン(窮苦)	瀑	バク、一布、一注。パウ、一雨、一沫。
疑	ギ、一然。ギヨク、岐。	籍	セキ、戸、書。シヤ(藉)
釐	リ、一革。キ(倍、禧)	譖	セン、一語。セフ(譏)
織	シヨク、紡、機。シ(織)	霸	ハ、一府、一氣。ハク(月輪)

讀 トク、一書、一木。トウ、句。

灑 サイ、一掃。シヤ、一落。

### 三字音假名遣表

い	以・衣・依・矣・巳・易・伊・怡・怡・怡・怡・怡・移・意・異 夷・姨・姨・池・迤・倚・椅・頤・醫。	いん	允・尹・音・印・引・蚓・因・茵・姻・寅・飲・胤・隱・湮 堙・淫・姪・霽・陰・蔭・殷・感。
ゐ	委・位・爲・倭・萎・透・遺・畏・威・胃・涓・娟・謂・唯 帷・惟・維・韋・圍・違・緯・蔚・蔚・慰・慰。	ゐん	員・殞・頤・韻・院。
いさ		エ	衣・依。
ゐさ	域。	え	惠・慧・回・廻・會・檜・繪・畫・淮・穢・壞。
いく	育・郁。	えい	永・咏・泳・詠・榮・榮・榮・營・營・榮・榮・曳・洩・莢・映。





かつ	易・喝・歇・渴・葛・蝎・羯・裼・刺・睛・轄・憂・嘎・黠。	さう	久・灸・玖・疚・楛・咎・丘・蚯・九・仇・究・鳩・休・貅・倘・臼・舅・舊・求・述・救・裘・毬・球・臭・嗅・朽・糾・厥・齋。
がつ	合。	ぎう	牛。
くわつ	活・括・刮・刮・管・蛞・闊・滑・猾・密。	きゆう	宮・弓・穹・躬・窮。(又、きう)
ぐわつ	月。	きふ	及・汲・吸・笈・級・炭・泣・急・給・翁。
かん	干・扞・杆・汗・罕・刊・奸・罕・旱・肝・悍・駢・軒・幹・甘・邯・疴・紺・紺・東・諫・函・函・咸・喊・絨・感・憾・勘・戡・敢・橄・瞰・間・閑・簡・澗・爛・澗・監・檻・艦・鑑・漢・艱。	きやう	<b>キヨ、ギヨ</b> 兄・況・况・悅・貶・鏡・叩・卿・鄉・嚮・響・嚮・向・香・羌・杏・姜・京・亨・享・匡・狂・誑・強・強・疆・樞・董・竟・境・鏡・更・梗・敬・警・驚・慶。
がん	岩・巖・員・燕・合・荅・頷・岸・眼・額・雁・贖。	ぎやう	行・仰・迎・形・刑・印。
ぐわん	丸・紈・原・願・元・玩・菀。	きよう	凶・兇・勾・胸・恂・共・恭・恭・供・拱・興・恐・蚤・甕・鞏・閔・兢・矜・興・叩・節。
	<b>キユ、ギユ</b>		

ぎよう	凝・鳴。	かう	交・交・咬・蛟・郊・效・倣・校・挾・絞・較・蛟・咬・狡・江・扛・扛・缸・項・缸・缸・巧・孝・教・醉・哮・向・好・考・攻・肴・庚・昂・耕・耕・耿・莖・膏・講・香・滑・殺・亢・伉・抗・沆・抗・航・航・告・浩・諧・皓・嘗・行・衡・亨・享・更・梗・硬・硬・硬・剛・剛・鋼・鋼・幸。
けう	交・校・皎・孝・教・叫・梟・喬・蕎・僑・嬌・嬌・橋・矯・矯・矯・矯・橋・橋・堯・僬・僬・僬・曉・曉・翹。	ごふ	劫・糞。
げう	叶・協・脅・脇・夾・俠・夾・挾・陝・峽・狹・頰・缺・缺・愜・怯・劫。	こう	工・功・攻・虹・缸・缸・紅・鴻・貢・口・扣・叩・鈕・孔・吼・后・后・垢・逅・甸・苟・拘・鉤・狗・弘・肱・肯・紘・寇・後・厚・薏・興・侯・候・喉・猴・互・恆・空・倥・窳・恂・控・洪・哄・烘・蕞・簞・構・構・購・購。
げふ	業。	かふ	合・恰・洽・恰・恰・閤・閤・甲・匣・岬・脚・夾・峽・陝・壺・闔。
けふ	<b>コ、ゴ</b>	がふ	合。
かう		くわう	光・恍・晃・幌・宏・絃・臯・惶・惶・煌・煌・徨・徨・荒・恍・黃・橫・潢・鬻・盲・蕪・廣・曠・曠・曠。

ヂ、ジ

じ 二・貳・而・兒・次・似・事・自・耳・餌・字・士・仕・示・寺・侍・侍・時・時・茲・慈・滋・磁・爾。

ぢ 治・地・尼・痔・持・悞。

じき 食。

ぢき 直。

ぢく 竺・軸・軸・紐・紐。

じつ 日・實。

ぢつ 呢・暖。

じゆ 需・儒・孺・孺・受・授・授・樹・就・豎・誦・壽・珠・咒・戊。

ぢゆ 粥・熟・塾・宿。

ぢゆく 戎・述・術・贖・恤・郵。

ぢゆつ 朮・恍。

じん 人・仁・神・腎・壬・任・在・刃・切・忍・甚・構・尋・尋・迅・訊・盡・儘・燼・噉。

ぢん 沈・陣・陳・塵。

ぢゆん 盾・楯・循・淳・惇・諄・醇・巡・順・純・遵・馴・旬・殉・詢・洵・荀・筍・閏・潤・淮・準。

ぢや 蛇・邪・躄・關・者。

ぢや 如・恕・絮・序・舒・助・鋤・徐・汝。

ぢよ 女・孺・除。

ぢやく 石・昔・惜・鵲・籬・雀・寂・若・惹・弱・弱・弱・尺。

ぢやく 著・擲・躑。

ぢよく 辱・薜・薄・薄・縛。

ぢよく 匿・慝・濁。

シヨ、ジユ

しう 秋・愁・萩・湫・愀・鞅・州・洲・酬・秀・銜・周・週・脩・逾・攸・修・脩・舟・臭・羞・洩・饒・蒐・醜・袖・岫・囚・泗・繡。

じう 柔・獸・蹂。

しふ 葦・緝・緝・緝・習・摺・拾・十・什・汁・執・集・澁・濕・襲。

じふ 十・什・汁・拾・入。

しゆう 主・宗・崇・終・衆。(又ハシラ)

じゆう 戎・絨・充・銃・從・縱。(又ハジウ)

ぢゆう 重・住・頭。(又ハチウ)

シヨ、ジヨ

しやう 上・正・政・証・鉦・青・清・精・請・在・床・井・省・聖・商・牀・妝・尙・倘・掌・嘗・裳・賞・償・昌・倡・菖・唱・晶・猖・莊・裝・將・獎・養・善・墻・牆・相・廂・湘・章・彰・障・璋・樟・象・像・傷・觴・瘍・傷・祥・詳・翔・生・笙・性・星・猩・腥。

じやう 上・狀・淨・情・清・成・城・尙・嘗・常・嫦・襄・壤・攘。

文字篇 字音假名遣表

しょう	升・昇・陞・丞・承・松・訟・頌・棟・竦・從・懲・聳・腫・躡・鐘・鍾・衝・春・勝・稱・誦・誼。	でう	尿・條・溺・溺・瀉。
じょう	仍・冗・茸・丞・蒸・垂・刺・繩。	てふ	帖・捻・蕪・蕪・疊。
せう	小・少・抄・鈔・炒・肖・背・霄・逍・哨・悄・梢・消・硝・銷・鞘・稍・蛸・召・沼・招・招・韶・紹・韶・邵・照・焦・蕉・樵・礁・笑・椒・燒・蕭・嘯・瀟。	づ	ズ 手・受・誦・從・壽・數。
ぜう	蕘・逸・撓・繞・饒・擾・篠。	ぶ	ぶ 瑞・備・蕊・藥・隋・隨・髓・綾。
せふ	妾・接・接・接・接・接・捷・捷・悋・悋・憚・憚・攝・攝・接。	さう	ソ、ゾ 早・草・艸・爪・筮・爽・笙・掃・棗・喪・葬・雙・巢・剿・勦・窠・壯・焚・裝・莊・爭・爭・爭・錚・倉・倉・倉・蒼・創・槍・槍・槍・相・箱・箱・箱・霜・霜・霜・想・曹・曹・曹・槽・槽・槽・遭・操・操・操・藻・譟・搔・搔・蚤・蚤・蚤・蚤・嫂・嫂・嫂。
ぜふ	接。		
ぢやう	丈・仗・杖・定・錠・錠・錠・娘・讓・讓・揚・貞。		
ぢよう	濃・穰・醴。		

文字篇 字音假名遣表

ざう	臧・藏・藏・造・藏・象・像。	ちふ	厨・踰・鑰。(又ハちう)
ざふ	巾・匣・鍾・插・颯・嗶。	ちよ	整・整。
ざふ	雜。	ちやう	丁・打・灯・町・釘・頂・長・張・帳・帳・帳・漲・漲・暢・挺・停・聽・廳・鄭・提・提。
そう	宗・綜・綜・踪・棕・粽・崇・宋・送・走・嗶・嗽・嗽・樓・籤・徽・叢・恩・窗・窻・窓・總・聰・聰・會・僧・層・贈・增・憎・憎・憎・勿・忽・葱・奏・湊・奏・叟・叟・叟・瘦。曾・增・憎・贈。	ちよう	微・激・懲・家・塚・澄・重・寵。
ぞう	曾・增・憎・贈。	てう	刀・吊・釣・兆・挑・挑・挑・跳・跳・跳・銚・銚・銚・鳥・趙・凋・調・綱・彫・彫・彫・闕・闕・闕・超・超・朝・朝・紹・碧・肇・屨。
ちゆう	中・沖・沖・仲・忠・衷・蟲・柱・注・註・駐・株・殊・誅。	てふ	帖・貼・蝶・喋・喋・喋・喋・幟・幟・疊。
ちう	丑・紐・鈕・狴・寅・抽・紬・冑・肘・紉・耐・晝・儔・壽・嚙・稠・惆・綱。	と、と	ト、ド
ちゆう	啻・稠・惆・綱。	たう	刀・叨・叨・逃・桃・洮・唐・塘・糖・糖・餈・淘・陶・苟。